

ラインフォルトの見習 い使用人

まぎよっぺ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある意志のもと集められた少年少女は交わり、時にぶつかり合いながら己の道を見出していくことになる。トールズ士官学院特化クラスVII組、その場所で。一人の欠けた少年もまた。

目次

序章

始まりの春	1
赤い制服の生徒達	13
A R C U S	30
生じる違和感	41
ユースの矜持	65
first link	82
ルドルフとラインフォルト	102
第一章	
VII組の朝【一】	118
先達の教え	135
旧校舎の異変	162

第二章

技術棟での出会い	175
和解と不覚	185
実技テスト【二】	199
交易町ケルディック	216
大市の騒動	227
A班始動	240
見えてくる真相	253
自然公園のヌシ	266
決意と焰の太刀	283
氷の乙女	302
届く為に	314
VII組の朝【二】	335



序章

始まりの春

——ゴトン、ゴトンとレールの継ぎ目で車輪が独特の風情がある音を規則的に奏でる。

車窓の外にはのどかな街道風景が流れ列車を利用する多くの乗客達の気持ちを和らげていた。

しかしその中で一人の少女が落ち着かなげに腕を組み整った眉を僅かにひそめ苛立ったような態度を取っていた。

一部を髪留めでツーサイドアップの形にした腰まで届くブロンドの髪、身にまとうのは白と赤を基調とし袖には獅子の紋が入った儀礼的な趣のある服装。

列車内には少女の赤と異なり白や緑、一部の色調こそ違えどほぼ同様のデザインの服装をした少年少女が多い。

当然それは彼ら若い者の間で流行の格好などというわけではなく、所属を同じくする者ということを示している、正しくはこれからということになるが。

列車の停車地の一つであるエレボニア帝国近郊の小都市トリスタ、そこに設立された

トールズ士官学院こそが彼女達の目的地である。

揃いの服装は学院指定の制服であり、彼女らは七曜歴一二〇四年、三月三十一日のこの日に入学する新入生だった。

新入生達の多くはこれから始まる新たな生活への期待と興奮、そして緊張に胸を弾ませ相席になった同じ新入生と会話を弾ませたりしている。

だが表情を険しくした金髪の少女はじつと目を細めると、対面する席に座る同じ赤色の制服を身に纏った少年に猜疑心が滲み出しているような声音で問い掛けた。

「もう一度聞くけど、本つ当に母様の言い付けでタイミングを合わせたわけじゃないのね？」

そんな声を投げかけられた少年は困ったような苦笑いを少女へ向ける。

「勿論ですよ、僕だつてアリサお嬢様がトールズ士官学院に入学されると今日初めて知ったのですから、イリーナ会長からは何の言伝も受けておりません」

虚言ではないと示すように胸に平にした白手袋を嵌めた手をあて、薄い蒼の色をした髪を短く整えた少年がそう口にするると少女は肩を落として安堵したような息を漏らした。

「まったく、こっさり出てきたのに同じ列車に乗り合わせるなんて全部母様にばれてるのかと思つたわ」

「ですがお嬢様……どうして会長に黙って家を出るような真似をなさったのですか？」

少年の言葉に少女、アリサは目を車窓の方へと逸らして黙り込む。

彼女が胸の内での言葉をまとめているのだということ少年は察し答えを待つ。

そう間を空けずに少女は榛色の瞳に憂いの色を漂わせながら返答を返した。

「……とにかく今は実家から離れたかったのよ、母様に干渉されずに考える時間が欲しかった。学費もお祖父様が援助して下さったし」

その深刻な面持ちからアリサの行動に遊び半分などではない意思の固さを感じ取り少年は息を呑んだ。

付き合いが短いわけでもなく、それ故に自分が計り知ることの出来ない悩みを彼女が抱えていることも十分に理解していた少年は暫しの黙考の後、口を開く。

「分かりました、お嬢様がご自分でお考えになり選ばれた道ならば僕から言うことは何もありません、僕から会長の方へ報告することも差し控えさせて頂きます」

「——ふう、そうしてくれると助かるわ。いつまでも母様の目から逃れられるとは考えてないけど、一週間もしないうちに知られたら情けないどころじゃないもの」

自分の家出紛いの行為が報告されることを危惧していたらしくそこでようやくアリサは安堵の息をつき、その様子に小さく笑みを浮かべた少年を今度はジロりと睨む。

「それよりも、ルディ」

「はい、何でしょうお嬢様？」

「それよ、そのお嬢様っていうの。学院では……っていうか、トリスタに着いたら止めな
きゃ」

「えっ？」

「えっ、じゃないわよ。そんな呼び方されたら家のことがすぐ皆に分かつちゃうじゃない、私もしばらくは家名を名乗らないようにするから、あなたも黙ってなさいよね」

どうしてそんな面倒なことを、と聞きかけた少年だったが問いを口に出す前にその理由に思い当たる。

ルデイという愛称で呼ばれた少年、ルドルフは彼女の家であるラインフォルト家に使用人として雇われていた。

アリスの母は大陸でも三指に入る大企業でありエレボニア帝国を代表する技術メーカー、ラインフォルト社の経営主である。

抱える資産は並大抵の額ではなく、並のエレボニア貴族では及びもつかない。

貴族からしてみれば疎ましく、平民からしてみれば近寄りがたい、そんな家の子であるアリスは同年代の子らからも敬遠されてしまう羽目に遭っていたという。

学園で出会う人間が全てそんな反応を示すとは限らないが、彼女が帝国において知る者の居ないほど有名な家の名を語りたがらないのには無理からぬ理由があった。

「ですがこの呼び方がだめとなると……アリサ様とでも？」

「それじゃ大して変わらないじゃない！ この際アリサでいいわ、あなたも家に来て三年ぐらいになるんだから少しは慣れなさいよ、もう」

「ははは……善処します」

頭を片手で抱えるようにして相手の融通の効かなさを嘆くアリサ。

少しばかりきつい物言いだったが、ルドルフはぼつの悪そうな面持ちになりながらも嫌そうな素振りは見せず承諾する。

使用人とその雇用者家族という間柄のせいか、そのやり取りには気安いながら同年代の少年少女にしては一風変わったものがあつた。

「それにしても、あなたも士官学院に入学予定だったなんて驚いたわ。そういえばしばらく暇を取るとか言つてたわね」

「僕としても教育機関に通うことには特に興味無かつたのですが、日曜学校にも行つていなかったことに気を遣われたのか皆さんに強く薦められまして、トールズ士官学院には奨学金制度もあるということでしたからこちらに」

「日曜学校にも？ ……あつ」

その時、電子音が響くのに続けて間もなく次の停車地であり二人の目的地であるトリスタに到着するというアナウンスが流れた。

「はあ、まあいいわ、とりあえず降りましょ」

終点ではないトリスタに列車が留まる時間はそう長くない、話している余裕もなくアリサはため息を吐いて会話を打ち切った。

「はい、おじよ……アリサ、お荷物を——」

アリサの荷物を持つとうと伸ばしたルドルフの手がジロリと睨むような視線を向けられ半ばで止まる。

「いいわよ、自分の荷物ぐらい自分で持つわ、着いてくるなどまでは言わないけどそういう真似も学院では改めなさい」

にこりと微笑み善処します、とだけルドルフは答えた。

駅の構内を出た二人の視界に入ったのは白い花が咲き乱れる光景。

正面に見える公園をはじめ街のあちこちに植えられている広葉樹が鮮やかに花を開かせこの季節、春の訪れを祝っているかのようだった。

「わあ……綺麗ね、ライノの花、だったかしら」

工業が発達し近代的な整備の整った都市の出身なだけに街中でここまでの光景が珍しいアリサは歩きながらすつかりその光景に見入っていた。

ルドルフにしてもそれは同じで、街並みを彩る白い花の乱舞に視線を奪われずにはいられなかったが、一歩前を行くアリサにも注意を向けていた彼はその行く先の存在に気づき少女の背中に声を掛けた。

「アリサ、前を」

「え？……あつ」

前方進路上に街並みに見とれているのか立ち止まっている少年の背中に気づきアリサは立ち止まる。

そんなアリサに気づいたのか、少年も振り返りアリサと向き合うような形になる。

やや硬質そうに跳ねた黒髪、表情は柔らかく柔和そうな印象がある。

「ごめん、邪魔だったみたいだな」

「気にしないで、私もよそ見してたから。ふふつ、すごく良さそうな街ね」

「俺もそう思ってたところだよ」

言葉を交わしてから黒髪の少年はアリサの傍で控えるようにしていたルドルフに気づいたようだった。

そんな少年にルドルフは使用人的気質とでも言うべきか、慇懃に頭を下げ礼を示

す。

その同年代にしては一步引いた態度に少年は怪訝な表情を浮かべ、アリサは笑みを引き攣らせている。

「まったく……そういえば、同じ色の制服なのね」

「ん？ ああ、確かに。緑のならよく見かけたけどこの色はあんまり見なかったよな」

アリサが気安く声を掛けれた要因でもあった、少年が身に着けている学院の制服は彼女らと同じ赤の色をしていた。

少年の言葉通り、ここに来るまでアリサが見かけた学院新生とおぼしき者達の上着はそのほとんどが緑か白だったことに浮いた疑問が口を突いて出てしまっていた。

「ルデイ、あなたは他に同じ制服の人見なかった？」

「駅のホームでなら数名、ですが他の色の制服の方と比べ明らかに少ないように見受けられました」

「そう……まあ気にしてもしょうがないわね、ひよつとしたら私達が同じクラスってだけなのかもしれないし」

気にしながらも答えが分かるわけがないと判断したアリサはすぐに割り切ると、黒髪の少年へ友好的な笑みを浮かべてそんなことを口にした。

「案外そんなところなのかもしれないな、その時はよろしく」

「ええ、それじゃあ学院でまた会いましょう」

人付き合いの良さを感じさせる屈託のない笑みを返してきた少年と挨拶を交わし、アリサとルドルフは学院へ再び歩き始める。

入学式まではまだ時間的な余裕がある、すれ違った少年はまだ街並みを見て回るつもりなのか駅前にある小さな公園へ目を向けているようだった。

「気の良さそうな方でしたね」

「そうね、っていうか貴方にとつても同級生なんだからへりくだった態度は止めなさいよ、彼変な顔してたじゃない」

歩きながら態度を指摘されたルドルフは思いがけないことを言われたように目をしばたかせていた。

意味を理解していないかのような反応にアリサは困り果てたようにため息を漏らす。が、ふとある考えに思い至りハツとする。

「——ああ、ごめんなさい、私の方が無理言つてた」

「アリサ？ 何を……」

「へりくだるものにも、貴方はそれが素だったのよね、忘れてたわ」

数年の付き合いで彼が普段から誰に対しても敬語を使わずに話すことがないということ思い出したアリサは先程の態度が行き過ぎた丁寧さからくるものではないとい

うことを察したのだった。

三年前、アリサが幼い頃からラインフォルトに仕え使用人として働き、彼女自身が口にすることはないが姉のように慕っている女性、シャロンから住み込みで働くことになる新しい使用人として紹介された彼。

家事など一介の使用人としては有能すぎるぐらいのシャロンの手だけで事足りていたというのに、なぜ彼のような成人してすらいらない人間を雇い入れたのかは未だに解けない疑問である。

シャロンが母の秘書として家を空けることもあったとはいえ、少女として多感な年頃であることに加え、ある出来事により家族の間がギクシャクとしていた当時のアリサが同じ年頃の、それも異性である彼を今のように受け入れるには長い時間を要した。

シャロンという優秀な先達の指導を受け、彼女のようにイリーナの会長業務を支えるとまではいかないものの、使用人としての目覚ましい成長を見せていた彼にようやく馴染み始めたある日、アリサは尋ねたことがあった、何故こんな年頃から働くのか、家族はいないのかと。

その問いに対して彼が返した答えは一言、記憶に無いのだという信じがたい言葉だった。

彼曰く、アリサの母とシャロンに出会うまで暮らしていたある施設に引き取られる以

前の記憶が一切無いのだという。

天涯孤独、ルドルフという少年は最も親しい存在であるはずの家族との思い出も、接するための気安い言葉遣いなども持ち合わせていなかったのだ。

何故そんな彼を母やシャロンは雇い入れたのか、そんな思い以上に、そんな不幸としか呼べないような境遇を悲しむような素振りすら見せず語れることが彼が空恐ろしく、当時家族というものの在り方を見失っていたアリサには深く印象付いていた、けれども

「ルディ」

「はい」

「友達、出来るといいわね」

「……友達、ですか？」

「そうよ、貴方そういうの居ないでしょ、学院なら同じ年頃の男の子もたくさん居るんだから。さっきの男子なんかいいんじゃないかしら、きつといい勉強になるわよ」

何を考えているのか理解出来なくとも、家族との繋がりに飢えていたアリサは真つ直ぐで偽りのない性格の彼が身近さ故に、どこか放っておけない弟のようで突き放すようなことはしたくなかった。

二年間の学院生活が彼にとって実り多いものになればいい、実感が湧かないのか困り

顔の彼を見ながらアリスはそう願わずには居られないのだった。

赤い制服の生徒達

「ご入学おめでとうございますー！」

トールズ士官学院までの道のりは駅から高台へ向かう一本道、何より石造りの雄大な校舎は駅近くからでも視界に収めることが容易く、ルドルフとアリサは迷うことなく辿り着くことが出来た。

そうして入学式の日を記念しているのだろう、色鮮やかな花の鉢植えで飾られた校門を抜けた矢先に二人をその祝いの言葉が迎えたのだった。

「えっ……とっ？」

整えられた石道の脇から歩み出てきたその言葉の主へ、二人は視線を落とす。

朗らかな笑みで二人を迎えたのは平民出身の学院生である証の緑を基調とした制服を着た少女だった。

ただ一つ、その少女の十七、八ぐらいの年頃がほとんどであるはずの学院生にしてはあまりに幼く見える顔立ちと背丈の低さがアリサを戸惑わせていた。

新入生である自分達を祝うということは前年度入学の上級生であろうかと察しがつくものの、そう結論付けるのを躊躇わせてしまうほどに。

「やあ、入学おめでとう、ツールズ士官学院へようこそ」

そうしている内に小柄な少女に付き添うように立っていたふくよかな体格をしている男性が少女と同じく祝いの言葉を口にする。

その男性は黄色い作業用と見られるツナギを着ていたがよくよく見れば自分たちとそう年に差も無さそうならぬ若きであることに二人は気づく。

——教官には見えないし、制服じゃないけどこの人も上級生なのかしら。

そんなことをアリサが頭に思い浮かべていたところで、はじめに二人を迎えた少女が確認するような言葉を続けた。

「二人はアリサ・ラインフォルトさんにルドルフ・シユヴァルベ君で合ってたかな？」

「ええ、そうですけど……っ！」

ラインフォルトという姓を周囲に隠しておきたかったアリサはフルネームで呼ばれたことに慌てて周囲を見回した。

幸いにして登校する生徒達の波に切れ目が生じていたようで他の生徒の姿は見え、ほつと胸を撫で下ろす。

「ふう……あの、どうして私達の名前をご存知なんですか？」

「うん、入学案内にあったと思うけど申請してもらった例の品、私達が預かることになったの、だから二人の特徴も聞いてたんだ。それに——ふふっ」

何がおかしいのか言葉の途中で口元に手を当て笑ったその女生徒を不思議に思ったルドルフとアリサは顔を見合わせる。

「ごめんごめん、アリサさんのことはね、アンちゃんからよく聞いてたからすぐに分かったんだ」

「アンちゃんって……っ！　もしかしてアンゼリカさんのことですか？」

「そうだよ、アンちゃんあなたが入学してくるって聞いてからすごく楽しみにしてたんだから」

アリサが尋ねた人物の名はルドルフも知る、というより二人の出身であるルーレ市では知らない人間の方が少ないぐらいだった。

アンゼリカ・ログナー、ルーレ市に邸宅を構え帝国北部、ノルティア州を収めるログナー侯爵家の息女たる人物。

四大名門という帝国貴族でも有数の名門貴族に数えられる血筋の持ち主でありながらアンゼリカ嬢当人は気風の良い性格で誰に対しても分け隔てなく接する人柄から多くの市民から慕われていた。

同じくルーレ市に本拠を構えるラインフォルト社の令嬢という立場から侯爵家との付き合いもありアリサはアンゼリカと浅はかならぬ縁を持っていた。

「そ、そうなんですか……楽しんで……」

その彼女の名を聞いたアリサは取り繕ったようにぎこちなく微笑む。

彼女が前年度トールズ士官学院へ入学したことはアリサにも既知のことだった、しかし親しいといえる間柄ではあったがアンゼリカという女性のある特殊嗜好だけはアリサにとつて苦手とするところで、手放しに喜ぶこともできないのだった。

「トワ、それぐらいにしておこうか。まだ皆来てないんだし」

「あー！ いけない、ごめんね二人とも引きとめちゃつて。とりあえず申請の品を預からせてもらつていいかな？」

「ええ、お願いします」

二人に通知された入学案内にはこの日、とある品を学院に持ち込み入学式式典前に学院関係者へ預けるようにとの指示が記載されていた。

アリサは長めのトランクケースを、ルドルフはアリサのものよりも小ぶりのケースをそれぞれトワと呼ばれた少女、ツナギの青年に手渡す。

「はい、じゃあお預かりします。雑に扱ったりはしないから安心してね」

「ちゃんと後で返却させてもらうよ、それじゃあ入学式は目の前の本校舎から左手の先、あの講堂で開かれるから遅れないようにね。君達の学院生活が充実した二年間になることを祈ってるよ」

その講堂と見られる建物の方を手で示し、ツナギの青年は太めの顔つきに優しそうな

笑顔を浮かべそんな言葉を口にする。

「慣れないことだらけで苦勞するかもしれないけど、私達も全力でサポートするから頑張っつていこうね」

「はい、先輩方これからよろしくお願いします」

頭を下げルドルフは礼を取る、一方でアリサは何かが気になるらしく逡巡するような様子を見せていたがすぐにルドルフと同じように荷物を預けた二人へ礼の姿勢を取った。

「……よろしくお願いします」

それから講堂へ向かうまでの間、ルドルフから心配の声をかけられるほどアリサは浮かぬ表情で居続けることになる。

入学の式典はつつがなく進行し、齢七十に達する高齢でありながら衰えを見せない長身の偉丈夫、ヴァンダイク学院長の挨拶に締めくくられ閉会の運びとなった。

その後新入生達は案内に従いそれぞれ自分達が所属することになるクラスの教室へ

向かわされたのだが。

「やっぱりおかしいわ」

講堂を出て再び学園の本校舎を囲むように整地されている石道を歩きながらアリサがついに疑念を漏らす。

「おかしい、とは?」

「明らかにそうでしょ、よく考えてもみればあの先輩達、新入生に対する歓迎にしては丁寧すぎたわ」

懸念する様子を見せないルドルフにアリサは自分の考えも整理するかのようにその疑問を並べて続ける。

まず入学式に参加した生徒達の中で自分たちと同じ赤い制服を着たものの比率が明らかに少なかったこと。

そして登校中に見かけた赤以外の制服の生徒達は校門で二人が預けたような荷物を持たず、手ぶらであったこと。

「そういうえば駅で会ったあの黒髪の彼は長い包みをお持ちでしたね」

そんな物を同じ赤い制服を着ていた彼が紐で肩に掛けるように持っていたことを思い出しルドルフは呟く。

ルドルフとアリサもまた入学案内書に記載されていたその種の荷物を持っていた為

その時は疑問にすら思わなかったのだが。

「ええ、極めつけにこれよ、何もないと考える方がよっぽどおかしいわ」

彼女がこれ、と示したのは二人が今おかれた状況だった。

——入学案内書に従い、指定されたクラスに移動すること。

式典終了後、学院の教官が告げたのはこの言葉、だが二人のもとに届いた入学案内書にはそんなものを示す記載は無く、それを把握できているらしい他の生徒達に取り残されてしまった。

ただ二人だけではなく、二人を含め十人の赤い制服を着た生徒達がその場に残っていた。

そんな中、残った生徒達に声を掛け案内し始めたのが今先頭を歩いている若い女性教官だった。

「特別オリエンテーリングに参加してもらうって言うけど、入学式にそんなイベントがあるなんて聞いたこと無いわ、あの人も本当に教官なのかしら」

鼻歌交じりに生徒達を引き連れて歩く女性の後ろ姿を訝しむようにアリサは見つめた。

確かにその女性は年若いだけでなく、胸元の開いたワンピースにコートを羽織ったような、見様によっては派手に見える出で立ちで士官学院の教官というイメージにそぐわ

ない。

「ですがこうして案内されている以上学院側の予定通りのことではあるようですし、この場はついていくしかないかと思えます」

「それもそうね。——はあ、こういう時はあなたの落ち着きぶりが羨ましいわ」

周囲を共に歩いている同じ境遇の生徒達もアリサと同じく雲行きに怪しいものを感じ取っているようで教官に続きながらもそれぞれ同じような心境でいることを感じさせる面持ちになってしまっている。

一人、先程二人が校門で会った上級生と同じように同年代であるか疑わしいぐらいに小柄で幼い顔立ちをしている銀髪の少女はただ眠そうな瞳で見た目と裏腹な余裕ぶりを見せていたが。

ルドルフもまた普段と変わりない顔色であり、彼が平常心でいるというよりただ感動が薄いのだということは知っているアリサだったがこういう事態にストレスを感じてしまう性分の彼女は今のような言葉を吐いてしまう。

ただこうして話す相手がいるだけ自分はマシなのかもしれない、と胸の内では思いながらアリサはチラリと最後尾に目をやった。

駅で二人が出会った黒髪の少年、知り合いだったのかそれともこれまでの短時間で親しくなったのか、男子としては大分童顔な赤みの強い茶の髪色をした少年と言葉を交わ

しながら後をついてきている。

会話で気が紛れるのかその二人の男子は幾分か他と比べリラックスしているように見えた。

ルドルフが居なければ疑惑を吐き出すことも出来ず些細ながらも鬱憤を溜め込むことになっていたのだろうと、言葉に出さず彼の存在に感謝するアリサだった、

程なくして学院施設の中央にある本校舎を回り込み、講堂から見て対角に位置する細道に入り込んだ一同の目にある建築物が見えてくる。

中世的な意匠が色濃ゆく年代を感じさせる古めかしい造り、規模の小さな城のようであり入学式が執り行われた講堂よりも遥かに大きいその偉容に思わず足を止め目を奪われる生徒達だったが、先頭を行く女性教官は悠々とその建物に向かい歩を進め両開きの扉を開くと中へ入って行ってしまふ。

造りこそ立派なもの整備が行き届いていないのか、学院の裏手、鬱蒼とした林の中に佇むその建物は不気味な雰囲気をも漂わせていた。

そんな場所にやってきて何をしようと言うのか、集められた生徒達は疑惑を膨らませながらもその場に立ち止まっているわけにもいかず、教官の後に続き建物の中へ足を踏み入れていく。

扉の先は開けたホールのような構造になっており、はめ殺しの窓から外の光が差し込

んではいるが何の照明器具もない室内は薄暗く、怪しげな雰囲気には拍車をかけている。

ここまで皆を先導してきた女性教官はその空間の正面奥、一段高くなっている檀上に脇の階段から上がると生徒達へ向き直ると口を開いた。

「サラ・バレスティン。今日から君達VII組みなの担任を務めさせてもらうわ、よろしくお願ひするわね」

につこりと笑みを浮かべながらそう名乗った女性教官の言葉に生徒達の多数が驚きに目を瞠る。

「あ、あの……サラ教官？」

眼鏡をかけ長い髪を一本の三つ編みにした女生徒がおおざと教官へ問い掛ける。

「この学院の一学年のクラス数は五つだったと記憶していますが。それも各自の身分や出自に応じたクラス分けで……」

彼女が発した問いかけは驚きを見せた生徒の意見を代表したものだ。

二百五十年余りの昔、獅子戦役という名で歴史に残されてい帝国全土を巻き込んだ内戦を終結させた帝国中興の祖と言われるドライケルス大帝により設立されたトールズ士官学院には古くより続き帝国が重んじてきた貴族主義に則り、彼女が口にした条件を以てクラス分けや教育カリキュラムの差別化がなされていた。

それは学外にも広く知られている事実であり七番目の数字を冠するクラスなど存在

しないはず、であつたが。

「さすが主席入学、よく調べているじゃない。そう、五つのクラスがあつて貴族と平民で区別されていたわ。——あくまで去年まではね」

教官、サラ・バレストインは女生徒の発言に感心するように頷きながら発したその言葉に質問した女子だけでなくアリサや他の生徒もハツとさせられる。

去年まで、ということとはつまり——

「今年からもう一つのクラスが立ち上げられたのよね、すなわち君達、——身分に関係なく選ばれた特科クラスⅦ組が」

貴族クラスの白、平民クラスの緑、どちらにも属さない赤の制服の意味がこの時ようやく明かされた。

アリサが駅前で何気なく口にした言葉の通りで、この場に集められた生徒達はサラ教官曰く新設された特科クラスⅦ組のメンバーとして選ばれた者達ということであるらしい。

降つて湧いたような話を聞かされ戸惑う生徒達の中で一人の少年が過敏な反応を見せた。

「——冗談じゃない!」

憤りも露わに叫んだ少年は眼鏡の下の瞳を尖らせ睨むようにサラ教官を見据えてい

た。

「身分に關係ない!? そんな話は聞いていませんよ!」

「えっと、確か君は……」

生徒達の顔と名前を完全に把握してはいないのか言葉を濁すサラ教官に、深い緑の髪を短く几帳面に整えたその少年はマキアス・レーグニッツと自分から名乗った。

制服を乱れなく模範的に着こなし、いかにも真面目そうな身なりをしている少年だったが、続けて彼が口にした言葉にアリサは呆気にとられ、ルドルフも珍しいものを見るように目をしばたかせることになる。

「自分はとても納得しかねます! 身分に關係なくとは……まさか貴族風情と一緒にクラスでやって行けつて言うんですか!」

生まれながらの特権階級である貴族に対して良い感情を持たない人間は決して少ないが、こうまで明らかに貴族という存在を疎んじるような物言いを表立ってするような者はそうそう居ない。

マキアスの嫌悪感情はよほどのものであるらしく、憤懣やるかたないといった様子で抗議の声を発していたが、サラ教官の方はそんな怒りの声を受けても大して気にした様子も見せなかった。

「フン……」

そんな教官の態度にますます不満をつのらせるマキアスの隣で、金髪の伶俐な風貌をした男子が聞こえよがしに鼻を鳴らした。

不興を表すようなその態度にマキアスが教官からその男子の方へ顔を向け直す。

「……君、何か文句でもあるのか？」

「別に、平民風情が騒がしいと思っただけだ」

先の自分の発言になぞらえるようなその物言いにマキアスの目が剣呑に細められていく。

言葉からして貴族であるのだろう、金髪の男子からしてみれば彼の発言は気に障ってもおかしくはないものだったが、その発言もまた相手の神経を逆撫でるものだった。

「これはこれは……どうやら大貴族のご子息殿が紛れ込んでいたようだな。その尊大な態度、さぞ名のある家柄と見受けるが？」

挑発と受け取ったのかマキアス自身の誰何もまた慇懃無礼な口調だった。

やにわに男子二人の間で不穏な空気が漂い始め周囲の生徒達が固唾を呑んで見守る中、金髪の男子はマキアスの方へ向き直り淡々と告げる。

「ユーシス・アルバレア。貴族風情の名ごとき、覚えてもらわなくとも構わんが」

「——っ!？」

投げ遣りな言い草とは裏腹にその姓は帝国の人間にとって覚えておくどころではな

いほど知れ渡っている有名なもので、驚いたのは問い質したマキアスだけではなかった。

童顔の赤毛の少年が呟くように四大名門、と口にする。

「名のあるどころじゃないわね、大貴族の中の大貴族じゃない。ルデイ、貴方は知ってた？」

「彼がそうであるとは知りませんでした、アルバレア家とハイアームズ家のご子息が今年度入学なさるといふ噂は耳にしました」

「ハイアームズも？ ……まさかこの中に居るんじゃないでしょうね、四大名門二人と同じクラスなんて息が詰まるどころじゃないわよ」

周囲を窺い見るようにしながらアリサはうんざりしたような声で囁く。

彼、ユーシスの家の名であるアルバレアはエレボニア帝国東部クロイツェン州を治め、四大名門の内でもカイエン家と並び公爵位を持つ帝国貴族の中でも最高位の存在だった。

そんな家柄の人物と同じクラスをあてがわれるなど、普通の帝国人であれば気後れしてしまうのが当然、と言えたが――

「だ、だからどうした!?! その大層な家名に誰もが怯むと思つたら大間違いだぞ!」
マキアスはむしろ食い掛かるようにユーシスへ向かい声を張り上げる。

しかしやはり衝撃を受けたところはあるらしく、相手を威嚇するというより自分を奮い立たせるために語気を荒げている、そんな印象をルドルフは感じていた。

「いいか、僕は絶対に――」

「はいはい、そこまで」

そこでマキアスの言葉はサラ教官が手を打ち合わせながら発した声に遮られる。

「色々あるとは思うけど、文句は後で聞かせてもらうわ。そろそろオリエンテーリングを始めないといけないしねー」

注意を引かれ二人の諍いから皆がサラ教官の方へ目を戻す、マキアスも教官の指示を無視するわけにはいかず齒噛みしながらユーシスから視線を引きはがしていた。

「オリエンテーリングって、一体何なんですか？」

「そういう野外競技があるのは聞いたことがありますか……」

講堂から連れ出された時から皆を悩ませていたその疑問にアリサ、続いて眼鏡の少女が触れる。

サラ教官がそれに答えるよりも早く、黒髪の少年がふと何かに気づいたように声を上げる。

「もしかして……門の所で預けたものと関係が？」

「あら、いいカンしてるわね」

赤い制服の生徒のみが持ち込みを指示されていた荷物、それがこのオリエンテーリングに関係していると予想したらしい、サラ教官はその言葉に笑みを浮かべると、体を生徒達に向けたまま後ろへ下がっていき壁際にあつた柱へ手を伸ばす。

壇上の奥側であつたため生徒達からは死角となつていたが、そこにはボタンが設置されたくぼみがあつた。

「——それじゃ、早速始めましょうか」

言うなり教官が鉤を押し込むと、辺りが振動するような揺れが生徒達を襲つた。

「……………?!」

身構えるより早く、足元——床そのものが蓋を落としたように割れ傾き皆が床下に広がる闇に滑り落としていく。

「きゃあつ……………」

アリサも例外ではなく、倒れ込むように体勢を崩した彼女は傾斜に耐えられず床の淵へと滑り落ちていく。

「アリサっ」

自身も落とされつつある中ルドルフがせめてアリサを庇うべく行動を起こそうとしたとき、彼よりも早くアリサの元へ跳んだ人物がいた。

駅で出会つた黒髪の男子、いち早く異常に気付き身を屈めて落下を免れていた彼が無

防備に落ちるアリサを守るように共に落ちながら彼女の体を抱え寄せていた。

不測の事態にそれだけの対応力を見せたその少年にルドルフは瞠目しながらアリサを助けようとしてくれていることに対する感謝を胸の内で彼へと向ける。

——同じぐらいの年頃であんな方が居るとは、士官学院とはすごい場所ですね。

自覚の無い場違いな感想もまた同時に抱きながら、ルドルフは階下の暗闇へと落ちていった。

ARCUS

落とし穴の先には先程まで皆がいたホールよりも薄暗さを増した広い空間が広がっていた。

幸いにして床の傾きは徐々に緩やかになり、ルドルフがその空間に投げ出される頃は落下の勢いも弱まって落とされた生徒は皆辛うじて怪我無く済んでいた。

「クツ……何が起こったんだ？」

マキアスや一部の生徒は唐突な罠にはめられまだ何が起こったかよく理解できていないらしく転がる身を起こしつつ周囲を見回している。

「やれやれ、不覚を取ってしまったな」

一方で教官への愚痴ではなく罠にはまってしまった自分に対して嘆くようなことを口にする女子もいた。

そんな中で、部屋と繋がっていた皆が落とされてきた坂から銀髪の幼い見た目をした少女が身のこなし軽く飛び降り、着地してみせた。

他の生徒達から驚いた視線を向けられながら少女は一息つくくと片手に持っていた半ばで断ち切られているワイヤーを放り捨てる。

先程の罨を回避していたらしい少女に気を引かれるのも束の間にルドルフは先に落下したアリサと黒髪の少年の姿を求めて視線を巡らせ、目当てとするアリサの姿はすぐに見つかった、のだが。

「ううん……何なのよ、まったく……あら？」

落下する感覚が消えたのを感じ取り閉じていた瞳を開いたアリサがようやく自分かどのような体勢でいるかに気づき、状況を再確認するように目をしばたかせる。

どういふ転がり方をしてしまったのか、アリサは仰向けになった黒髪の少年に覆いかぶさる形になってしまっていた、それも少年の顔に胸部を押し当てた状態で。

「……………」

「その……何と言ったらいいのか」

身を起こそうにも下手に動けば上に乗ったアリサを刺激してしまうため身動きが取れずにいる少年は気まずそうな声を漏らす。

状況に理解が追い付いたアリサは羞恥に顔を真っ赤に染めながら飛び退くように跳ね起きて少年から離れる。

そうしてようやく起き上がることができた少年は申し訳なさそうな顔で、謝罪の言葉を口にしたがらアリサに歩み寄っていく。

「えっと……とりあえず申し訳ない。でも良かった、無事で何よりだった——」

しかし、肩を震わせていたアリサはその言葉が終わるより早く、キツと少年を睨みつける。すると平手で彼の頬を打ち据えてしまうのだった。

すっかり腹を立てた様子で腕を組んでいるアリサの傍に控えながらルドルフは叩かれた頬に手を当てうなだれている少年に視線を送りながらも、声をかけることまでは出ずにいた。

ルドルフからしてみれば先程の出来事は事故であり彼が責めを受ける謂れは無い、なにより彼はアリサを助けようと行動したのだから感謝されこそすれあんな仕打ちを受けるのはあんまりだろうとは考えている。

しかし女性にとつてああいっただけの接触はたとえ故意ではないとしても許しがたい、デリケートな問題であるとも理解していた。

今下手に仲介しようとするればアリサの機嫌を余計に損ねる恐れがある、彼女が落ち着きを取り戻すのを待った方が良好だろうと判断しルドルフはひとまず沈黙を保つことを決める。

彼女が冷静になれば彼に非が無いことを認めることができる、と信じてのことだったが、意地を張ってしまふ性格であることも知ってはいるため後をひかないよう祈るばかりだった。

——その場合は何とかフオローしたいものですが……良い案が思いつきませんね、シャロンさんならばこんな時でも上手く立ち回れるのでしょうか。

人の感情を推し測ることを苦手とするルドルフはこういったトラブルの対処を苦手としていた、自分より遙かに長くラインフォルトに仕えアリスとも気心が知れている女性の顔を思い浮かべ、使用人として先達であり極めて優秀な彼女ならこんなときでも適切に場を治めることができるのではないかと自分の無力さを嘆くのだった。

と、不意に辺りから機械的な音が鳴り響き、それが自分の制服の上着、ポケットからも発していることに気づきルドルフはその中に収めてあるものを取り出す。

生徒全員が同様の行動を取っており、音は皆が取り出したそれ——小型の導力器オーブメントから発していた。

角持つ獅子、トールズ士官学院の意匠が施されたカバーを開くと複数の丸い窪みがある特殊な構造が剥き出しになる。

『それは特注の《戦術オーブメント》よ、ちゃんと皆持つてきてるみたいね』

先程のサラ教官の声はそのオーブメントから発されたことに皆がそれぞれに驚きを

示し、マキアスなどは目を丸くしている。

声の調子からして録音ではない、ここまで小型化されたオーブメントがリアルタイムでの通信機能を有しているということはそれだけ驚愕に値することだった。

「ま、まさかこれって……!」

その中であつてアリサは他の生徒達とは異なる驚きを見せている。

通信機能を搭載した戦術オーブメント、その存在に彼女は心当たりがあつたのだ。

同じ情報をルドルフも知り得ていたがオーブメントの存在というよりそれが何故皆に支給されているのかということの方が気にかかつていた。

『ええ、エプスタイン財団とラインフォルト社が共同で開発した次世代の戦術オーブメントの一つ、第五世代戦術オーブメント、《ARCUS^{アイクス}よ》』

導力器開発の祖であり、これまで戦術オーブメントの供給を一手に担っていたエプスタイン財団の協力を受けラインフォルトが開発を進めていた戦術オーブメント、それがこの《ARCUS》だった。

「戦術オーブメント……魔法^{マジック}が使えるという特別な導力器のことですね」

『そう、結晶回路^{クリスタル}をセットすることでアーツ^{アーツ}が使えるようになるわ』

三つ編みの女子の言葉にサラ教官が答えたそれこそが現代のインフラストラクチャーの根幹を成す導力器の中でも特別な戦術オーブメント本来の機能。

導力を発生させる七耀石セブチウムの欠片であるセピスを加工したクオーツを組み込むことにより導力魔法オパールアーツと呼ばれるような超現象の行使を可能とする。

軍事学や戦技教練を学ぶ士官学院の生徒に支給されること自体はおかしくない話なのだが世に出回ってすらいない最新鋭のそれを学生などに扱わせるということが腑に落ちずルドルフは首を傾げる思いだった。

『というわけで、各自受け取りなさい』

そう告げられた瞬間、辺りに設置されていたらしい導力灯が一斉に灯り周囲を照らし出す。

見れば広間の隅々には生徒達の人数と同じ数の台座があり、その上には共通して小さな箱とある荷物が置かれルドルフとアリサが校門で預けた荷物も含まれていた。

『君達から預かった武器と特別なクオーツを用意したわ、それぞれ確認した上でクオーツをARCCUSにセットしなさい』

一方的な指示ではあったが拒んだところでどうしようもない生徒達は顔を見合わせるなり、ため息を漏らすなりと思いきいの反応を示しながらも教官の言葉に従い動き始めた。

「はあ、仕方ないわね。私のは……あそこね、ルデイは？」

「見つかりました、アリサの隣のようですね」

「そう、何をやらされるのか分からないけど、とりあえず言われた通りにしましよ」
言葉を交わし、二人は預けた荷物が置かれている台座に向かった。

ルドルフは自分の持ち込んだ小ぶりのケースが載った台座の前に立つとまず手前に置かれた小さな箱を手に取り開く。

中には紋様の刻まれた丸い黒銀のクオーツ、それと比べ一回り小さな二つの透き通るような蒼と翠の色をしたクオーツが収められていた。

「これは……？」

ルドルフ自身これまで今手の内にあるARCUSより前世代にあたる戦術オーブメントを扱った経験があり、クオーツに関しても多少の知識を持ち合わせている。

クオーツは傍目には宝石のような見た目をしているが、その中でも紋様があしらわれたそれはただ規格が異なるというだけではない特殊性を彼に感じさせていた。

『それはマスタークオーツ、ちよつと特殊な造られ方をしてね、使用を繰り返す度にクオーツ自体が導力の展開アルゴリズムを学習し最適化……まあ平たく言えば成長するクオーツってところね、繰り返して使えば扱える属性力も大きくなるそうよ。ARCUSにセットしてみなさい』

ARCUSの通信機に呟きが拾われたのか、サラ教官の声が疑問に答える。

——成長、そんなクオーツが開発されていたとは。

A R C U Sと同じく最新鋭の技術による産物なのだろうそのクオーツの特異性に関心を寄せながらもルドルフは指示通り戦術オーブメントのカバーを開いた。

マスタークオーツ専用と見られる大きな窪み、クオーツをセットするスロットが中央に一つ、それを囲むように八つのスロットが空いている。

戦術オーブメントは通常、使用者に合わせオーダーメイドで製造され扱う人間によってその造りが一部異なる。

スロット同士を繋ぐ導力回路、ラインが分割され扱える属性力の総和が低いものの術式の即応性、多様性に優れたタイプ。

逆に複数のスロットを連結させ出力を増幅、俗に上位アーツと呼ばれるような大規模術式を行使可能なタイプなどいくらかの調整も出来様々である。

ルドルフは外周八つのスロットと一本のラインで繋がった造りになっているオーブメント中央のスロットに黒銀のクオーツを嵌め込んだ。

すると嵌め込まれたクオーツが光を放ちオーブメントと自身が、例えるなら見えない糸で繋がれたような感覚を一瞬ルドルフは感じ取る。

それは使用者とオーブメントが共鳴、同期した証明でありこの手順を経て初めてオーブメントによるアーツ行使が可能となる。

『皆セット出来たみたいね、A R C U Sには他にも面白い機能が隠されているんだけど

……それはまた追々ね。——準備が整ったところで早速始めるとしますか』

その言葉と共に広間の奥、固く閉ざされ取っ手も無かった扉が音を立ててスライドし開かれる。

『そこから先のエリアはダンジョン区画になってるわ、少し入り組んではいるけど終点まで辿り着けばこの旧校舎、さつきあなた達が居た一階まで戻ることが出来るわ。……ま、ちよつとした魔獣なんかも徘徊してるんだけどね』

そこで通信機の向こう側でサラ教官は咳払いを一つすると、それまでの軽い口調から真剣味を帯びたものに変えて言葉を続ける。

『それではこれより、士官学院、特科クラスⅦ組の特別オリエンティングを開始する。各自、ダンジョン区画を抜けて旧校舎一階まで戻ってくることに。——文句があったらその後を受け付けてあげるわ、何だったらご褒美にホッペにチューしてあげるわよ』

最後に悪戯めかした言い方でそう付け加えたサラ教官だったが、要は魔獣も徘徊しているダンジョン区画、教官の言葉曰く旧校舎の地下から自力で抜け出してこいとのことらしい。

なぜ旧校舎などと呼ばれる場所がそんな様相を呈しているのか、ルドルフにも気になるところではあったがこの場を切り抜けなければどうにもならないということだけは理解できていた。

士官学院とはいえ今日入学した新入生に与える課題にしては随分と過激に思えるイェントだったが、それにより解けた一つの疑問、持ち込まされた目の前のケースにルドルフは手をかける。

開かれたケースの中には楕円ドーム形のプレートを備えた籠手状の装着具が収められていた。

素人目にはどんな用途に使われるのか分からない箱型の導力器が装着部分とプレートとの間に仕込まれており、剣や銃器といったものを扱う心得の無いルドルフが身に付ける武装と呼べる唯一の代物がそれだった。

——まさか初日から魔獣と実戦する羽目になるとは……いや、こんなものを持ち込むよう指示された時点で予想して然るべきだったのかもしれないね、調整を済ませておいて正解でした。

想定の甘さを反省しながらルドルフはその小さな盾にも似た装着具を左の前腕に嵌め込み、腕の内側にあつたパーツに——ARCUUSを固定する。

静かに導力器が唸りを上げて起動し、その機能が正常に作用していることを確認するとARCUUSのカバーを開き、触れないぐらいに近づけた指を各スロットの上に滑らせる。

ルドルフは淀みなくその動作を終えると一つ頷き、配布された残り二つのクオートを

オーブメント盤にセットしカバーを閉じた。

追加されたスロットに加え通信機能まで内蔵したせいか、掌に収まるぐらいのサイズだった既存の戦術オーブメントに比べARCUSは掌に余る大きさとなってしまっている。

それによる使い勝手の変化を真つ先に気にしたルドルフだったが、左腕の装着具に戦術オーブメントを固定し扱う自分の場合さしたる影響は無さそうであると判断したのだった。

——さて、どんな魔獣が居るといふのか分かりませんが……別の事情で一筋縄ではないきそうにありませんね。

教官の自己紹介から始まる先程までの出来事を思い起こすとルドルフはこれから特別オリエンテーリングに臨む上で一抹の不安を抱かざるを得ないのだった。

生じる違和感

果たしてルドルフの予想通り、出発以前から早くもトラブルが発生することとなる。

ユーシス・アルバレア、まず彼が馴れ合うつもりは無い、と一人先にダンジョン区画へ足を向けそれをマキアスが咎めるも、彼は扱いに心得があるという腰に提げた騎士剣を示し臆する素振りも見せなかった。

更に先程のやり取りが後を引いているのか、ユーシスは殊更に貴族身分であることを強調するような発言をした上でマキアスに対し——同行するなら構わない、ノブレスオブリージュ貴族の責務として保護してやつても良い、そんな事を言い放つ。

貴族に対し嫌悪感情のあるらしいマキアスがそんな言葉を受け黙っていられる筈も無く——

「もういいい！ だつたら先に行くまでだ！ 旧態依然とした貴族などより上であることを証明してやる！」

そう反発するように言うなり大型の導力銃を携えユーシスよりも先にダンジョン区画へ足を踏み入れていつてしまった。

そんなマキアスの態度に呆れるように鼻を鳴らしたユーシスもまた後続き宣言通

り一人で奥へと進んで行つてしまふ。

二人のやり取りに呆気にとられたように残る八人はしばしの間立ち尽くしていたが。「——とにかく、我々も動くしかあるまい。念のため数名で行動するようにしよう、そなたと——そなた、私と共に来る気はないか？」

まず青い長髪を頭の後ろで一纏めにした少女がアリサと眼鏡の女生徒に声を掛けた。

「え、ええ。別に構わないけれど」

「私も……正直助かります」

年頃の女子にそぐわない武人然とした古めかしい口調に加え、左腕には長大な両手剣をベルトで吊るしている女子の中でも一際強い存在感を示していた彼女の誘いにアリサ達はすぐに頷く。

先に行つた二人のような事情が無い限りこんな状況では当然の判断と言えたが一人、
「またも例外的な行動を見せる少女がいた。」

「そなたも——ふむ？」

銀髪の小柄な女子はいつの間にか奥へと歩み始めており、教官の罨を避けていた上魔獣が潜むという先へ平然と歩みを進めるその後ろ姿に何か感じ取つたのか、青髪の女子は呼び止めることもせずルドルフを含み残る四人の男子へ顔を向けた。

「では我らは先に行く、男子ゆえ心配無用だろうがそなたらも気を付けるがよい」

「あ、ああ」

その堂々とした立ち居振る舞いに呆気にとられながら黒髪の男子が返した生返事を了解とみなしたらしくその女子は颯爽と奥へ向かっていった。

「そ、それでは失礼します」

「あ……」

眼鏡の女生徒が残る男子に丁寧[・]に頭を下げ後に続き、アリサはルドルフを気にするよ
うな素振りを見せたが、先程接触してしまった男子一瞬目が合つてしまい、すぐに不機
嫌そうに顔を背けると二人の後に続いて行つてしまった。

女子達の姿が見えなくなると、アリサにあからさまな態度を向けられていた少年が
大きなため息を漏らす。

「……………はあ」

「あはは、すっかり目の仇にされちゃったみたいだね」

「ああ、後でちゃんと謝つておかないとな」

同情するような声に理不尽を訴えるでもなくそんな言葉で返すところが少年の行き
過ぎなぐらゐの人のよさを感じさせる。

「——それで、どうする？ 折角だから俺達も一緒に行動するか？」

落ち込んでいるのも束の間、その少年はすぐに表情を切り替えると残る三人にそんな

提案を持ち掛けた。

「うんっ、もちろん!」

「異存はない、俺も同行させてもらおう」

茶髪の少年と帝国では珍しい、褐色の肌をした長身の男子が快諾する中、通路の先に視線を向けながら思案していたルドルフは三人へ向き直ると急に頭を下げる。

「申し訳ありません、力添えしたい方がいますので先に失礼させていただきます」

「力添えって……?」

「君は……ああ、あの娘この」

事情を知らない茶髪の少年が首を傾げる横で、黒髪の少年は駅で会った時のことを思い出したらしく納得したように頷く。

「分かった、そういうことなら仕方ないな」

「それと——僕はルドルフ・シユヴァルベと申します、皆さんの名前をお伺いしてもよろしいでしょうか?」

居住まいを正してルドルフが尋ねると、少年達はその畏まりように一瞬戸惑いを見せたが入学式からこちら、お互いに自己紹介すら済ませていないことを思い出し照れ笑いのような顔を見合わせる。

「申し遅れてすまない、俺はリイン・シユバルツアード、よろしく」

「僕はエリオット・クレイグ、よろしくね」

黒髪の少年、ラインに続き愛嬌のある顔立ちを微笑ませながら少年、エリオットも自分の名を告げる。

「ガイウス・ウォーゼル、ノルドの出身だ」

「ノルドって、北東の高原地帯だよな？ 留学生だったんだ」

「ああ、故郷から出てきたばかりで帝国にはまた馴染みが無くてな、よろしくしてくれると助かる」

「もちろん！ よろしくね、ガイウス」

無邪気な笑みを浮かべるエリオットにつられてその場の空気が弛緩したようだった。

先に出ていったマキアスやユーシスと違い、こちらのメンバーは既に良好な関係を築けそうな気配を漂わせている。

「ラインさん」

「呼び捨てにしてくれて構わないぞ、多分同年だよな」

「ああ……そういうものでしたね、では——ライン、先程はありがとうございました」

「えっ？」

「彼女の危ないところを助けて下さったでしょう？ 僕では間に合わなかったかもしれないから。……代わって謝るなどという真似をするわけにはいきませんが、せめてお

礼を言わせてください、それでは」

言い終わると、ルドルフは踵を返し先行した女子達の後を駆け足気味に追いかけていく。

そんな言葉を受けるとは思ってもみなかったらしくリインは礼の意味を理解できないようにしばらく目をしばたかかせていた。

教官が言った通りそこその数が徘徊しているらしく、先行した生徒達が交戦したのだろう脇に転がる魔獣の死骸、その戦闘の痕跡をリイン達を分かれてから既に数度確認しながらルドルフは通路をひた走る。

途中分かれ道も幾つかあったがルドルフはその魔獣の死骸に見られるある特徴を頼りに進路を定め進み続けていた。

地に落ちている、猫に蝙蝠の羽を生やしたような飛び猫と呼ばれる魔獣の死骸、その亡骸にある傷跡を認めるとルドルフは自分の進む道を再確認する。

まとまり出ていった女子の三人、その中でアリサが手に携えていた武器は重火器が発

達した現代では扱う者も珍しい導力弓。

彼女の昔馴染みの使用人、シャロンから扱い方を学んでいたこともあるが、重火器メーカーでもある実家に対して思うところが彼女にそんな武器を選ばせたのだろうと推測しながらルドルフは矢傷の残る死骸の後を追うようにして迷宮を進んでいた。

お陰で立体的に通路が折り重なったような造りをしているらしいその迷宮をルドルフは迷うことなく進むことが出来ている。

不意に、通路の合間に点在している小部屋のようなエリアに差し掛かる直前で明らかに戦闘の気配を感じ取りルドルフはある予感に足を止めた。

壁に身をそわせ先を覗き見ると予想通り、剣を正面に構える青髪の女生徒、その背後に一見して杖のような形状をしている武器を構える女子と並んで弓と矢を片手にしている彼が探していたアリサの姿があった。

相対しているのは地を這いながら彼女達ににじり寄る、甲虫型の魔獣が二匹。

甲虫と言っても魔獣のそれは侮りがたい甲殻を持ち合わせているものがほとんどだ、ナイフ程度では刃を立たせることすら容易ではない、が。

「ふっー」

身の丈に届きそうな長大な両手剣を先頭の少女は軽々と振り下ろし、飛び掛かろうとした甲虫の一匹を一刀であっさりと両断、残る片割れも自ら踏み込み身をよじりながら

斬り上げた少女の斬撃に勢いのあまりその身を割られながら撥ね飛ばされた。

瞬く間に二匹の魔獣を殲滅した少女の姿にルドルフは思わず視線を吸い寄せられてしまう。

大の男でも振り回すには苦勞しそうな得物を自在に操る身体能力もそうだが、ただ武器を振り回すのではなく操る術を知っている、彼女の動きはそんな一般人離れた洗練されたものだった。

少なくともこれまでダンジョン内で見かけた魔獣程度に遅れを取る人物では無さそうだと判断したルドルフは足を止め見守る体勢に入る。

彼女のような実力者と行動を共にしているのならわざわざ自分が出てアリサに過保護と不興を買うことも無いだろうと、いざというときだけ助けに入ろうと心に決めたのだった。

遭遇した魔獣が片付き緊張感を緩ませる女子達の中で一人、剣を手に構えたまま瞑目するようになっていた少女が呟く。

「——どういふつもりか知らぬがそなた、女子の後をつけるような真似は感心せぬぞ？」
「……………」

少女は自分の方を見てはいない、だがその言葉が間違いなく自分に向けられたものであるということを感じ取りルドルフは息を呑んだ。

「え?」

まだ気づいていないアリサと眼鏡の女生徒はその言葉にただ戸惑っている様子だったが、彼女の方から指摘されるのは時間の問題と察したルドルフは観念し通路から姿を現す。

「あつ——ルデイ!」

「ふむ……? 知り合いか」

「ええ、まあ……」

アリサの反応に少し警戒の色を薄めた少女は剣先を地に突かせ、ルドルフに体を向ける。

「確かに失礼な振る舞いでした、非礼をお詫びします」

胸に手を当て謝罪するルドルフにアリサは大きなため息を吐いて嘆く。

「ああもう……どうしてついてきちゃったのよ、あの男子達と一緒に来れば良かったじゃない」

「ですが——」

「分かるわよ、でもそういうのは止めなさいって言ったでしょ、融通効かないんだから……」

予想通り、自分を手助けしようとして来たことを察したアリサに叱られるルドルフは言

葉を失いたただ苦笑を浮かべる。

そんな二人のやり取りを見た青髪の女子は顎に手をやりながら不思議そうに声を漏らす。

「事情は知らぬが、彼はそなたを守ろうとして追ってきたのだな？　であれば責められる謂れはないと思うのだが、むしろ帝国男子として立派な気構えなのではないか」

「うっ……それはそうなんだけど……」

「なににせよ今更追いつ返すわけにもいかぬだろう、あの女子も見つからぬことだし折角だ、そなたも共に来るか？」

「はい、そうさせて頂けると助かります」

願っても無い申し出にルドルフが答え頷きで返される。

言葉を挟む前に隙を無くされたアリサはこの期に及んで抵抗するわけにもいかず、その日何度目かのため息を吐いて諦めた様子を見せた。

「エマもそれで良いか？」

「ええ勿論、なんだかラウラさんに頼ってばかりで申し訳なかつたですし」

「うむ、ああ——」

眼鏡の女生徒の答えを受け、ふと気づいたように青髪の女生徒がルドルフに顔を向け直して言葉を続ける。

「そういえば自己紹介がまだだったな、私はラウラ、ラウラ・S・アルゼイド、レグラムの出身だ、よろしく頼む」

「私はエマ・ミルステインです、よろしくお願ひします」

毅然と名乗る女子、ラウラにならって眼鏡の女生徒も自らの名前を名乗った。

先程魔獣を容易く屠った少女、ラウラの名前からあることに気づいたルドルフはその実力に密かな納得を覚えていた。

——アルゼイド、あの《光の剣匠》のご息女でしたか。

武術に対して造詣が深いわけではないルドルフにもその名前は聞き覚えがある者だった。

帝国に伝わる二大剣術、ヴァンダールと双壁を成すアルゼイド、その使い手にしてレグラム領主の帝国最強の剣士と名高い人物の名は有名な所である。

その名を持つ彼女であるのならあれだけの実力を修めていてもおかしくはなかった。

「ルドルフ・シュヴァルベと申します、どうかよろしくお願ひします」

「うん、時に——そなた、得物は持つておらぬのか？ その左手のものは盾のように見えるが……」

ラウラが尋ねたように、ルドルフは武器のように見えるものを所持していなかった。

唯一身に着けているのは左手の導力器、その内側にARCSが装着されているのを

見取ってラウラだけでなくアリサやエマも注目する。

「ええ、ある程度の護身術は習いましたが剣や銃といったものは持ち合わせておりません。この導力器はシールド面に防御壁を発生させる機構も組み込まれていますが、導力の貯蔵、キャパシターとしての機能が本質です」

「キャパシター？ ……導力工学には詳しくないのだが、聞きなれぬ言葉だな」

「簡単に申しますと、セットした戦術オーブメントの余剰導力を蓄えておく装置になります。導力は自然に回復しますが限度はありますから、充足時は装置に引き込み貯蔵、不足時は蓄えた導力を戦術オーブメントに放出可能な仕様になっています」

左手の導力器を示しながらの説明にラウラとエマは物珍しいものを見るような目を向けている。

戦術オーブメントはそれ自体がセブチウムをふんだんに使った工業品で、蓄積できる導力量は決して少なくない。

いざというときに導力を補充する消耗品チャージヤを持ち歩くならまだしもそんな装備を用意している人間は稀で、導力器を扱う技術メーカーの娘で説明をすぐに理解したアリサもやはり珍しそうな目をしている。

「つまりそなたはアーツ使い、ということの良いのか？」

「主軸はそうです、ですがここまで見かけた魔獣程度なら徒手格闘でも対応出来るかと

「思います」

「ほう……」

「淡々とそんなことを言つてのけたルドルフをラウラは興味深そうに見る。

「では殿をしんがり任せても良いか、そなたが引き受けてくれるのであれば私も後方の注意を薄くできて助かる」

「——ええ、お任せ下さい」

ラウラからしてみれば何気もなかったのだろうが、つまり彼女は矢面に立ちながら後ろに向けている意識だけで自分の存在を掴み取つたのだという事実はこの歳でどれほどの鍛錬を積めばそんな境地に達することが出来るのかとルドルフは感心することしかできなかつた。

「では行くとするか、あの落とし穴のようなトラップはまだ無いようだが、気をつけることにしよう」

その言葉を機に、ルドルフを加えた四人はラウラを先頭に先への歩みを再開することになる。

「仕方ないから一緒に来るのは認めてあげるけど、私だけじゃなくエマもちゃんと守つてあげるのよ。……ラウラは心配なさそうだけど」

「はい、承知しております」

前を歩くアリサから念を押すように言われルドルフが頷く姿に眼鏡の女子、エマが小さく微笑みを浮かべていた。

「お二人は仲がよろしいのですね」

「よろしいって……まあ悪くは無いわね」

二人にも姓を明かしてはいないらしく、ラインフォルトの令嬢とその使用人という間柄を正直に告白できないアリサは言葉を濁してしまふ。

「でもルドルフさんが来てくれて良かったと思いますよ、アーツが有効な魔獣もここには居るようですから」

「エマさんが居るのでしたら心配ないのでは？ その杖、確か魔導杖オハルスタツツと呼ばれるものでしたよね、待機時間無しノーウェイトでアーツと同様の現象を発生させることが可能なものと聞いています」

杖型の導力器を指してルドルフが言うと、エマは笑みをやや硬くして応じる。

「お詳しいんですね、確かにそう伺ってはいるのですが、入学の時に適正があるからと言われて選択しただけですから。——戦術オーブメントを使った魔法も馴染みがありませんし」

——成程。

そう胸の内で呟きながらルドルフはこのⅦ組という存在が設立された理由について

推察を進めていた。

ARCUUSにしても、彼女が持つ魔導杖にしても最新の導力技術が用いられた試験段階のものである。

——それらの試験評価の為、だとしてもまだ疑問は残りますね。

推論が間違っていないとしても、それをわざわざ学生などにやらせる必要性は見えない。

そんな役割は軍関係者などにでもあてがった方がより十分なデータが取れるはず、そう考えるルドルフだったがどう思考を巡らせても確信に至るには情報が足りず、教官の所まで戻り直接問い質すしか無いだろうと、一旦その考えを隅に置くことにした。

「ですが導力杖に適性があると判断されたのならアーツにもすぐ慣れるのではないかと
思いますよ」

「そうなんですか？」

「ええ、戦術オーブメントの習熟は経験よりも感性センスに依るところが大きいですから。導力杖の、というより導力に対する感応力が高いと診断されたのならそれだけ素質はあるはずです」

彼女に限らず、アーツという特異な現象を引き起こせる戦術オーブメントの扱いに経験が無い人間はその運用を過度に困難視がちだ。

実際慣れない人間や適性の低い人間は戦闘の最中では小規模なアーツを展開するだけで精一杯であったりもするのだが。

「オーブメントと同期した時点で感覚は繋がっています、クオーツに落とし込む導力とそれにより発生する属性力、それさえ正しく感じ取れるのならアーツを発動させるのはそう難しいことはありません、複雑な術式を装置側で引き受けてくれるのが戦術オーブメントの役割ですからね」

逆に素養のある人間なら驚くほどアーツの習熟は早かったりする、そう前世代の戦術オーブメントを扱った経験から語られるのに聞き入るエマの横で、アリサはルドルフに思うところの有りそうな目を向ける。

「……ふうん、本当に詳しいのね、戦術オーブメントの扱いなんてどこで習ったの？」
「それは——」

不意に足を止めたルドルフに、アリサがムツと眉根を寄せる。

誤魔化すつもり、そう思いかけたアリサだったが、いつの間にか先頭を歩くラウラも足を止めているのに気づくと彼らの反応が示すものを理解した。

「なかなか落ち着けぬな、——来るぞ」

両手を剣に添え切っ先を上げ戦闘態勢に入ったラウラの視線の先から四人の方へ迫る小さな影が見て取れた。

横並びに飛んでくる飛び猫が二匹、そして薄暗く目立ちにくいがその奥から半透明の蛞蝓のような生命体が一匹這いずつてきていた。

衝撃を吸収する粘体で構成されたその一種グロテスクな外見にアリサが顔を少しばかり強張らせる。

多くの女性がそうであるように、彼女もまたそういった生命体に遭遇して平静でいられる性格ではなかった。

魔獣の大別としてドロームと呼称されるタイプのその魔獣の姿にルドルフは警戒を強める。

一般的に魔獣はその特性として体内にセピスを溜め込む性質がある、ドロームという魔獣の厄介なところはその溜め込んだセピスをクオーツのように作用させアーツと同様の現象を制御するところだ。

優れた身体能力を持つラウラといえどもアーツにまで狙われては万が一の危険がある。

ルドルフはすぐにARCU Sのカバーを開くとその中心、マスタークオーツが埋まっているスロットに指を触れさせた。

「駆動、開始」

触れた黒銀のクオーツが光を帯び、ARCU Sの戦術オーブメントとしての機能が作

動したことを示す。

続けて素早く隣接するスロットへとラインに沿って指を滑らせ、留めるとスロットへ導力が流れ込み、そこに埋まっていた大気に干渉する力を秘めた翠耀石エスメラスのクオーツが励起し光を放ち始めた。

A R C U S 内に満ちていく力の波が求めるレベルに達したのを感じ取るとルドルフは触れた指を離し目標、平行している飛び猫の間に見えるドロームに意識を向ける。

解放された属性力を解析したA R C U S が定められた術式を展開するべく、機構が廻り真に駆動を始めルドルフの周囲には帯状の光輝を放つ術式陣が浮かび上がり、アーツの作動を報せる。

駆動は瞬時に完了し、発動したアーツにより周囲の大気がルドルフの目の前で渦を巻いて収束し、透過する光を屈折させ球状に風景を歪ませていく。

——想定以上に駆動が早い、これは……。

予想よりも早く駆動が終了したことを不審に思ったルドルフはA R C U S の中心で未だ光を帯びる紋様の刻まれたクオーツを見る。

通常の空間には存在しない、時属性と呼ばれる稀少な力を発揮できる黒耀石オープンダイヤで造られたと思しきそのクオーツに戦術オーブメントの駆動を速める機能を備わっていたことをその時にしてルドルフは感じ取った。

「ラウラ——？」

前方のラウラにアーツを放つことを告げようとしたルドルフが警告するまでもなく、彼女は身をずらし射線を開けていた。

味方に当ててしまう憂いを取り除かれたアーツが解き放たれ、圧縮された空気の塊が破裂するような音を鳴らして打ち出される。

エアストライクという名を持つ風属性の術式により放たれたその風弾は飛び猫の間を抜けて奥のドロームに直撃し、その粘体を仰げ反るように歪ませる。

しかしルドルフはドロームから発する導力波の感覚からそれだけでは仕留めきれないことを察していた。

おそらく翠耀石エスメラスのセピスを多量に取り込んでいるのだろう、そういう手合いは自身が放った風のアーツに対して耐性を持つことを彼は理解しており、定石ならば火のアーツが有効であつたが生憎その属性を起こし得るクオーツは支給されていなかった。

追撃を考えていたルドルフだったが、次の瞬間放たれたアリサの矢が風塊によりドロームの粘体が歪み広がり薄くなったタイミングを逃さず穿ち貫く。

中枢部を射抜かれたのか、ドロームはぐにやりとその体躯を沈ませ、生命活動を停止させた。

間を置かずラウラが駆け、脇を大氣の塊が通り抜けたことにより体勢を崩していた飛

び猫二匹に横薙ぎに振るう一閃を見舞う。

両手剣の長大な刃は抵抗など感じないかのようになり二匹の胴をあつさりとなり裂き葬った。

「……ふう、この分ならなんとかかなりそうね」

目の前の魔獣は片付いたが、戦闘経験に乏しいアリサの声は言葉に反して緊張のせいか硬さが残っていた。

「ええ、それにしてもアリサ、今のは——」

アリサの方に顔を向けたルドルフはその上方、橋のように架かる通路から顔を覗かせているものの存在に気づき、緩みかけた意識を引き締める。

「——？」

するとアリサも何気なく、といった仕草でルドルフが気づいた、先程ラウラが斬り捨てたものと同種の甲虫型魔獣の方を見上げてハッと表情を強張らせる。

「お嬢——アリサ！ 後ろに」

「え、えええ！」

咄嗟に元の呼び方で言いかけたことを咎める余裕も無くアリサが身を引き、ルドルフが前に出る。

やはりアリサを狙っていたのか、その魔獣は上階から身を躍らせ牙を剥いた。

一匹だけでなく、数瞬遅れることもう一匹の同種が身を投げたのを見て取りながらルドルフは迎撃する姿勢を取る。

使い古した硬貨のような黄金色の甲殻で身を覆っているその魔獣に対してもアーツは有効だ、先程ルドルフが使用したアーツは初歩のものであり駆動の負荷はごく僅か、機構の原点化は済んでおり新たな術式を展開するのに支障はないのだが。

——この程度なら。

アーツを使わずとも対処は容易と判断しルドルフは半身を引き、白手袋を嵌めた拳を握り締め、顔の横に引き構えた。

鋸のように尖った一對の牙で食らいつこうと迫る甲虫、その小さな頭部目掛けて構えた拳が弧を描いて振り下ろされる。

その拳はバキリと乾いた音を立て甲虫の頭殻を割り、中身を粉碎しながらその身を直下に打ち沈めた。

絶命を確認したルドルフは続けて飛び来る同種を睨み、前足を軸に体を回すと真つ向から二匹目の甲虫を蹴り抜く。

ブーツの靴底が触れた甲虫の顔面をひしゃげさせながら押し返し、通路の壁まで水平に叩き飛ばす。

壁に衝突しそのまま地に落ちるも既にその体軀は蹴りの威力だけで頭部から半ばが

潰れており、事切れているのは明らかだった。

そのまま周囲を警戒したルドルフだったが、辺りに魔獣の姿が無いことを確認するとようやく息を吐き振り返った。

「アリサ、怪我はありませんでしたか？」

「……無いわ、あなたまでそんな真似出来たってことの方が驚きよ」

声をかけられるまで目を瞠るようにしていたアリサの声にルドルフは疑問符を浮かべるような顔をするが、すぐに彼女の驚きが今しがた自分が魔獣を仕留めた行為によるものだど気づきハツとした表情になる。

身一つで魔獣の甲殻を打ち砕き、粉碎する。

それもまた常人離れた所業で、彼女にとつて同性であるラウラののような達人の存在を先に目にしていなければ驚きはもっと大きかったかもしれない。

「すみません、手の空いていた私をもっと周囲を警戒するべきでした」

「謝ること無いわよ、上から来るなんてなかなか気づけないわ」

エマの謝罪にアリサは首を振って返す、確かに上方というのは注意の向きにくい死角の一つで早々に魔獣を発見できたのは僥倖と言える。

「護身術とは聞いたが、それ以上に大した鍛え方をしているようだなルドルフ、これ程とは思わなかった」

剣に着いた血を払いながら三人の元に戻ってきたラウラが地に落ちた甲虫の残骸を見て口にした言葉にルドルフは取り繕うように苦笑いする。

「体の頑丈さには多少の自信がありますから」

「……そんなレベルじゃないんじゃないかしらこれ。ラウラといいあなたといい、今までの常識を改める必要がありそうね」

「私にしてみればなにもおかしいところなど無いのだが……」

心外そうな顔をするラウラとの常識の乖離にアリサはますます眉根を寄せてしまうのだったが、浮かない顔色だったルドルフがそういえば、と声を上げる。

「アリサ、さっき上にいる魔獣に気づいた時ですが……」

「ああ———そういえば妙な感覚だったわね。なんて言ったらいいのかしら、あなたがそつちを見て嫌な気持ちになってるって感じがしたのよ、それで私もそつちを見たら……あれが居たのよね」

アリサがもどかしそうに言い表したその感覚に、尋ねたルドルフだけでなくラウラとエマも不思議そうな表情を浮かべる。

「ふむ、そんなこともあるのだろうか」

「そういえばお二人はさっきのアーツからの連携も整っていましたし、親しい仲で伝わるものがあるのでしょうか」

「どうかしら……それを言うならラウラだってルデイに合わせるように見えたけど」
ルドルフがアーツを放ったときの動きについて言及されるとラウラも今気づいたというような面持ちになる。

「言われてみれば確かに自分でも妙な感覚だったような気がするな、アーツには詳しく無いのだが、あの時はああ動くのが最善であるような気がしたのだ」

彼女達を感じた奇妙な感覚、それはルドルフからして気になることに繋がっているような気がするものだった。

ラウラとエマは勿論の事、ルドルフはアリサとも共に戦った経験など無い、にも関わらず今の戦闘は上手く行き過ぎた。

戦闘で巧みに連携を取る事など相当な経験を積み重ねなければ容易いことではない、それなのに何故、と。

運が良かった、好条件が重なった、そんな言葉では説明のつかない何かを、この時ルドルフは感じ取っていた。

ユーシスの矜持

「ARCCUS 駆動、行きますー！」

エマの眼前に生じた拳大の炎が宙を舞いドロームを直撃し、着弾した火球は燃え広がると粘体生物を一瞬の内に致死範囲まで焼き焦がす。

焼き払われたドロームの周囲に居た甲虫——コインビートルがその火勢を恐れるように散らばっていく、その内の一匹をラウラの剣が捉え両断した。

残る三匹のコインビートルが反撃しようと一斉にラウラへ飛び掛かるが、彼女の魔獣の動きを読み切ったような最小限の体捌きとあるはずの重量を感じさせない滑らかな剣捌きで躲され、あるいは剣の腹に打ち飛ばされていく。

襲撃を払いのけたラウラは剣を高く頭上に掲げると目の前直線に並ぶ形にされた甲虫達を睨み据えた。

「フウ——」

溜めをつくるような呼気、瞬後ラウラはキツと目を見開くと構えた両手剣を踏み込みながら全力で地に叩き付けるように振り下ろす。

その一撃は目の前にいたコインビートルを押し斬ったのみならず、刃先から衝撃波が

迸り延長線上にいた二匹をも呑み込みその甲体を粉碎しながら吹き飛ばした。

体内に巡る《気》を利用した剣技、広くは戦技クラフトとも呼ばれるその技によって地を這う魔獣を一掃したラウラの背後を二匹の飛び猫が抜けていく。

狙われているのは後方にいたアリサとエマ、しかしラウラはそれを慌てることなく見送った。

アーツを放ったエマより少し前に位置取っていたアリサと入れ替わるようにして最後方にいたルドルフが前に出てくる。

立ち塞がる彼に対し飛び猫達が牙を剥き出し敵意を露わにするも、怯むことなくルドルフは拳を振るい、飛び猫の牙が届くより早く早く斜めに打ち下ろす手刀が一匹の首をへし折り、続くもう一匹の顔面をすれ違いざまに振り抜かれた正拳が小さな頭蓋ごと打ち砕く。

「アリサ」

「分かっているわ!」

ARCUUSに手をかけながらルドルフが発した呼びかけに応じたアリサは既に進路の先、交差路の角から体を覗かせアーツの準備姿勢に入っているドロームに弓の狙いをつけていた。

矢をつがえる瞬間、アリサは導力弓に仕込まれた導力器に触れその機能を駆動させ

る。

鏃^{やじり}の先に赤い揺らめきが生まれ、撃ち放たれた矢はその揺らめき——炎を纏いながら空を駆けドロームの粘体に突き刺さった。

物質的な攻撃に対しては耐性のあるドロームだったが矢が纏う炎に巻かれたまらず、といった体でアーツの展開が解ける。

すかさずオーブメントを駆動させていたルドルフのアーツ、エアストライクが追い打ちドロームに止めを刺した。

いずれも小型の魔獣といえど八体の群れを危なげなく処理した四人は周囲を警戒しつつ陣形を戻して奥へ進み続ける。

「本当にもうきりが無いわね、いつになったら出口に着くのかしら」

「ふむ、ここままで昇った高さを考えればそろそろ地上は近い、終点も遠くは無いだろう」

「だといいいけれど……それにしてもエマはアーツに大分慣れてきたんじゃない？ さっきの初動、随分様になってたわよ」

「そんなに大したことはありませんよ、使っているのはまだ初歩のアーツばかりですから」

アリサに今の戦闘でのアーツによる先制攻撃をそう評されるとエマは照れくさそうに笑い謙遜の言葉を口にするが、幾度かの戦闘を繰り返す中で彼女は初めて手にしたと

いう戦術オーブメントの扱いに早くも順応し、火の属性力を秘めた紅耀石カーネリアのクオーツが支給されていたこともあってドローメのようなタイプの魔獣を素早く処理してみせるまでになっていた。

同種のクオーツを支給されていたアリサも弓での射撃に時折アーツを交えている一方で、ラウラは戦術オーブメント駆動の感覚になかなか馴染めずにいる。

それでも長大な両手剣を使いこなす持ち前の剣技だけで四人の中で最も多くの魔獣を斬り捨てている彼女だったが。

「——ふむ、ルドルフ」

「何でしょう？ ラウラさん」

何事か思い立った様子でラウラは左腕の剣帯に剣を吊ると、ARCSを取り出しそのオーブメント盤から蒼い煌めきを放つ、蒼耀石サファイヤのクオーツを一つ取り外してルドルフの方へ差し出した。

「どうも私が持つよりそなたが使ったほうが良さそうだ、受け取ってくれぬか」

「僕にですか？ ですが……」

確かにラウラはアーツをほとんど使用しないスタイルで戦ってはいたが、戦術オーブメントの利用法は何もアーツだけではない。

ラインを繋げ導力を僅かに流し込むだけで使用者の身体能力を向上させたり、攻性

アーツに対して威力を削ぐ防御障壁を展開することができる。

もとよりラウラが持っているような駆動の起点となる中央スロットから複数の導力ラインが伸びているタイプの戦術オーブメントはそういった用途に特化した造りでもある。

アーツが不得手だとしてもその有用性は確かであることから差し出されたクオーツを受け取ることにルドルフは難色を示すが、ラウラは首を振り言葉を重ねた。

「このARCCUS、使いこなせば確かに便利なのだろうが私にはまだ慣れないようだ、無理をして隙を晒すような事があつては本末転倒、そして我らの中で最も導力に余裕があるのはそなたであろう？　ならばこうするのが最善だ、貸し借りが気になるといふのならここを出てから返してくれば問題ない」

全く折れる様子の無いラウラにルドルフも観念して手を伸ばし、差し出されたクオーツを受け取った。

「ではこの場だけ、お借りさせて頂きます」

ARCCUSを開きルドルフは受け取った蒼いクオーツをオーブメント盤にセットする。

これで彼の戦術オーブメントにはマスタークオーツを除けば翠耀石が一つ、蒼耀石のクオーツが二つ組み込まれ、属性力を累算する単一ライン型の特性上これまでより高出

力のアーツが使用可能になった。

「でもラウラは本当に大丈夫なの？」

「心配無用だ、ここまでの戦いで見た限りそこまで厄介な魔獣は居ないらしい。それに

——」

アリサの心配の声にラウラは再び抜いた両手剣を見つめ、何か思いを馳せているような間を挟んで言葉を続ける。

「私が目標とする父上の実力ならば戦術オーブメントに頼らずともこの程度何の障害にもならない、私も弱音を吐いてはいられぬ」

意思の強さを感じさせる、静かだが強い口調でそう言い放ったラウラの言葉にアリサとエマが思わず感嘆の息を漏らす。

「私からすればラウラさんも十分すごいんですけど、お父さんはそんなに……？」

「うむ、まだ私などでは足元にも及ばないだろう、娘である私がこう言うのもなんだが、剣士としても、父としても、尊敬できる素晴らしい人だ」

恥じる様子も見せずそうラウラが口にした言葉にエマが感心を深める一方で、アリサの表情には僅かに憂いのような色が差す。

「お父さん、か……」

彼女の父はルドルフがラインフォルトに雇われるより以前に亡くなっており、その事

に端を発して起こった変化が彼女の家族の形を歪め、深い傷を残すことになっていて、それをルドルフは知っていた。

しかしそれだけ、ラウラの発言で思い出してしまったのだろうその存在に彼女が今どんな思いを抱いているのか、窺い知ることが出来ておらずアリサの顔色に気づきながらもルドルフは何の言葉もかけられることもできなかつた。

「む、どうかしたかアリサ？」

「あ……ううん！　何でもないわ、それより——他の人達は大丈夫かしらね、一人で行っちゃったあの三人なんか特に」

殊更に明るい口調で誤魔化すようにアリサはそう話題を切り替えたが、幸いにしてラウラに気にした様子は無く追及されることはなかった。

「そうだな、ユースリスといったか、アルバレア公爵家の彼は剣の心得があるようだったが銃を持っていた男子の方は少し心配だな」

「すれ違いになっていないといいのですが……あの小さな女の子にも会えていませんし」

誘われるよりも早くダンジョンに入ってしまった少女のことを心配するようにエマが呟く。

行き止まりに突き当たる分岐路も少なくない道すがら、遭遇する魔獣を速やかに殲滅

「できることでここまでダンジョン内を順調に踏破していた四人だったが、どこかで追い越してしまっただか、あるいは追い付けていないのか、先行した三人のいずれとも出会えてはいなかった。」

「あの女子ならば大丈夫だろう」

「え？」

「あの落とし穴に掛からなかったこともそうだが、随分と荒事に慣れていようだった。だからこそ共に来てほしかったのだが……この魔獣の強さを考えればそう心配することはないだろう」

思わぬ発言にエマは目を丸くしていたが、ルドルフは広場から立ち去った少女の姿を思い起こしながら得心が行くのを感じていた。

見た目の幼さと裏腹の冷静さを保っていたあの小柄な少女が腰に提げていた武器は一对のナイフと拳銃を一体化させたような特異なもので、とても素人が扱えそうにはない代物だった。

急ごしらえには見えないそんな得物を持ち合わせていることからしてラウラのように武門の家柄、ではないにしても実戦経験者であることを窺わせる印象は十分にあったのだった。

「そういえば彼も珍しい武器をお持ちでしたね」

「ふむ？ 彼とは」

「はい、リインというお名前だそうですが、あの黒髪の……あつ」

十字の刃が備わった槍を持っていたノルド出身というガイウス、エマと同じく支給品である魔導杖を携えていたエリオット、そして腰にルドルフが気にした得物を佩いていたリイン。

広間で別れた三人の出で立ちを思い出しながらその特徴を口にした瞬間、アリサの眉が不穏に跳ねるのを見て取りルドルフは失言を悟る。

しかしそんな姿を見た彼女もわざわざ言い咎めることではないと判断したのかそれ以上の反応はため息を一つ漏らしただけだった。

「ああ、あの……確かに帝国ではあまり見ないものだろうな」

「というと、ラウラさんはご存知なのですか？」

ルドルフが目にしたのは黒塗りの鞘に納められた剣、と思しき武器。

思しき、と言うのもその形状がルドルフの知るものとは僅かに異なっていたからだつた。

「うむ、あれはおそらく太刀と呼ばれる東方由来の剣だろう、帝国縁の剣に比べその刃の鋭さに重きを置いた造りをしてしていると聞く」

ラウラの説明によれば剣と太刀、同じ剣という武器ではあってもその性質には確かな

違いがあるものらしいのだが。

——肉を切る包丁と魚をさばく包丁のような違いでもあるのでしょうか。

剣という代物に造詣の浅いルドルフはそんな微妙に的を外した感想を抱いていた。

「なんにせよ背の高い男子も槍を持つ所作が様になっていたし、何よりその太刀を持っていた者、ひよつとするならば……いや、とにかく素人では無さそうだった、心配無用だろう」

言葉の途中で不自然に間を挟んだラウラを三人は少し気にするも、彼女の有無を言わせない雰囲気口を挟むことは出来なかった。

「——む」

「どうしました?」

「音がする、この先で誰かが戦っているようだ、そう遠くは無いな」

僅かな戦闘の気配をいち早く感じ取ったらしいラウラの言葉にルドルフ達は顔を見合わせ、頷きを交わし道先へと足を走らせた。

ルドルフ達が階段を駆け上がった先の開けた空間で、数種の魔獣と交戦する男子生徒

の姿があった。

護拳の備わった騎士剣を振るい、飛び掛かる一匹の飛び猫を両断するその人物は先の諍いで名の知れているユーシス・アルバレア。

散らばる魔獣の多さに応援に入ろうとしたルドルフ達だったが、それは無用な心配だった。

今また一匹の飛び猫を斬って落としたユーシスは背後から襲いかかったコインビートルを振り向きざまの刺突で難なく頭部を貫き仕留める。

続けてこれまでルドルフ達が交戦したものと同種の魔獣が群れたかっていたが、彼はその動きが全て見えているかのような軽やかな立ち回りで全てを難なく躲し、返り討ちにしている。

「ほう……」

マキアスに対して示してみせた自信が決して虚勢や傲慢などでは無かったことは明らかかなその剣腕にラウラも感嘆の息を漏らす。

アーツを使うドローメタイプが居なかつたこともあるが、一分足らずの間に周囲の魔獣はユーシス一人の手により葬られてしまった。

周囲の魔獣が全て息絶えたことを確認したユーシスは構えを解き、だが臨戦の緊張感
は漂わせたまま顔をルドルフらの方へ向けた。

「お前たちは——そうか、道理でな」

一人一人を一瞥したユーシスは何事かに納得いったようなことを呟き、剣にへばりついた魔獣の体液を払い、拭き取ると鞘に納めた。

それが人前での抜刀を避けた礼儀であることに気づき、ルドルフ達も各々剣、あるいは矢などにかけていた手を離した。

「見事な腕前だな、感服したぞ」

「……アルゼイドの息女にそう評されるのならば俺の剣も捨てたものではらしいな」

素直にユーシスの実力を褒めたラウラだがそんな言葉を返され目を僅かな驚きに瞪る。

「私の事を存じ上げていたか」

「いや、だがその両手剣、振る舞いを見れば察しはつく、かの光の剣匠の高名、そして直々に剣を学んでいるというご息女の噂は聞いていた」

四大名門、アルバレア家の膝元であるバリアハートはアルゼイド子爵が収めるレグラムに程近いこともあり彼はラウラのことを知り得ていたらしい。

「では改めて名乗らせてもらおう、ラウラ・S・アルゼイド。ご存知の通りレグラムの出身だ、宜しく頼む」

「——アリサ・Rよ、宜しくお願いするわ」

「僕はルドルフ・シュヴァルベと申します、どうか宜しくお願い申し上げます」

ラウラに続いたアリサの姓を伏せた自己紹介に一瞬眉を顰めたユーススだったが矢継ぎ早にルドルフが名乗ったこともあり指摘の言葉は出ない。

二人に続き名乗ろうとするエマだったが、その様子には少しばかりの困惑が見て取れた。

「エマ・ミルステインと言います、辺境の出身で帝国の礼儀に疎いところもありますが失礼の無いよう気を付けますので、どうか宜しくお願いします」

その畏まった物言いにユーススはフン、と小さな嘆息を漏らすとエマへと顔を向けた。

「俺の家柄については既に知れていることだろうが、余計な気遣いは無用だ、学院生徒は平等たれ——そう校則にも記されていることぐらい主席ともなれば記憶しているのではないのか？」

「え、ええ……確かにそう記されてはいましたが」

確かに彼の言う通り、トールズ士官学院の校則にて生徒の身分による差別を行わない旨が記されている。

しかし平民階級と貴族階級で分けられたクラス、学生寮などを初めとして古くからの伝統と共に貴族階級の優遇制度が残っているのは事実でありその校則が建前として有

名無実化していることも周知の事実であった。

「ならばこそそのような遠慮は無用だ、俺の家が公爵家だからとて、畏まる必要など無い。……どこぞの誰かのように牙を剥くというのならば相応の態度で臨ませてもらうがな」

おそらく先だつて口論になつたマキアスの事を言っているのだろう、それを置いても公爵家の子息という肩書きから高圧的な人柄を予想していた面々は顔を見合わせてしまふ。

アルバレア家、それとも彼自身の気質がそうさせているのかはルドルフ達に知る由も無かつたが、少なくとも敬意を持つて接することが彼に望まれていないことは理解された。

「成程、ではそのようにさせてもらおう、時に我らに対して何か思うところがあつたようだが？」

「何と言うほどの事でもない、他の連中が仕留めた魔獣は幾度も見たが、その中でも数多いのはお前たちの仕業だろう、お陰で俺はここまで先行できているのだからな」

この入り組んだ造りの迷宮には行き止まりに突き当たる通路も少なくは無く、他に先行したマキアスと銀髪の少女とも出会っていないことからどこかですれ違いになつていることは皆予想していた。

ルドルフ達が苦戦することなく多くの魔獣を片付けていることは他の面々の交戦機会を減らす助けにもなっているらしい。

「剣士、弓使い、アーツ使いが……二人か、即興の編成にしては十分だな」

「確かに我らは構成に恵まれたな。そなたはこの先も一人で行くつもりか？　もう出口も近そうなことだし、同行するのも手だと思っただが」

「気遣いは無用と言ったが、馴れ合うつもりもない。大した魔獣も居ないようだし俺はこのまま行かせてもらうつもりだ。——お前達がそれだけの人数を揃えておいて心許ないと言うのなら手助けしてやらんこともないがな」

あくまで単独で行くつもりという事に加え聞きようによっては挑発的にもとれるその言葉にアリサがやや眉根を寄せていたが一人、ルドルフは表情を変えずにさらりと口を開いた。

「でしたら是非とも同行をお願いしたいです」

「——ルデイ？」

「駄目でしょうか？　ユースさんが前衛に加わって下さるなら僕も後衛に徹することが出来ますし、安全度はより増すかと思えますが」

何の躊躇いもなく助力を求めたルドルフをアリサが見るが、当のルドルフはそれをキョトンと見返し何の問題があるのかと言わんばかりの顔をしている。

「……本気で言っているのか？ お前達がこの辺りの魔獣程度に苦戦するとも思えんのだが」

「確かにこれまでの戦闘に余裕はありましたが、より確実に安全を期することができないならそれに越したことはありません。ユーシスさんがお嫌でないのですしたら力を貸して頂けないでしょうか」

ユーシスが意外そうに聞き貸すもルドルフは淡々と答える。

言葉自体は合理的だが、予想外の反応だったのか表情を険しくするユーシスにラウラがフフツと小さく笑いながら語りかけた。

「さてどうするユーシス？ 私の見立てでは彼は保護されるべき力無き民草、というわけではないようだが、ここまで率直に助けを求められて無視するのは帝国貴族の沽券に関わるのではないか？」

「……承知している、帝国貴族に二言は無い」

物言いに難こそあれど自分から手を貸しても良いと言った手前、貴族としてのプライドもあり今更前言を翻すことも出来ないユーシスは浮かべた澁面を嘆息一つ吐いて消し去っていた。

「良いだろう、出口までそう遠くは無かろうがそれまでの間付き合っただけでやる」

承諾の意を示したユーシスにラウラとルドルフが頷き返す一方で、アリサとエマはつ

い目を丸くしてしまふ。

あくまで尊大な言い方だったがユーシスの情を感じさせるこのやり取りで大貴族の子息という先入観から始まったそれぞれが持つ彼への印象に変化の兆しが見え始めていた。

first link

ユーシスを加えたルドルフ達に最早それまで遭遇したような魔獣は障害にもならなかつた。

ラウラやユーシスが評したようにそもそも魔獣自体の脅威度が低く、戦い慣れた二人が前衛を務めるともはや時折ちらついていた危うさも見えない。

湧き出る魔獣を蹴散らすようにして五人はやがてそれまで通過してきたフロアと僅かに異なる印象を受ける造りの部屋へと辿り着く。

開けた中央の空間、壁際の上方には部屋全域を見下ろしているかのような翼を備えた四足獣の石像が鎮座しており奇妙な存在感を放っている。

奥には上の階へと続く階段が見え、その先の出口からは迷宮のあちこちに仕掛けられていた導力灯の明かりではない、自然の明るさが差し込んでいた。

「ふむ、どうやらここが終点のようだな」

共通の認識に至った五人が大なり小なりに表情を綻ばせた顔を見合わせる。

入学式からの予期せぬ事態がようやく終わるのだという安堵、しかしそこに水を差すように不穏な気配が起こる。

「……？」

初めに気づいたのは誰だったか、いずれにしてもそう差も無く皆がその音に気づく。静かな空間に響くその硬質で軋むような音はそれだけはっきりと聞き取れるものだった。

「何？ この音……」

「——あれだ！」

鋭い瞳で見上げたラウラの視線の先、目を引いた石像と思われていたものが鈍い音を響かせながらゆっくりとその足を踏み出していた。

緩慢な動作から一転、次の瞬間その石像は翼をはためかせ飛び上がると宙を舞い、ドルフ達の前へと飛び立った。

口元から生々しい唸りまで漏らしながら石の眼光で皆を見据えるその石像だったモノ——

「《石の守護者》……！」

その正体の名がエマの口から呻きにも似た呟きとして漏れ出る。

現代ではほぼ失われつつある中世の魔導技術により生み出された人造の魔獣とも呼べる存在、その一つの姿が目の前に現れた凶獣のような代物だった。

過去この大陸で繁栄を誇った古ゼムリア文明、その崩壊後の混迷期である暗黒時代に

はこのような人造魔獣が数多く造られ、古い遺跡などには守護者としての機能のままに訪れた旅人や調査員に襲いかかるこの類の魔獣が少なくない。

よもや学院の裏手にある施設でそんな魔獣にお目にかかるなど少年少女達は思いもしなかっただろうが。

「暗黒時代の産物とやらか……」

「どうしてそんなのが学院にあるのよ——っ！」

「言っている場合ではなさそうだ！」

ルドルフ達を排除対象と認めたらしく重厚な足音を立てながら襲いかかるガーゴイルをそれぞれ驚愕を押し殺して迎え撃つ。

真っ先にラウラが先頭に躍り出ると機先を奪われまいとするように先んじて両手剣を振り抜いた。

「はあっ——っ！」

前脚を薙ぎ払ったラウラの一撃、鈍い音が響きまさしく岩を切りつけたかのようなその手応えにラウラは顔を歪める。

十分に体勢を整えられなかったとはいえラウラの斬撃は並の魔獣なら容易く両断し得るだけの威力を持っている。

だが《石の守護者》との名に違わず目の前の魔獣の体躯が持つ堅牢さは彼女をして

ガーゴイルをルドルフ達の方へ逃さないようぎりぎりの距離で爪を躲しながら注意を引き反撃の機会を窺っているユーシスとラウラ、二人に守られ余裕のある後衛としてその機を作る役割を果たすため、ルドルフもまたARCUの起点、中央スロットに指を添えた。

「エマ、合わせて！」

「はい！」

アリサの呼び掛けに鋭く応じ、エマが魔導杖を構える。

引き絞られた弓から矢が放たれるも石の表層に弾かれ有効打とはならない、しかし注意を引かれたガーゴイルが首を向けたと同時に、エマが振り抜いた魔導杖から発生した紫苑の導力球がその顔面に直撃した。

秘められた衝撃力が零距离で弾けガーゴイルが仰け反るように身を反らし後退しながらたたたらを踏んだところへ続けてルドルフが展開していたアーツを解放する。

燐光を放つ術式陣が霧散し、大気中の水分がルドルフの眼前に凝縮されると砲弾のようにガーゴイルが地に着こうとしていた前脚の一方へ撃ち出される。

高密度に圧縮された水弾に打ち払われ前脚を搦われたガーゴイルは石の体軀をしているというのに声を出す機構が仕込まれているのか、人造物にそぐわない生々しい悲鳴を上げながら肩を地に着く形で前のめりに倒れ込む。

その絶好の隙にすかさずラウラが駆け、肩の上に高く剣を振りかぶった。

「はああっ！」

気合と共に振るわれた長大な刀身は持ち上がった右の肩部を捉え、硬い斬撃音を轟かせた。

ラウラの一刀をもつてしても両断とまではいかなかったが、半ばを越えて断たれた石獣の右肩より先は力なく垂れ下がり、最早十分な機能を果たせないであろうことが見て取れる。

痛撃を見舞ってくれたラウラにガーゴイルが吠えながら残る前腕を地を擦るような軌道で振りつけるが、飛び上がりそれを避けたラウラは目の前の顔面を蹴りつけその勢いで飛び下がり素早く距離を取った。

立ち上がるガーゴイル、前脚の一方を半ば失い攻撃力は激減している、このままなら仕留めきるのも時間の問題——だがそう予測しかけた皆の思惑を覆す事態が起こる。

「なっっ！」

一撃を刻んだラウラのみならずユーシスやアリサも驚愕に瞳を見開く。

大きく抉れたガーゴイルの肩部、それが内から盛り上がるように埋まっていき、やがて元の形へと跡形も無く復元してしまっただった。

「くっ、再生しただと？」

傷が塞がるや否や飛び掛かってきたガーゴイルをラウラは剣を盾にしすんでのところで受け止める。

すかさずフォローに入ったユーススが斬りつけ押し切られる目前でガーゴイルを退かせた。

「すまぬ、助かった」

「礼など不要だ、それよりもあれだけの傷を塞ぐ再生能力、早く気づくべきだったが……手を考えなければまずいぞ」

これまでの攻防で二人が刻んできた細かな傷もいつの間にか消えてしまっていることをその時にしてルドルフ達も気づいた。

冷徹な面持ちを張り詰めさせたユーススの言葉通り、それまでのような攻め方をしていてははずれ限界が来るのは体力に限界のあるルドルフ達の方だ。

ガーゴイルの再生力の程は計り知れていないが最悪、限度が無いとするなら並の手段では仕留めることすらできない。

「こうなったらもう退くしかないんじゃない……」

「——いいえ」

アリサが口にした諦めを否定したのは、ガーゴイルをじつと見据えているエマだった。

おっとりとした印象のあった彼女がこの状況でも冷静さを保った瞳で、どこか厳かな雰囲気まで漂わせていることが周囲を驚かせる。

「この種の人造獣にはどこかに機能を制御する核が存在するはずですが、それさえ破壊できれば無力化できると思います」

「本当か!？」

「せめてそれがどこか分かればいいが……」

エマの言葉に光明を見出しながら残る問題に言及するユーシスに応えるのもまた彼女だった。

「核はこちらで探します、申し訳ありません皆さん、それまでどうか足止めをお願いします」

そう言うなりエマは魔導杖に触れ、その瞳が集中するように細められていく。

「これは……」

彼女の魔導杖から特殊な導力波が発せられ始めたのに気づき、ルドルフが僅かに瞠目する。

その導力波の性質を感じ取ったルドルフはエマを庇うように一歩前に出ながらアリス達に向けて告げた。

「エマの魔導杖には解析能力があるようです、おそらく彼女ならその核の位置を特定で

きるかと」

ルドルフの予測が正しければ魔導杖の解析した情報が同期したエマには掴み取れているはずだった。

「！ 心得た、ユースス」

「ああ！」

即座に剣士の二人はガーゴイルに向かって距離を縮め剣を届かせ得る、だが前に出過ぎず回避行動に余裕のある立ち位置で再び交戦に入る。

確かな損傷を与えるには遠い、だが相手と違い自己治癒など出来ないラウラ達はこの状況で傷を受けるわけにはいかない、ガーゴイルを釘付けにしつつ回避に専念するといふ戦いは精神を擦り減らす厳しいものだが学生にして非凡な剣の才を持つ二人は苦悶を表情に浮かべながらもそれをこなしていた。

迂闊に注意を引いてはかえってガーゴイルの動きをコントロールしづらくなってしまふことを理解できてしまふアリサは弓をきつく握り締めながらも危険に身を晒している二人の戦いを見守り続ける。

アリサは彼女達のように特別武術に秀でていくわけでもなく、大型魔獣を相手を手玉に取るような立ち回りなど出来ない、それが理解できてしまふからこそ手を出さないといい選択しかできない自分の無力さ故の焦燥に胸を焼かれていた。

「ルデイ……?」

同じ立場であるはずの少年の顔をちらと見たアリサは思わず息を呑んでしまった。

ガーゴイルと戦う二人を見るルドルフ、その焦りどころか戦う二人を心配するような不安の色すら無い表情——逆に見るものを不安にさせるような無感動さに。

どうして、という声にならない眩きがアリサの口から漏れた時、エマが魔導杖の構えを解き叫んだ。

「見えました！　核は頭部——破壊するか首から先を分断すれば機能を停止させることが出来るはずです」

その報せにアリサも逸れかけていた思考を打ち切り視線をガーゴイルへ引き戻し構え直す。

ラウラとユーススの視線が交錯し、決着へ向かう意思を交わす。

ルドルフとエマがARCCUSに手をかけ一気に攻勢に出ようというところで、変化が起こった。

「あっ!?!」

ガーゴイルが不意に動きを止め石の瞳でルドルフ達を睥睨した後、翼をはためかせ宙へ舞い上がる。

強襲を警戒し皆が緊張を走らせる中ガーゴイルが激しく羽ばたいた瞬間、空間に嵐の

ような風圧が吹き荒れた。

「ぐっ……」

「……………これ……………は……………」

発たれた風の勢いにラウラやユーシスですらふらつく体を抑えきれず剣を地に刺して膝について留まるのがやつと、残る三人もその場に屈み込んでしまう。

全員が体勢を崩された窮地でガーゴイルが滑空を始めラウラ達の間を抜け、向かう先にはうずくまるアリサ。

ガーゴイルに対し即座に応戦できる手段を持たない上咆哮の衝撃から立ち直っていない彼女にそれを防ぐ余力などあるわけもなく、迫る危機に目を瞑ってしまったアリサだったが次の瞬間、金属の打ち擦れる音が響き渡る。

おそるおそる臉を開いたアリサの目前に広がっていた光景はのしかかるように前のめりで爪を振りつけたガーゴイルと、それを盾で受け止めるルドルフの姿だった。

「ルディー！」

「……………っ」

盾仕込の導力器から発生した防御壁で威力を減殺こそしたものの気を抜けば押し潰されてしまいそうな重圧に腕が軋みを上げるのを感じながら歯を食いしばり耐え凌ぐルドルフ。

狙いがアリサと気づいた瞬間、その間に割り込めるのが中衛の自分だけであると判断するまでもなくルドルフは自らの四肢に命じ、全身を駆動させアリサの前に割り込むと腕を振り上げていた。

のしかかる石爪に体重が乗り押し切られる間際、身を屈め盾の表面に爪を滑らせるとルドルフはガーゴイルの腕の内側へ飛び込む。

伸ばした足が踏み抜かんばかりに重く地を叩き、生じた反発を乗せた拳が真下からガーゴイルの頭を打ち上げる。

石の顎が無理矢理に閉じられるだけに収まらず、乾いた破碎音を立て下顎に亀裂を走らせた。

「ふ——っ——」

先の交戦でコインビートルを葬ったときと寸分違わない足さばきでルドルフが身を捻り、旋回させた足刀で仰け反るガーゴイルの首元を穿った。

石の巨体が一瞬浮き上がり、ルドルフも反発を受け切れず互い弾かれたように後退る。

歴然とした体格差のある相手を防ぐばかりかその身一つで押し返したルドルフに思わずアリサ達は目を見開き固まっていた。

すぐにそんな場合ではないと立ち直ったラウラが剣を杖にして身を起こすが、それよ

りも対敵の再動は早かった。

挙動に若干の揺らぎを見せながらも四肢を地に着いたガーゴイルは顎、首元に罅を刻み込んだルドルフをまるで怒りの感情がある生物のように睨み据える。

既に二つの傷は修復が始まり、徐々に亀裂が埋まっていくが完全な修復を待たずガーゴイルはその翼をひるがえす。

飛び上がろうとする姿勢に皆が食い止めようと仕掛ける寸前で、飛翔しようとしていたガーゴイルの顎が突如として爆ぜた。

「今のは——！」

罅割れた顎の一部が砕け石片を撒き散らしながら呻くガーゴイルを襲ったのは一発の導力弾だった。

倒れ込み窮地にあつたルドルフがその一撃が飛来した方を仰ぎ見ればその先にはこの部屋への入り口に並び立つ男子達の姿があつた。

「間に合つた……君達、大丈夫かつ!？」

ショットガンタイプの導力銃を手に叫ぶ男子マキアス、ガーゴイルを怯ませたのは彼の導力銃による銃撃だった。

「わわっ、大きい……」

「帝国にはこんな魔獣が居るのか……」

ここに来るまで徘徊していた魔獣とは一線を画する存在感を放つガーゴイルの姿に驚きを露わにするエリオットにガイウス。

その横で一人、リインは状況を見取るなりその場で携えた薄い刀身の剣、太刀の切っ先を前に向け掲げると膝を曲げ体勢を低く構えた。

——式ノ型、疾風^{はやて}。

念じるようなリインの囁きがルドルフの耳に届いた次の瞬間、太刀持つその姿が霞んだ。

駆けつけた四人の中でいち早く驚愕を抑えこみ、臨戦の構えに入ったリインを注視していなければ何が起こったのかも分からなかっただろう、消えたと見紛うほどの高速でガーゴイルまでの距離を詰めた少年の動きにルドルフが瞠目する。

「シッ！」

ガーゴイルの脇へ瞬時に歩を進めたリインが振り抜いた太刀の刃が石獣の前脚を真一文字に切り裂く。

流麗ではあるがラウラの大剣と比べ頼りなくも見える細身の刃は堅牢な石の脚を先のラウラの一撃にも届く程深く刻み、一瞬でガーゴイルに攻めかかった動きもあいまつてその場の皆を驚かせた。

呻きながら反撃に転じようとするガーゴイルを更なる闖入者が襲った。

「えっ?」

脇を駆け抜けた小さな影にエリオットが気の抜けた声を漏らす。

その影、両の手にナイフと銃を一体化させたような得物を握る銀髪の少女が駆け、ラインに気を取られたガーゴイルの身を駆け上がるように登り詰める。

ガーゴイルの反応が間に合わない俊敏さでもって背まで登った少女が手の短銃剣を閃かせ翼の根元を斬り裂いた。

重ねての不意打ちにガーゴイルが周囲のラインや少女を引き離そうとするように全身と長い尾を振り回すが、すかさずラインは後退し少女もまた背を蹴って飛び離れていた。

さらに少女は離れ際ガーゴイルへ向けてナイフに備わる引き金を引き自身が刻んだ傷跡へ正確に導力弾を撃ち込んでいた。

傷跡を抉られ更なる痛手にガーゴイルは苦しげな唸り声を上げながらその身をふらつかせる。

「すごい、これなら!」

その様子に駆けつけた男子たちが快哉を上げるが、それまで交戦していたルドルフらは緊張を緩めることが出来ない。

「気を抜くな、こいつは……!」

ユーシスが警告するまでも無く、ビキビキと氷の軋むような音を鳴らしながらガーゴイルの傷が再び内から埋まり修復されていき、エリオット達は驚愕に目を見開かされる。

「馬鹿な……」

「中枢部は頭に、そこさえ破壊できれば倒せるはずですよ」

呻くマキアスに持ち直したルドルフが告げると悲壮な表情になっていたエリオットも気を取り直し、導力杖を構えていた。

「良かった……皆揃ったし、これならきつと——」

この迷宮に落とされた全員が揃い明らかな数の優位にエリオットをはじめとした数名が瞳を輝かせるが、その状況が孕む危険性に一部の者達、そしてルドルフもまた気づいてしまった。

VII組生徒はルドルフとアリサのような間柄を例外として今日出会ったばかりでまともな連携など望めない、そんな中で十人も人間が目の前的大型とはいえ全長三アージュにも満たない魔獣相手に挑みかかればどうなるか。

接近戦ではお互いが間合いに踏み込んでしまわないよう位置取りから仕掛けるタイミングまで考慮しなければならず、射撃武器やアーツを用いる者達なら同士討ちの恐れがあり迂闊な攻撃は出来ない、後ろに気を回しながら戦えというのも前衛を務めるメン

バーにとって重荷となる。

それまで果敢にガーゴイルと戦っていたラウラとユースもそれを危惧し表情は陰しくなっていた、そんな中一人——まなじり 毗まなじりを決して声を上げる少年が居た。

「皆！……ここが踏ん張りどころだ、一気に決めるぞ！」

太刀を掲げ叫ぶリイン、その激励が揺らいでいた全員の意識をまとめ上げていた。

マキアスとリイン、銀髪の少女が与えた傷が修復しきっていない今こそが勝機でもある、その場の全員が決着を着ける覚悟を決めたとき、ルドルフの身を奇妙な感覚が包んだ。

「——？」

先制の銃撃を放とうとするマキアスの呼吸、脇の死角から隙を突こうと回り込むガイウスの動き、それぞれ攻勢に入った彼らの挙動が視界に入らずとも手に取るように把握できたのだ。

だが今はそんなことを気にしていられる状況でもなく、その感覚は間違いなくその場で有利に働くものだった。

何故——という疑念を呑み込み、ルドルフはARCCUSを構えアーツの準備にかか

中央のマスタークオーツに触れ起動を確認し、淀みない動きで一本のラインに沿って

指を滑らせていく。

目的とするアーツに必要とされる属性力は脳裏に刻み込まれていた、エスメラス翠耀石のクオーツには触れるのもそこそこに次なるスロットへ導力ラインを繋げていく。

支給されたものにラウラから借り受けた蒼耀石サファイヤルのクオーツが埋まった二つのスロットへ導力を十分に落とし込むとARCUUSがこれまで使用してきたときと比べ僅かに大きく唸りを上げ機構が廻り、浮かび上がった術式陣がルドルフの身を取り巻く。

そのアーツはエアストライクなどといった最下級のものとは比べ駆動負荷も大きくなるため発動にも少しばかりの時間を要するが、そのための間を繋いでくれる仲間がこの場には揃っていた。

「リミット解除……喰らえっ！」

マキアスの銃から放たれた一粒弾が再びガーゴイルを呻かせた瞬間にガイウスが十字槍を鋭く突き出し後ろ足を穿つ。

与えた損傷こそ浅いものだったが反撃に転じる間すら与えず続けざまにエマとエリオットが放っていた導力球が正面から着弾し爆ぜるとガーゴイルもたまらず仰け反つてしまう。

その隙に離脱したガイウスと入れ替わるようにして左右からリン、ユーシスが太刀と騎士剣を一閃し伸び切った両前足の膝裏を斬り裂いた。

石の体といえど生物を模しており身体動作もその条理に沿っていたガーゴイルが関節を深く裂かれたことによりがくりと上体を落とす。

一気呵成に畳みかけられ身動きすらままならないガーゴイルは脇の二人を威嚇するように肩を揺らすと傷が塞がりかけていた翼を広げ抵抗の構えを見せる、がしかし。

「させないわよー！」

ライン達が一步退く瞬間を読み切っていたように導力弓に組み込まれた機構の一つ、^フ火炎を^ラまと^ンわ^ベせ^ルた^ル一糸をアリサが放ちガーゴイルの眉間に突き立つとその石貌を炎に包んだ。

けたたましい鳴き声を上げ炎に巻かれた顔面を振り回すガーゴイルはⅦ組生徒たちの間断ない攻めにもはや翻弄される一方だった。

駄目押しのように背後へ回り込んでいた銀髪の少女が唯一健在だった一方の後ろ足を斬りつけ完全に身動きを奪ったとき、ルドルフのARCUUSが駆動を完了する。

へたり込むように体勢を低くした目標へ意識を指向させルドルフはそのアーツを解き放った。

ガーゴイルの周囲に蒼白く円形のゆらぎが複数生じたかと思うや、そのゆらぎから撃ち出された高速の氷刃が弧を描いて収束し中央の術式対象を突き穿つ。

ラインたちが刻んだ前肢の傷、そして翼の根元に食い込んだ氷の刃が秘めていた冷氣

により石の体軀を凍り付かせていく。

傷跡を凍り付かされ再生が思うようにいかずもがき苦しむガーゴイルの首元に満を持して踏み込む女生徒、ラウラ。

その型は先程の奇妙な感覚に見舞われたときから閃きのようにルドルフの頭に思い浮かんでいた。

奇妙なことに彼女こそがその役に最適であると、今日出会ったばかりだというのがそのことを心得たように動き戦局を導いていた。

長大な青い剣を大上段に構えたラウラもまた自らに求められた役割を悟り道中の戦いでそうしていたように真つ先に斬り込むことをせずこの時を待っていた。

「フッ!!」

地を固く踏み締め、気合一閃。

振り下ろされた大剣の刃は石首を一息に両断し、刎ね飛ばされたガーゴイルの凶貌が宙を舞いゴトリと無機質な音を立て地に転がった。

同時、頭部を失った体軀がその動きを停止する。

物言わぬ本物の石像と成り果てたガーゴイル像の前に、皆しばらくの間動きを止めていたが、人造魔獣がその活動を本当に停止させたのだと確信したときようやく誰からもなく緊張していた表情を綻ばせるのだった。

ルドルフとラインフォルト

「ルデイ、こんなところに居たの」

キッチン周りの確認をしていたルドルフが耳慣れた声の方へ振り向くと、十人以上は掛けられそうな長テーブルが中央に鎮座するダイニングルームに私服に着替えたアリスがやってきていた。

「はい、少し食材を買い出してきましたので、冷蔵庫の方に」

「もうそんな……って、確かにいつまでも駅前に行くわけにもいかないわよね、他の寮はメイドさん雇ってるって話なのに、その辺りは皆とも話しておかないといけないかしら」

その日の夕食を外食で済ませたアリスは嘆息交じりにルドルフの意図を察する。

この建物、士官学院第三学生寮はルドルフたち、特科クラスⅦ組に用意された学生寮だった。

古いアパートメントを買い取り改装したらしく十名の新設クラスの為にわざわざ用意したというのは話だけ聞けば豪勢な話である。

とはいうものの学院前にある貴族生徒用の第一、平民生徒用の第二学生寮と比べこの

第三学生寮はトリスタの街の中心から学院とほぼ真逆の駅近くに位置し通学には少しばかり余計に歩かされることになる。

加えて建物を管理する役職も設けられておらず寮内の清掃や食事に関しては完全に自分たちの手で賄わなければならない。

自由な生活環境を与えられていると好意的に解釈することもできるが、かかる手間と労力を考えるなら良い事ばかりでもなく、ルドルフは早々に自炊の準備を整えるため荷解きを住ませるなり商店まで買い出しに出かけていたのだった。

「良さそうなお店は見つかったの？」

「そうですね……駅前の公園傍にあるブランドン商店というお店が品揃えが良かったのでこれからも利用させて頂こうと思います。

店長のお子様から声を掛けられまして、事情をお話しするととても好意的に値引きして頂けましたし」

それは継続的な売り上げが期待できそうな客だと目をつけられたではないかとアリスは推測してしまったが、微笑みを浮かべながら報告するルドルフに不都合があるわけでもないの口にするのはなかった。

元々彼は値切り交渉などあまりしないタイプであり、今後の寮生活において地元の商店とそういった関係を結べるのはむしろ望ましいことである。

「良かったじゃない、キッチンの方には問題無さそう？ 元は結構古い建物みただけ
ど」

「導力製品は新しいものに交換してあるようですので十分かと、この寮も前日に清掃さ
れているようですし」

埃のたまり具合などから入居直前、建物全体に人の手が入っていることを察したルド
ルフは少なくともⅦ組を受け入れた人物たちからの確かな好意を感じ取っていた。

「そう？ 清掃業者でも雇ったのかしら……あの教官がそんな気遣いするとは思えない
けど」

Ⅶ組生徒と同じく、この第三学生寮の一室に住むこととなっているあのサラ・バレス
ライン担当教官を指してそんなことを言うアリサ。

少しばかり悪し様な言い方ではあったがあの特別オリエンテーリングでの印象を考
えるなら無理は無い事かとルドルフも咎めはしなかった。

あのガーゴイルとの戦闘後——

『いやー、やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね、お姉さん感動しちゃったわ』

——などと言いなからフロアの上階から降りてきたサラ、そんな場所に控えていたと
いうことはいざという時助けに入れるよう構えていたのかもしれないが、十分な説明も
無いままダンジョンへ落とされた生徒たちには疑念ばかりが溜まっていた。

当然皆が特別オリエンテーリング、そして特化クラスVII組の設立目的について皆が彼女に問いただす流れとなる。

先の宣言通りサラはすんなりと答えに応じ、明かされた最たる理由はガーゴイルとの戦闘の最後、ルドルフだけでなく皆が感じていたという互いの動きが手に取るようになる感覚、サラ曰くARCUの真価だった。

多少なりラインフォルトに関わっているルドルフ、アリサも知り得ていなかったその機能の名は《戦術リンク》。

完成すればどのような戦闘状況下においても互いの状況を把握、連携することが可能な部隊の構築が可能とされる革命的なシステムだが、未だ試験段階にあり個人の適性により機能の運用度合いに差が出てしまうのが現状なのだという。

そして新入生の内で高い適性を示したのがルドルフら十人、つまりVII組とはARCUの試験運用を目的として設立されたクラスなのだ。

つまるところ特別オリエンテーリングとはARCUの戦術リンク機能、そしてVII組に参加することで伴うリスクを体感させることに狙いがあったのだ。

戦術リンクは実戦での運用を想定している、ならばその試験運用にはこの特別オリエンテーリングと同等、あるいはそれ以上の危険を伴うことになり、学院のカリキュラムも過酷なものとなる。

それらの情報を実体験と共に提示した上でサラはルドルフたちに通常の貴族、平民と分けられたクラスに戻るか、このままⅦ組に参加するかとの選択を求めたのだった。

「でもあんな無茶な目に合わされたのに随分あっさり承諾したわよねあなた。……まあそうするんじゃないかって思っただけだよ」

「はい、僕としてはラインフォルトのお役に立てるといふのなら是非ありませんから」
開発にラインフォルトが携わっているARCSの試験に貢献するということは間違いなくラインフォルトにも利することとなる。

それを理解したルドルフは選ばれた生徒たちの中でも躊躇いなく真っ先に参加を申し出て皆を驚かせていた。

「お嬢……アリスこそよろしかったのですか？ Ⅶ組に残られても」

「あの時も言ったでしょ、こんなことぐらいで腹を立ててもしょうがないって」

それがⅦ組残留の意思を問われた際にアリスが口にした言葉だった。

実家への反発から家を出た彼女だが、Ⅶ組の設立目的まで拒絶するには至らずルドルフ共々残留を宣言し、結果としてみれば選ばれた十人は全員がそのままⅦ組への編成を受け入れていた。

反目し合っていたユースとマキアスはギリギリまで揉め合っていたが、結局張り合うように厳しいカリキュラムが組まれているというⅦ組への参加を宣言している。

その後本校舎での指定された教室でのホームルームを挟み、ようやく学院生活初日を終えたルドルフたちはこの第三学生寮へと案内されたのだった。

「それにしても、アルバレアだけじゃなく彼がああのリーグニッツだなんて……適性で選ばれたにしては随分面倒な顔ぶれになってるわよね」

アリサが呆れ顔で言い示したリーグニッツ、貴族に対して明らかな嫌悪感を持つていたマキアスだが彼の方もただの平民階級というわけではなかった。

VII組残留を決める際にもユースと口論になっていたマキアスだがその際のやり取りで彼の父が国の中心である帝都知事を務めるカール・リーグニッツであることが明らかになっている。

平民出身ながらその地位まで登り詰めたカール氏は現在帝国にて宰相を務め貴族の既得権益を切り崩す政策を推し進めているギリアス・オズボーンの盟友としても知られ帝国内における《革新派》として認知されている人物だ。

当然ながらそんな人物の息子であるマキアスはただの平民として扱われるわけがなく、貴族に対する嫌悪感情もそんな出自から由来するのではないかと邪推されても無理はない。

一癖も二癖もありそんなクラスメイト達と過ごすことになる、これからの学院生活に思いやられるとばかりにアリサは重いため息を漏らす。

「お疲れでしょうか？」

「え？　そうね……流石にあのオリエンテーリングはちよつと響いたかもしれないわね、今日はもう早めに寝ようかしら」

「でしたらお休みになられる前にホットミルクでもおつくりしましょうか」

一瞬ためらいを見せるアリサだったが、思い直すように目を閉じ考える間を挟むとテーブルの隅の席に腰掛け答えた。

「……お願いするわ」

「では、すぐにお持ちします」

言葉通りキツチンの方へ向かったルドルフは冷蔵庫からミルクの瓶を取り出すと、用意した鍋に手早く注ぎ導力式のコンロにかけ瓶を戻しつつミルクを注ぐ器を準備する。

呼び方こそ改めたものの、未だ使用人としての態度が抜けきらない、というよりそこらは改めるつもりが無いようなルドルフの背中をダイニングからアリサはついじつと眺めてしまう。

彼女にとってそれは見慣れたものであるはずだったがその日、というよりあのオリエンテーリングを通してルドルフに対する見方が大きく変わってしまったのをアリサは実感していた。

「——ねえ、ルディ」

彼がこの程度で手元を狂わせることはないと知るアリサは声を掛ける。

「なんででしょうか？　アリサ」

「あなたって、もしかしてラインフォルトで導力武器の試験に関わってたりしたの？
随分と戦い慣れしてみたいだけだ」

声音を硬く、少しばかりの緊張を滲ませながら問い掛けたアリサだったが対してルドルフは事もなげに答えるのだった。

「はい、以前から一部の製品に関する実用試験を請け負わせて頂いています」

やっぱり、と呟いたアリサの表情に陰が差すがルドルフが背を向けている内にすぐに隠される。

「そう……それで魔導杖なんかに詳しくかったの、解析機能だとか普通気づけないもの
ね」

「ああ、あれについては経験というより、僕の体質に依るところが大きいかと思えます」
「体質？」

コンロの火を止めゆっくりと鍋のミルクをかき回すルドルフ、仕上げに入ったために一旦口を閉じたことを察してアリサも急かすような真似はしない。

出来上がったホットミルクをマグカップに注ぐと盆に乗せルドルフはダイニングへと戻ってきた。

「どうぞ、アリサ」

「ありがとう」

卓上に置かれたホットミルクから立ち上るバニラエッセンスの甘い香りに瞳を細めながらアリサはマグカップを手に取り口元まで運んだ。

いつも通り、アリサは猫舌というわけではなかったが飲み頃の温度に整えられたミルクと調和した蜂蜜のまろやかな甘さに表情を緩めてしまう。

日常を感じさせるその味わいに新しい生活環境に加え予期せぬトラブルに見舞われ荒れつつあった少女の胸の内も幾分か癒されていた。

「——ふう、それで体質って？」

「はい、これは僕が戦術オーブメントの扱いを得意とする理由でもありませんが、導力に対する感応力が普通の方と比べ高いのだそうです」

それまでよりも柔らかくなった口調で聞き直すアリサだったがその返答にはピクリと目端を強張らせた。

この世界におけるあらゆる工業製品の主動力となっている七耀石が生み出す導力、高純度の七耀石が光を放つことなどはあるが、導力自体は人の目に映ることはない不可視のエネルギーだ。

それを人が知覚しようとするなら並の人間は専用の機材を用いるか、あるいはアーツ

を行使するときのようにオーブメントと同期する必要がある。

「……つまりあなたは生身で導力を感じ取れるってこと？」

「その通りです、エマさんの魔導杖から発された導力波の性質が感じとれたのであの時もすぐに気付くことが出来ました」

更にルドルフが続けた魔獣が内に溜め込んだ七耀石セヒの欠片クスの導力波を感じ取ることでその居場所を特定、アーツに対する耐性を推し測ることも可能だという能力にアリサは驚きを隠せなかった。

それが事実とするなら彼の感応精度は常人とはかけ離れている、昨今の導力技術の発展が目覚ましいとはいえ開発、実践、あらゆる場において引く手あまたの稀有な才能だろう。

そう気づいたときアリサの脳裏にある予想が浮かび上がり、再びその表情に翳りが差す。

「ねえルデイ、ひよつとしてお母様はあなたに……その……」

うつむきがちに口ごもるアリサ、その問いづらそうな様子から彼女が何を言おうとしているのか、読み取ったルドルフは小さく首を振り微笑みを浮かべる。

「違います」

「え？ ……っ」

顔を上げ目が合った瞬間、気まずそうに瞳を逸らしたアリサにルドルフは一瞬首を傾げながらも言葉を続けた。

「イリーナ会長はこの体質が理由で僕を雇い入れて下さったのではありません、ラインフォルトでも僕からお願いで仕事を頂いています」

アリサが浮かべた彼女の母、イリーナ・ラインフォルトが年若いルドルフを使用者として雇ったのはその稀少技能に目をつけ、ラインフォルトの発展の為に利用しようとしているのではないかと懸念が他ならないルドルフによりはつきりと否定される。

「じゃあ、あなたは どうしてそこまでうちに尽くそうとするのよ、そんな能力があつたらもつと良い待遇だって受けられるでしょ？ 使用人としてまで働かなくたっていいじゃない」

そんなアリサの訴えにまたルドルフは首を振り否定の意を示し、納得しかねるといった表情で見上げてくるアリサを前に、言葉を探すような沈黙を挟むとルドルフは言葉を紡いだ。

「恩があります」

「恩？」

「そうです、イリーナ会長、そしてシャロンさんに僕はとても——返しきれないような恩があるんです、ですから」

微笑を消し、真つ直ぐにアリサを見据えてルドルフは言葉を繋ぐ。

真剣な面持ちに僅か目を瞞りながら、アリサも今度は目を反らさずその顔を見返す。

「これが僕の求める生き方なんです、それ以外の道など興味すらありません」

アリサの母イリーナ、そして彼女にハウスキーパーの役を担うメイドとして長年仕えてきたシャロンという個人へ向けられた意思の強さにアリサは何も言えなくなってしまう。

母、そして姉のようにも思っているもう一人の女性に含むところがあるアリサとしては素直に肯定することはできなかったが、ルドルフの一途に過ぎる思いに口を挟むこともできなかった。

「恩、か……あの母様が」

とはいえない思い描く母の人物像がルドルフにここまでの恩義を抱かせる行為と結びつかず、余計に困惑してしまうアリサだった。

「はあ、なんだか色々ありすぎて疲れちゃったみたい、部屋に戻るわ。……朝は起こしに来たりするんじゃないわよ」

「かしこまりました」

席を立ちながら釘を刺すとアリサは寮エントランスへの扉へ向かうが不意に足を止め、カップを片付けようとしていたルドルフの方へ顔を向ける。

視線に気づいたルドルフと目の合ったアリサは何事か言いづらそうに口元をまごつかせていた。

「ルデイ、一つ聞きたいことがあるんだけど……その……」

何をそんなに聞きづらそうにしているのかと考えたルドルフは不意に今日のある出来事を思い出し、それならこの態度も納得できるのではないかとの予想をつけた。

「ラインの部屋でしたら二階に上がって右手、右奥ですよ」

「なっ……!? ——っ、そんなこと聞かないわよバカっ!」

旧校舎での出来事を思い出してしまい顔を真っ赤にして叫ぶアリサ。

一悶着あった彼と話したいことでもあるのではないかと勘違いしていたルドルフは謝罪の言葉を口にしながらならば何をと再び記憶を探り出す。

だが正解に至るのを待たずアリサはため息を吐くともういい、と言い捨て扉へ向かう。

しかしドアノブに手をかけたところで足を止めたアリサは少しの間動きを止め、ぼつりと投げるように、返事を期待しない調子で言葉を残していった。

「——いつもそんな同じ顔で笑ってたらすぐに気づかれちゃうわよ、気を付けなさい」

軽い扉の締まる音、ダイニングに残されたルドルフは最後にアリサが告げていった忠告にしぼしの間立ち尽くしていた。

手に持っていたカップを置き、窓の傍に立つとカーテンをめくる。

陽が落ちきり夜の闇を向こうにしたガラス窓は正面に立つルドルフの透けた姿を映し出し、自分をその赤い瞳で見返してくる鏡像を眺めながらルドルフはぼんやりとした声音でひとりごちた。

「……気を付けていたつもりですが、流石はお嬢様ですね」

窓に映る少年の面立ちは何の感情の色も浮かべていない無表情、その顔が薄く、多少の愛想が感じられる微笑みの形に変じる。

続けて少し困惑が伝わるような苦笑へ、他者から見ればおそらく見た目そのままの印象が伝わるだろう違和感の無さだった。

それもそのはず、それらはルドルフがこうして長年鏡に向かい練習を重ねて形作るこゝが出来たようになった表情なのだから、一朝一夕で見破れるものではない筈だった。

事実長年の付き合いがある人物、ルドルフに使用人としての指導を施したシャロンのような人物を除き、彼が自然と浮かべるような表情をほとんど持たないことを知る人間はいなかった。

あるいは今日のオリエンテーリングでそれを悟られるような失態を見せたのだろうか
とルドルフは思考を走らせるが、答えを見つけないことはできなかつた。

自らの情緒が全て欠落しているわけではないとルドルフは自覚している、でなければ

ラインフォルトへ恩を返そうなどという意思が湧くこともないだろうと容易に想像できからだ。

しかし喜びや怒り、悲しみといった感情の機微が普通の人間と比べあまりに薄く、それが他人からすれば奇異に見えるということも理解はしている。

おそらくは記憶の無い、六年前に自分が巻き込まれたというある事件に端を発しているのだろうと推測は出来るがルドルフとしてはそれを不便に思ったことは無かった、人と接する際に感じてもない喜びや悲しみを演じることに後ろめたさがないわけではなかったが、それでも支障なく生きては行けると思っていたから。

だが持ち掛けられたツールズ士官学院への入学を不要と辞退しようとするのを諫めた、使用人としてルドルフが及びもつかない域に達している女性、シャロン・クルーガーの淑やかな笑みが彼の脳裏には焼き付いていた。

使用人として自分に欠けている決定的なもの、それをこの士官学院で見つけることができるかもしれないという彼女の言葉が入学への心変わりを起こさせる切っ掛けである。

調理の腕を磨き、住宅を管理する術をいくら学んでも、使用人としてシャロンとの間に埋めることのできない差が広がっているのをルドルフは感じており、その差がなんであるのか、どうすれば彼女の域に近づけるのかを知りたかったルドルフはラインフォルト

トと離れ士官学院へと赴く決心をしたのだった。

初めて経験する同年代の少年少女との対等な立場での付き合い、その体験はルドルフにしても新鮮に感じられるものではあったが、期待していたような実感を得るようなものでもなかった。

「焦つてもしよがありませんね、ひとまず……明日の準備から片付けましよう」

思考を整理するように言葉へと出しながら、始まったばかりの学院生活への期待を胸にルドルフは当初の目的を果たすためキッチンへと足を運ぶのだった。

第一章

VII組の朝【一】

「おはようございませす、ガイウス」

「ああ、おはようルドルフ」

入学式から二週間の日が経ち、ようやく新入生たちも学園生活に慣れ余裕が生まれ出した頃の日曜、ツールズ士官学院に新年度初回となる自由行動日が訪れた。

休日とは異なるが名の通り生徒達には自由な行動が許されその気になればトリスタ郊外まで外出することも出来る。

その日の過ごし方は生徒により様々で、文武両道の士官学院というだけあり厳しい日々のカリキュラムで疲れた体を休める者、座学授業の予習復習に励む者、あるいは学院のクラブ活動に勤しむ者もいる。

第三学生寮の面々も特科クラスVII組に所属するというだけでその多分に漏れることなく、陽も昇りきらないような朝方に学生寮玄関口でエントランス周りを清掃して回るルドルフは数少ない例外で、こうして降りてくる他のVII組メンバーと顔を会わせるのが日常となっていた。

「自由行動日と聞いていたが、ルドルフはいつも通りのようだな?」

制服姿のガイウスが穏やかな表情で語りかけるのにダイニングの扉を開けて出てきたルドルフは恭しく頭を下げる——のを思いとどまり微笑む。

この二週間で必要以上に畏まった態度を改めるようアリサだけでなくクラスメイトの皆から言われ続け、身に着き過ぎた習慣に苦心している姿だった。

「ええ、今日も召し上がって頂けますか?」

「ああ、こちらこそ世話になる」

ガイウスがダイニングへ入るとルドルフはさらに奥のキッチンへと向かっていく。

清掃に加え朝の仕事としてルドルフがこの第三学生寮で担っている、というよりもぎ取ったもう一つの仕事が寮での食事の支度だった。

入学式の翌朝から朝食の用意を完全に整え起きてきたⅦ組の皆を迎えたルドルフ、クラスメイトからそんな世話をしてもらうことにアリサを始めとして難色を示すⅦ組メンバーだったのだが。

第三学生寮の寮食という体裁を取ることとで学院から食費に支給が受けられること。

それにより皆が外食、自炊することの手間、費用が節約でき、登校時間への支障も抑えられること。

そしてルドルフにとって寮の調理を担当することが様々な立場、出身である皆の嗜好

を学ぶことで使用人として——無論ラインフォルトに仕えていることは伏せてだが、の能力向上に繋がるとして望ましいことであること。

学院からの手当てについて下調べをした上でメリットが一方的でないことを示し、引け目を薄らせたことで半ば強引にルドルフは第三学生寮の調理役を勝ち取つたのだつた。

とはいえ実際、ルドルフが寮での調理を担当することは他の生徒たちにとつて有益に働いてもいる。

「お待たせしました」

テーブル端の席に腰かけていたガイウスの元に出来上がった朝食を運び、そんなことを口にするルドルフにガイウスもいつものことなので指摘こそしないものの、そんなこととは無いとばかりに小さく首を振る。

並ぶ料理は出来立てであることが一目で分かり、四方を折りたたまれ正方形に整えられたガレットの中央では卵の黄身が鮮やかに照り、白身を彩るベーコンとチーズが食欲をそそる香りを立ち上らせていた。

付け合わせのアスパラ、トマトのソテーも湯気が上がり共に焼きたて、円筒器コッコットによそわれたインゲン豆ペイグドのソース煮込みビーシェンズも同様に出来立ての仕上がりに。

キッチンへと向かい料理を運んでくるまでの間に十分と経っておらず、素人が一から

調理を始めたのでは到底真似できない早さだ。

調理用の使い捨て衛生手袋を締め直すと、赤いソースの満たされたベイクドビーンズの鍋に火を点け、ベーコンをソテーしている間に下ごしらえをした残りの食材を用意仕立てたガレットの生地をもう一つのフライパンへと流し込む。

生地を丸く広げソテーしたベーコン、チーズを乗せ中央に卵を落とし入れ生地の形を整えてから蓋をした瞬間には空いたフライパンでハーブ塩をふった付け合わせのトマト、アスパラのソテーに入っている。

それらが焼き上がりほぼ同時に火の通ったガレットに胡椒をふって共にプレートへ移し、温まったベイクドビーンズをよそえば主菜は完成。

計ったようなタイミングで脇のラインフォルト製トースターがチン！ とベル音を鳴らし予め投入していたパンの焼き上がりを報せる。

狐色に焼き上がった食パンと仕上げにオレンジ、キウイのフルーツをカットし添えれば瞬く間にその日の朝食が整っていた。

調理を仕事とする人間とそうでない人間との差はこの手際の良さだろう、手狭とまではいかずとも決して広くもないキッチンでそれなりの人数の朝食を用意するのには要領の良さが求められる。

起床時間も様々で皆が皆同じ時間に朝食を摂るわけではない寮生活の食事に対応で

きる技量をルドルフは持ち合わせており、確かにVII組のメンバー内でこれ以上の適役は居なかった。

「いつもながら見事だな。……？」

一度キツチンへと戻り、盆を手にして来たルドルフはそれに乗ったティーカップのソーサーを持ちガイウスの朝食の脇へ置いた。

朝食に紅茶、あるいはコーヒを添えられるのはノルドという辺境の出身であるガイウスにもこの二週間のトリスタでの生活で馴染んだ習慣ではあったが、そのカップから漂う香りが彼に目を瞠らせた。

「これは……」

「はい、ノルドの方で嗜まれている茶葉だそうですね。以前ガイウスから聞いた話を商店の店主様にしたところ取り寄せて頂けたので用意してみました。初めて淹れる茶葉でしたので上手く出来ているかいささか自信はありませんが」

「——いや」

カップを手に取り、口元へ運んだガイウスはその香りを嗅ぎ、一口つけると眉尻を下げてルドルフへ顔を向ける。

普段から柔らかな表情を浮かべているガイウスだがそこにあるのは彼自身の若年にそぐわない落ち着きを一層強く感じさせるものだった。

「まだ一月もしないが、懐かしい香りだ。ありがとうルドルフ、今日はいい風が吹いてくれそうだ」

ガイウス特有の言い回しだが間違いなく好感触を示すその言葉にルドルフも胸を撫で下ろした次の瞬間、顔を壁の向こう、エントランスへくると向けた。

「皆さん早起きのようですね。ガイウス、失礼します」

階段を誰かが降りてきたのを感じ取ったらしく先程のようにダイニングを出ていくルドルフの背を見送りながらガイウスも用意された朝食に手をつけはじめた。

「おはようございますいますマキアス、今日も良い天気ですよ」

「……君という奴はまさかこんな日にまで朝食を用意したのか」

壁を隔てた先から声の主の渋面が目に浮かぶような台詞を聞きながらナイフで切り分けたガレットを運んだガイウスの口元が綻ぶ。

この二週間でそんな光景が第三学生寮、朝の恒例となっていた。

朝の支度を終え上階から降りてきた生徒たちをルドルフが誘い、もとい引き込むこと数回、ダイニングの空気は微妙に緊張したものを漂わせている。

その原因となつてゐるのはテーブルの端と端、対角の席に腰掛ける二人、マキアスとユーシスだった。

入学式での諍いから二人の仲は全く改善の兆しを見せず、ひたすらユーシスを敵視し事あるごとに食つて掛かるマキアス、それに対し挑発的な物言いで返すユーシスの間には常に緊張感が漂い、周囲の人間まで萎縮してしまい遅れてダイニングに招かれ朝食を済ませたリイン、エリオットもどこか居心地悪そうにしている。

「——ごちそうさま、美味しかったよルドルフ」

「悪いな、いつも任せて」

「いいえ、望んでやらせて頂いてゐることで、お氣になさらず」

礼を言うエリオット、少しばかり申し訳なさそうにするリインと言葉を交わすルドルフは雰囲気の悪さも氣にしていな様子で空いたプレートを片付けている。

マキアスが既にいる場合、逆にユーシスが先に來ている場合でも二人を朝食の場に引き込むその肝の据わり具合、というより空氣の読めなさは皆から羨やみも嘆かれもするところだった。

マキアスとユーシスも当初、相手の姿が見えたときには寮外で朝食を摂ろうとしたものだが、個人でなく第三学生寮の食事であるという体裁を盾に迫るルドルフに押し切られる形で渋々席を同じくしている。

「なんだ、男子はもう揃っているのか」

扉を開き、足を踏み入れて来た少女、ラウラの声に一同が顔を向ける。

その背後にはアリサ、そして眠そうな眼を擦っている銀髪の少女——小柄な見た目相応に、皆よりも二つ年下であるらしいフィー・クラウゼルを宥めるように連れてきているエマの姿もある。

揃ってダイニングを訪れたⅦ組女子たちだが悪感情に鈍いところのあるラウラとぼうつとしておられるときの多いフィー以外の二人は室内の微妙な空気に気づき表情を強張らせた。

更にアリサは扉の方を見ていたリインと目が合った瞬間サツと顔を赤らめ露骨に首を背けてしまう。

その反応にうなだれるリインだがこのやり取りもまた入学式からの間に幾度となく繰り返されていた。

「おはようございませす皆さん、今朝食をお持ちしますので、席へどうぞ」
「うむ、そなたもご苦労だな、感謝する」

使用人として精進の為、ということが武の道を追求するラウラの目には好意的に映ったのか、彼女はルドルフの行いをおおむね受け入れていた。

促されるままに席にかけるラウラに続き、エマ、フィー、そして気まずそうにしながら

らもアリサが空いた席へ向かう。

すつと傍へ寄り、椅子を引いたルドルフにじろりと視線を向けるアリサだったが、微塵も気にする様子を見せない姿にため息を一つ吐いて引かれた椅子に腰を落とす。

そこでふと何かに気づいたようにアリサが顔を向けた先で、マキアスが神妙な面持ちになっていた。

「どうかした？ マキアス」

「いや失礼……ここしばらくの君たちのそういう、その、なんだ……慣れてる感じが気になつてね、本当に貴族というわけではないんだろ？」

その言葉に納得すると共に、他のメンバーのほとんどが困つたような、気まずいような微妙な表情になる。

通常制服の色で貴族か平民であるか見分けることが可能なトールズ士官学院の生徒だが、VII組の生徒たちは赤い制服が与えられている為その限りではない。

加えてアリサは皆に姓を伏せて名乗っていることもあり、たとえ帝国貴族全ての姓を把握していたとしても判別は出来ない。

ルドルフが裕福であるアリサの両親に昔世話になり、その恩返しとして彼女の家の手伝いをさせてもらっていると仮の説明をしてはあつたものの、貴族嫌いであるマキアスにアリサのあまりに仕えられ慣れた態度は気になるものであつたらしい。

「はあ、マキアス、あなた——」

「違いますよ、マキアス」

アリサが諫めるよりも早く、その後ろからルドルフが否定の言葉を発した。

忠告も空しく彼女に対する尽くし様からルドルフの並々ならぬ気遣いは周知のところだったが、そのルドルフがアリサの発言を遮つてまで発言したことに、アリサを含めた皆が程度の差異はあれど驚きを見せる。

「アリサは貴族ではありませんよ、それは保証します——空エイドスの女神に誓つて」

大陸の主な信仰対象である空の女神の名まで出して告げられた言葉にマキアスもぐつと息を詰めた。

大袈裟な物言いにも聞こえるが、こうまで恥ずかしげもなく言い放たれば真摯な印象の方が強くなる。

ここまで言い切られ尚、疑いを向けるというならそれは余程相手を信用していないか器量の狭い者ぐらいだ。

「——そうか、すまなかつたアリサ君、不躰なことを聞いたようだ」

「いい、いいわよ！　もう」

頭を下げるマキアスを慌ててアリサが制し、それが一応のその場の収まりとなった。

「では料理の方をお持ちしますので少々お待ちください。フィーは飲み物、ミルクで宜

しかつたですか？」

周りと比べ幼い少女へ確認を取るルドルフ。

異性に対し呼び捨てにすることを初めのうちは遠慮していたのだが、彼女たちの方からそちらの方が気楽で構わないと言われ今では気にすることもなくなっていた。

「ん、お願い」

コクリと頷いて返したフィーに微笑むとルドルフはキッチンへと戻り四人分の朝食支度に取り掛かった。

少年の姿が離れたところでこつそりとマキアスは詰めていた息を吐いていた。

先の誰何に対する答え、その言葉の真剣さ以上にルドルフから有無を言わせない圧力のようなものを感じてしまっていたが為だ。

普段温厚そのものに見える彼からなぜそんな気配を感じ取ってしまったかは、マキアス自身が貴族という存在に向けている感情、その矛先を僅かでもある人物に向けてしまったからだということ容易に想像出来た。

「大丈夫か？ マキアス」

「あ、ああ、すまない、みつともないところを見せた」

隣に座るリンから気遣われ苦笑で返すマキアスだったが、続いてテーブルの隅から聞こえた声にその表情はすぐに険しいものとなってしまった。

「これに懲りたら、少しは考えてものを言うことだな」

「……つ、これは失礼。無駄に余裕がお有りになる大貴族様には滑稽に見えたようだな」
押しも押されもせぬ大貴族であるユーススの言には敵意を剥き出しにするマキアスだったが、先程の失言による引け目もあつてか反駁に精彩を欠いている感は否めない。

既に食事を終え紅茶のティーカップを傾けていたユーススは怜悧に細められた瞳で無然としたマキアスを一瞥する。

「学年次席ともなれば自身の発言が与える影響ぐらい考えられて当然と思つていたが、これは見込み違いだったようだな」

「何をつ！ それはどういう——」

「止めよ」

言葉を重ねたユーススにマキアスが激情も露わに立ち上がるそこへ、制止の言葉を放つたのはもう一人の貴族身分である少女、ラウラだった。

「二日の始まりである朝食の場でそのような言い争いをして、皆に申し訳ないと思わぬか？」

「それは……そうだが……」

真つ直ぐに見つめ諫めてくるラウラにはマキアスも憤りを向けられず、もつともな意見に返す言葉は尻すぼみになってしまう。

彼女も貴族ではあるがその身分を笠に着るような態度の無さ、どころか誰に対しても身分を気にせず分け隔て無い態度で接する人柄には毒気を抜かれてしまうようで、マキアスもユーシスに向けるような態度は取れずにいた。

「ユーシスも、忠告するにせよ言葉は選ぶべきかと思うぞ」

「……そんなつもりも無かったのだがな、善処はしよう」

あくまで尊大な態度を崩すつもりは無いらしいユーシスだったが、それ以上場を荒立てる意思も無いらしく、彼の口からそれ以上の口撃が飛び出すことは無かった。

同じテーブルを囲みながらも足並みは未だ揃わず、これも未だ変わり切れない入学式から続くVII組というクラスの有り様だった。

学院のクラブ活動、あるいは寮外で自由行動日を過ごす生徒たちを見送った昼まだき、寮に残っていたルドルフはキッチンで寮に残ったメンバー、エリオットと起床の遅かったサラ教官の昼食の準備に入っていた。

エリオットはそこまでしてもらわずとも良いと遠慮していたが、三階の自室から降りてくるなり冷蔵庫内の一角を占拠しているビール缶の塊から数本を抜き出したサラが

さらりとルドルフにランチを依頼したことのでついでという名目を得てしまい無駄に終わっている。

ルドルフとしてはその程度のことなら全く苦ではないので一向に構わないのだが。

「——これは」

調理の最中、不意に足を止めたルドルフはかろうじて届いていた、調律された弦の奏でる音色に耳を傾けた。

音楽にまで造詣が深いわけではない彼には正確に聞き分けることは出来なかったが、ヴァイオリンに類する弦楽器による音色だろうとは予想がついた。

それが学院のクラブ活動において吹奏楽部に所属することを決めたらしいエリオットによるものだろうということも。

現在寮に残っているのはルドルフ、エリオット、サラの三人のみ、ビールを片手に上がっていったサラが優雅にヴァイオリンを弾いている姿などはルドルフにも想像できなかった。

耳に届くその音色は歪みも無く、透き通ったものでとても素人が奏でられるものとは思えない。

エリオットの趣味に留めるには勿体無いと言える演奏技術を耳にしながら昼食の用

意を再開しようとしたルドルフだったが、次いで耳を突いた機械音にそれを阻まれる。

ヴァイオリンの柔らかな音色とは異なり耳朶を刺激するような音の発信源、キッチン脇に置かれたARCUUSから響いているその音は通話機能の受信を報せていた。

ARCUUSを手に取りカバーを開いて耳にあてると、見知った人間の声が届く。

『ルドルフか？ ええっと、リインだけど』

「はい、こちらルドルフです、珍しいですねリインからかけてくるのは」

通信機能の利用に慣れていないのか、どこか浮いた調子の声で語りかけてくるのはリインだった。

『急な話で申し訳ないんだが、ルドルフは午後から時間とれるか？』

「ええ、可能ですよ。夕刻までには戻りたいところですが、特に予定はありません」

元々寮の普段行き届かないところの掃除をしようかと考えていたぐらいで、実質ルドルフのこの日の予定は空いていた。

『そうか、じゃあ頼みたいことがあるんだけど……午後からあの旧校舎の調査に付き合ってくれないか？』

「旧校舎？ あの、ですか」

入学式のオリエンテーションでの記憶は未だ新しく残っている。

魔獣も多く徘徊しているあのような建物を調査とはどういうわけかとルドルフが問

い返すまでもなく、リインは説明を続けた。

昔からあの旧校舎は学院生徒たちなどの腕試しの場として利用されてきたらしいのだが学院側もその全てを把握しているわけではないようだ。

更に最近になってこれまで存在していなかった扉が現れている、謎の音が聞こえるなど異常現象の報告が相次いでいるらしく、先日オリエンテーリングで地下迷宮区画を一巡りする羽目となったリインにあの時と比べ変化が無いか調査するよう学院長から依頼されたのだという。

この自由行動日、Ⅶ組の皆もクラブ活動などに出ているが、リインは学院生徒会の手伝いをする事になったらしく、これもその一環らしい。

リインの太刀の腕前が非凡なものであることはルドルフもオリエンテーリングの際分かってはいたが、それでも魔獣が数多く徘徊する迷宮に一人で入るとするのは危険を伴う。

ガーゴイルの例もあり、学院長からも他のⅦ組生徒からメンバーを募るよう念押しされたらしい。

「分かりました、そういう事情でしたらお力添えさせて頂きます」

『すまない、助かるよ。他の皆にも声は掛けてみるから、午後の一時ぐらいに旧校舎前に集まろう』

「了解しました、準備を整えておきます」

通信の切れたARCSを閉じ、頭の中で変更となった午後の予定を組みながらルドルフはオーブンの蓋を開き、衛生手袋越しの手で中の鉄板を掴み出した。

「そういえば、お嬢様は学院でクラブ活動中のはずですね」

鉄板に敷かれた香味野菜の上に鎮座する焼き色のついた肉の塊、昼のメインとして予定していたそれを眺め、あることをルドルフは思い立っていた。

先達の教え

武装であるキャパシターのケース、そしてバスケットを片手に提げたルドルフが学院のグラウンドを隣接する講堂の脇から見回すと探していた少女はすぐに見つかった。

紺のシャツにチエツクのスカート、ユニフォームに身を包んだラクロス部の女生徒に交じりステイックを振るっているアリサ。

クラブの活動に参加するのは今日が初となるはずだがボールを投げ交わすその姿は十分に様になっていた。

額に汗を垂らし練習に打ち込むその姿を確認し頃合いを見計らっていたルドルフだが。

「やあ、見学かい？」

その背に声を掛ける人物が居た。

聞き覚えのあるその声にルドルフが振り向いた先には、体にフィットしたデザインの珍しい黒い革ツナギを着た女性が涼しげな笑みを浮かべ立っていた。

スラリと背が高く、顔立ちが端麗ながら短めに切り揃えられた青藍の髪も相まって中性的な魅力を感じさせる。

「アンゼリカさん——お久しぶりです」

「ああ、君とも随分ご無沙汰していたね。トールズ士官学院への入学おめでとう、先輩として歓迎するよ」

本来であれば白い貴族身分を示す制服を着ているはずのその女性、アンゼリカ・ログナーは笑みを深めてそう口にした。

ルーレ市で暮らしていた頃の記憶と変わらず型にはまらない気風を感じさせる微笑みだったが、ルドルフが「ありがとうございます」と頭を下げるとアンゼリカは芝居がかった仕草で嘆くようにため息を吐いて見せた。

「やれやれ、相変わらず固いな君は。その様子だとアリサ君からも何か言われてるんじゃないのかい？」

「恥ずかしながら仰る通りです。ですがアンゼリカさんに対するならこれでも気安すぎるのではないかと思うのですが」

「ははっ、これ以上へりくだってもらつてはむず痒くてたまらなくなってしまうよ。ウチのことなら前から気にしなくていいと言っているだろう？ 無理にとは言わないけれど、もっとくだけてくれて構わないよ」

四大名門に名を連ねる家の出でありながらその名を笠に着ることなく接するアンゼリカの態度はルドルフにも知るところであり、ログナー家の膝元であるルーレ市を離れ

でもそれは変わらないようであった。

「見たところアリサ君に差し入れでも持ってきたのかな？」

「はい、午後からクラスメイトと旧校舎の調査をすることになりましたので、昼食にと」
「なるほどなるほど、しかしルドルフ君、見てごらんよ」

麻のバスケットを示して言うルドルフに頷くアンゼリカがグラウンドのラクロス部へ目を向け語りだす。

彼女に倣いルドルフが視線を向けた先では休憩時間に入ったのか、ラクロス部の面々がバッグ等の荷物が置かれた一角で汗を拭ったり談笑を交わしたりとしている。

アリサもまた部員の女子と時折笑顔を見せながら会話に花を咲かせているようだった。

「この後彼女達は食堂か、街のカフェテリアでもランチを共にして友好を深めるんだろう、そんなところに君がその差し入れを持って行くかどうかどうなるかな？」

予想の埒外にあつたその発想にルドルフはハツと胸を衝かれてしまった。

ラクロス部には貴族生徒、平民生徒の両方が在籍しているが一見してアリサは平民階級のグループに交じっているようだった。

身なりの整いぶり、持ち物の高級さ、見るからに貴族身分と分かる女子たちはウェーブのかかった紫の長い髪をした女生徒を中心に集まっている。

そういった生徒ならばお付きの執事やメイドにランチの用意をさせていても違和感はないかもしれないが多くの場合、平民であるならなおさらアンゼリカの言った通りになるだろう。

そうなればルドルフの行為はアリサの周囲に浮いた印象を与え、それは好意的なものにならないであろうことは予想に固い。

「……迂闊でした。ありがとうございます、危うくお嬢様に迷惑をおかけしてしまふところでした」

「どういたしましたして、まあ本当は私も彼女たちに混ざってアリサ君と旧交を温めたいところだけど、今日の所は遠慮することにしよう。共に汗を流す女の子たちの青春に水を差すのは無粋だからね」

心の底から残念そうにそんなことを口にするアンゼリカにはルドルフもどう声をかけていいか分からずただ苦笑を浮かべてしまう。

好人物といえる彼女だったが、しきりに女性を口説こうとする特徴も多くの人があるところであり、中性的な美貌もあいまって彼女に熱を上げてしまう女性も少なくはないがそんなアプローチを苦手とするアリサは故郷ルーレでよく困らされたのだった。

「しかし余計なことをしてしまいました……アンゼリカさんは昼食を済まされましたか？ 良ければこちらを——」

「それなんだが、丁度いい差し入れ先があるよ。ついぞといつてはなんだがルドルフ君」
向き直ったアンゼリカは相手を悪戯に誘うような声音で囁く。

「旧校舎に行くと言っていたね、ウォーミングアップついでに少し体を動かして行かないか？」

アンゼリカに連れられルドルフは屋内プール、修練場、そして各クラブの部室が入っているギムナジウムの門をくぐるルドルフ。

真っ直ぐに向かった目的のフェンシング部が活動しているはずの修練場へ続く扉から、ラクロス部のように昼の休憩時間に入ったのか数人の生徒が出てくるところだった。

その内の一人、白い制服の金髪男子がアンゼリカに気づくと歩みを止めた。

「これはログナー家の、ご機嫌麗しゆう」

「ん？ 君は……ハイアームズ家のパトリック君だったか、どうもご機嫌よう」

「見知りおき下さったようで嬉しく思いますよ、入学からご挨拶が遅れましたが同じ侯爵家の者として宜しくお願ひ申し上げます。……ん？」

ハイアームズ、ログナー家と同じく四大名門に数えられる侯爵家の名でありその繋がりから挨拶してきたらしい男子生徒、パトリックはルドルフに気づき、赤い制服を見るなり眉を顰める。

「失礼、そちらは？」

「ルドルフ・シュヴァルベと申します、パトリック様におかれましてはご機嫌麗しゆう存じます」

へりくだった物言いに貴族でないことを悟ったのか、小さく鼻を鳴らすだけで応じたパトリックは挨拶を返さずアンゼリカへと視線を戻した。

「地元の知り合いでね、少し彼に指導したいことがあるから修練場にお邪魔させてもらうよ」

「……あまり良い戯れとは思いませんが、後輩として過ぎた口出しは差し控えましょう——失礼します」

歩みを再開し擦れ違いざま、足を止めた。パトリックがルドルフへ言葉を放つ。

「Ⅶ組などと、特別扱いされて図に乗らぬことだな、出過ぎた真似は控えた方が身のためだぞ」

「ご忠告痛み入ります、肝に銘じさせて頂きます」

向き直り頭を下げて応じたルドルフに一瞬虚を突かれたように目を瞪るパトリック

だったが、再び小さく鼻を鳴らすとそれ以上何も言うことなくギムナジウムの外へと向かって行った。

その背が見えなくなるとクスクスと、笑いを漏らしていたアンゼリカを不思議そうにルドルフが振り返る。

「いやすまない、しかし嫌味でもなくあんな風に返せるのはなかなか得難い才能かもしれないな。少しは腹が立たないのかい？」

「貴族という身分にああいった態度を取られる方が多いということは存じ上げていますし、特には。あんな忠告を受けるとは思いませんでした」

「ああ、おそらく君たちのⅦ組という枠組みが貴族を差し置いて特別扱いされているように気に入らないのだろうね、まあ気にすることは無いよ」

そんなことを言い交わしながら二人が修練場の扉を開くと、広めの室内に残っていた生徒二人の姿が視界に入る。

一人は艶やかな金髪を腰まで伸ばした白服、女性の貴族生徒、もう一人は広い肩幅をした体格に良い緑の制服を着た平民の男子生徒だったが、その二人は身分の差を感じさせない気安さで会話しているようだった。

「ん？ お前は……」

「あら、アンゼリカじゃない」

「やあフリーデル、ちよつとお邪魔するよ」

入室に気づいた二人、アンゼリカの知り合いであるらしい女生徒はルドルフたちの間で視線を往復させると来訪の目的を測りかねているのか小首を傾げる。

「フェンシング部は休憩中かい？　そこでパトリック君と会ったけれど、彼も君のクラブ所属だったのかな」

「ええ、ついさつきからね、そのパトリック君もそうだけど今年の新入生はなかなか面白い子が多いわ」

「野郎は流石に生意気すぎるがな……」

にこやかに語るフリーデルの言葉に対して男性の方は苛立ちが垣間見える苦い顔で吐き捨てていた。

「基礎練習なんていいから試合させろなんてぬかしやがる、四大名門だかなんだか知らないがプライドばかり高くて困る……つと、悪い」

「ふふ、気にしないでいい。ロギンス君が当て擦りを言うような人間じゃないことは分かっているさ」

苦言を漏らすも目の前のアンゼリカが同じ四大名門であることを思い出したようにばつの悪い表情になる男性、ロギンスだがアンゼリカは気にする様子も見せなかった。

「でも大きいのは態度だけじゃないみたいね。彼、昨日はロギンス君と引き分けてたわ

けだし」

「……っ、あれは、相手が一年坊主で油断しただけだ……」

そう言つて気まずそうに首をよそへ向ける姿が可笑しく映つたのか、フリーデル、ア
ンゼリカはクスリと微笑み交わしていた。

「でもいいのかい？　そうやってクラブの風紀を乱されるのは部長として見過ごせない
んじゃないのかな」

「そうね、注意はするけど、あんまり度が過ぎるようなら私が直接指導してあげないとい
けないかもしれないわね」

浮かべた笑みが形はそのままにしながらも凍てついた雰囲気を感じ取り、隣に立つロギンスがビクリと身動きした。

柔らかな物腰からは想像できない息を呑むような凄みを放つフリーデルにルドルフ
も目を瞠り、部長という肩書がただのまとめ役というわけではないことを肌で感じ取
る。

「おやおや、この様子だとパトリック君が去年のロギンス君と同じ目に遭つてしまひそ
うだね」

「その話はよせ……！　それより、うちに何の用なんだ？　見ない顔も居るみたいだが」
話題を逸らすように——実際そういう狙いもあったのだろうがロギンスが問いかけ

る。

二人と面識の無いルドルフが名乗るよりも早く、手で示しながらアンゼリカが紹介に入っていた。

「彼、地元の知り合いでルドルフ君と言うんだが、彼と少し手合せがしたくてね、修練場を少し借りても構わないかい？」

その言葉にフェンシング部の二人は揃って目を丸くし、ルドルフをしばらく注視した後確かめるような口調でアンゼリカに聞き返した。

「例のⅦ組の子よね、貴女とで勝負になるの？」

「なに、彼には昔軽く格闘術の手ほどきをしたことがあってね、手合せといっても腕が鈍っていないか確かめさせてもらうくらいさ」

「ふうん——、まあ管理はしてるけど私たちのものってわけでもないし、休憩の間ぐらいならいいわよ」

「助かるよ、そのお礼というわけではないけれど——」

アンゼリカに目を向けられたルドルフは事前の打ち合わせ通りに進み出ると、持っていたバスケツトを差し出した。

「紹介に与りました一年のルドルフ・シュヴァルベと申します、お口に合うか分かりませんが、良ければ召し上がって頂けないでしょうか？」

「食堂のラムゼイ氏の料理も素晴らしいが、たまには趣向を変えたランチでもどうか、味の方が私が保障しよう」

興味深そうにバスケットを受け取り、蓋を開けて中を覗き込んだフリーデルは珍しいものでも見たような感嘆の吐息を漏らす。

「悪くないわね。ありがとうルドルフ君、頂いておくわ。ロギンス君、私たちは隅でお昼にしましょう、面白いものも見れそうなことだし、ね」

「あ、ああ。構わないけどよ……アンゼリカ、一年相手に無茶するんじゃないぞ」

修練場の隅へ向かうフリーデルの後に続きながら釘を刺すように言うロギンスに手を振り、アンゼリカは試合用らしい床に赤いラインが引かれ四角に区切られたエリアに立った。

アンゼリカが扱う格闘技は泰斗流という東方、共和国出身のある女性から伝授されたという武術を基礎とするものだが、その熟練度合いはそこらの貴族子女の手習いとは桁違い、並の魔獣程度なら素手でも易々と屠ってしまえるほどでロギンスの懸念も大袈裟なものではなかった。

「体術の方を見たいから戦術オーブメントは無しとしよう、いいかい？」

「もちろん構いません、アンゼリカさんにご指導頂けるだけでも僕にとつて得難い機会ですから」

そう言つてキャパシターのケースをエリア外に置いたルドルフだったが、振り返つた先で、アンゼリカが手ガントレット甲を両腕に装着しながら意味ありげな視線を向けてきているのに気づく。

ルドルフが何事か尋ねるまでもなく、アンゼリカが自分から切り出した。

「それなんだがルドルフ君、私は今回君にあれこれと指南するつもりはない」

足を開き、半身をルドルフへ向け構えを取つたアンゼリカはそれまでの飄々としていた面持ちを鋭さが感じられるまでに引き締めると、真剣な声音で言い放つ。

真つ直ぐに向けられた眼差しに込められた意思の強さは間に挟む空気が軋むような錯覚をルドルフに起こさせた。

「君の腕を確かめておきたい、私に打ち勝つつもりでかかつてきてくれ。でなければ——ただでは済まないかもしれないよ」

「——っ！」

脅かしではない、紛れも無いアンゼリカの本気を感じ取りルドルフは神経を張り詰めさせると拳を構える。

幾度か格闘術の指導を受けたルドルフも彼女からここまでの闘気を向けられるのは初めてのことだった。

構えたのを見取るなり、アンゼリカは流れるような足捌きで距離を詰めると、前に出

した腕が霞んで見えるような鋭い拳打を放った。

辛うじて反応が間に合ったルドルフは掲げた腕でそれを受けるも、腕から伝わる振動に表情を硬くする。

繰り出された拳打はアンゼリカの全力ではなく、ルドルフにも耐え凌げるもの、だがそれ故に引き戻しも早く続く浅打に反撃が間に合わない。

先の言葉、何故アンゼリカがそこまでの覚悟を求めたのか、掴めずにいるルドルフだったが、この手合せを彼女が簡単に終わらせるつもりなどないことだけは理解できた。

勝つにしろ負けるにしろ、相応の態度で臨まなければ彼女が満足しないのは明らか、ならばと腕を交差させ顔面を狙ってくる連打を押し退け縮まった間合いを更に詰めようとするルドルフだったが。

「……くっ!?!」

足を踏み出した瞬間滑り込むように腕の下から潜り込んできた掌が顔へ迫り、咄嗟に踏みとどまったルドルフの視界が急激に上向く。

「まだ、甘いね」

掌打に合わせて踏み込んでいたアンゼリカの脚が上に注意を引かれ疎かになっていたルドルフの片足を蹴り払っていた。

体勢を崩したルドルフの懐へ更に踏み込むと、アンゼリカの腰元へ引き絞られていた拳が鋭い呼気と共に放たれる。

「く——はっ！」

鳩尾を扶る重い衝撃に思考が一瞬白く染まり、肺の空気を強制的に吐き出させられた虚脱感に見舞われ、ふらりと下がったルドルフに更なる追撃が迫った。

初手から続いた軽く刻むような打撃とは違う、全身の捻りを乗せた武術による拳が。

「づ、くっ……」

あまりに強すぎる痛みにはルドルフといえど表情の歪み、意識の散漫を抑えきること
は出来ない。

しかし攻撃を認識した瞬間、ふらついていた脚は地を踏みしめ、反射的な動作でルドルフの腕は弧を描き迫りくる凶拳を打ち払っていた。

「——っ」

一瞬眉を顰め追撃を凌がれたアンゼリカは素早く下がるとまた始めの構えへ、二人の構図もまた戻った形だが異なるのはルドルフが大きく息を乱していること。

「分かっただろう？ 本気になるのなら早い方がいいと思うけどね」

「それ……は……」

窘めるような言葉をかけるアンゼリカの瞳が、片手で腹を抑えながら躊躇するように

言葉を濁すルドルフを嘆くような目で見ていた。

「……おい、いいのか」

「何がかしら?」

「止めなくていいのかって話に決まってるだろ……つたく、アンゼリカの奴何考えてやがる」

そわそわとして落ち着きの無いロギンスにフリーデル、フェンシング部の二人の前で手合せ、というより一方的に攻めかかるアンゼリカの攻撃を耐えるルドルフという構図が繰り広げられていた。

「あの一年もよく耐えちやいるが、相手になつてないじゃねえか、フェンシング部が私刑リンチに加担してるような噂でもたつたらどうするよ」

連打の間隙を縫って時折腕を振るうルドルフだったがその悉くが見切られ弾かれていたようだった。

あの手痛い一撃の後から動きがより慎重になっていたが、アンゼリカの拳によるダメージは確実に蓄積している筈であり、ルドルフが膝をつくのは時間の問題とロギンス

は見ていた。

「やるんなら一気に決めればいいだろうに、アンゼリカの奴もなんだってこんな——」
「らしくない真似をするからには、それなりの理由があるのよ」

ロギンスとは対照的に表情を乱さず、淡々とした物言いが続けるフリーデル。

「彼女がわけもなくあんなやり方をするなんて思つてないでしょう？ 私たちは彼のことも全く知らないんだから、ここは任せましょう。それに——」

今また伸ばした腕を払われ強かに腹を打たれたルドルフを冷静に見据えながら、言葉を重ねる。

「彼、さつきからまともに打ち合つてもいないじゃない。あんな狙いが見え見えじゃ軽くあしらわれて当然よ」

「何……?」

言われてロギンスはようやくそのことに気づくことができた。

振るわれるルドルフの手、それが打撃としては的を外しており、開かれた手はあからさまに相手を掴み伏せようとするような動きのせいであるということに。

アンゼリカに師事したというのならある程度の拳闘術は扱えるものと思われるだけに気づいてみればロギンスの目にもそれは不自然に映った。

「——んッ」

「!? どうし……た……た……」

不意に上がった呻くような小声に驚かされたロギンスが見た先では、口元に手を当てたフリーデル、その片手には一口齧られた形跡のある柔らかそうな白パンにローストビーフをメインとした具材が挟まれたサンドイッチが握られていた。

ポカンと呆けているロギンスを尻目にフリーデルは上品に咀嚼したサンドイッチを喉へ落とし込み呟く。

「山レわさびフが利いてるわね、確かにいい腕してるみたい」

そんなことを言いながら上機嫌に食を進める彼女に大袈裟な反応をってしまったことに一人ロギンスはがつくりとうなだれてしまっていた。

「ロギンス君もどう? 少し辛味があるけど美味しいわよ」

「……後にさせてもらおう」

肩を落としながらも視線を引き戻した先では、二人の攻防に終わりが見えようとしていた。

「ぐっ……」

放たれた拳打に合わせて突き出した手が遂に相手の腕を捉えようとしたとき、逆に交錯した腕が蛇のように巻きつき掬め取るのを目の当たりにルドルフは呻く。

完全に動きを読み切れられどうすることも出来ないまま腕を取られ背中から地へと投げつけられる。

「柔よく剛を制す、腕力では君に敵わないけれど、応じようはいくらでもあるものさ」「倒れたルドルフをアンゼリカが冷ややかな瞳で見下ろしながら囁く。

繰り返し返される応酬、未だルドルフの攻撃は一度たりとも彼女の身に届いてはいなかった。

「……何故」

「うん？」

「何故こんなことを、されるのですか？ 僕の技量など貴女ならご存知でしょうに……」
立ち上がりながら疑念を吐き出したルドルフにアンゼリカはため息を一つ吐いて返す。

「ああ知っているよ、でも君の技量と全力は別物だ、違うかい？」

「……」

見透かした物言いにルドルフは立ち合いの最中だというのに目線を外してしまった。
言い逃れできず、それでも相手の求めに応じることのできない苦し紛れに。

「君が躊躇う理由は大体察しがつく、けれどね——実技テスト、もうじき始まるんだろう？」

急に転換した話題に目を瞠りつつもルドルフが頷く。

実技テスト、それは自由行動日の前日に教官であるサラから告げられていたことだった。

それが特科クラス特有のカリキュラムにおいて最たるものに属することはⅦ組の誰もが理解していた、しかしそれをこの場で口にされるとは予想もしていなかったルドルフはただアンゼリカの顔を見返してしまう。

「君たち、Ⅶ組の設立には実に多くの人が関わっているんだ。去年は私自身Ⅶ組の試験運用みたいなものに参加していたしね」

「アンゼリカさんが……?」

「そう、だから君たちがこれからどんな体験をすることになるのか、少しは予想がつくんだよ」

語るアンゼリカの瞳はそれまでとうってかわって、家族を慈しむような柔らかいものに変じていた。

思わず見入ってしまったし、もうそうになっていたルドルフの身に次の瞬間、キツと鋭くした目つきで見据えられたことで再び緊張が走る。

「特別オリエンテーリングは覚えているね。あの時、多少なりとも危険な目に遭ったりはしなかったかい？　そうでなくともあそこは気を抜いていられる場所じゃなかったはずだけどね」

その言葉を受けルドルフの脳裏に甦るのはあの石の守護者ガーゴイルとの闘いだった。

結果的にリインたちが間に合い運良く戦術リンクが効果を発揮したことで事なきを得たが、危うい場面は確かにあった。

「今後君たちは何度もあれと同じような経験をすることになると思う。そうなったとき君に、アリサ君に、もしものことが起こらないとは限らない」

仕える少女の名を出されたときルドルフは今更ながらその可能性に思い至り慄きそうになってしまった。

VII組設立の目的を鑑みれば独自のカリキュラムというものが実戦を想定したものであることは想像に難くない。

そんなとき、いつもあのオリエンテーリングのときのように皆が無事に済むという保証など誰にもできないのだ。

「どうしようもないことというのはある、全力で臨んだ結果がそうだというのなら誰を責めることもできないさ、ただどね——」

言葉を切り、鋭く息を吸い込んだ次の瞬間、アンゼリカの纏う空気が一変する。

「——っ！」

周囲の気が錯覚でなく揺らぎ、それがアンゼリカの身から迸る不可視のエネルギーによるものだということはルドルフにも一目で分かった。

導力ではない、体内を巡る気を練り上げ身体能力を飛躍的に向上させる一部の達人が用いる戦闘技法、それがアンゼリカの本気だった。

「——全力を出せば避けられたはずの悲劇なんて悔やんでも悔やみきれないよ、君たちにはそんな思いもして欲しくは無い」

構えを取るアンゼリカ、見据えるその表情に込められた真摯な思いをようやくルドルフは理解することになる。

「だから——ここで思い出して行くといい、君なりの全力の出し方を」

「……ありがとうございます、アンゼリカ先輩」

痛みの残る体を落ち着け、自分を導こうとしてくれている女性の名を出来る限りの尊敬を込めてルドルフは呟く。

決心が滲むその言葉にフツと微笑を覗かせたアンゼリカに対し、ルドルフは跳び下がりに距離を離すと体勢を低く、つま先を前へ向けまるで駆け出すような体勢をとった。

「一応尋ねるけれど、そのままでもいいのかい？」

「ええ、あちらは加減が利かなさすぎる——いくら先輩といえど大怪我を負わせてしま

うつもりはありません」

「ハハッ！ 言うじゃないか」

笑みを嚔猛に深め鬨気を滾らせるアンゼリカへ向かい一呼吸程の空隙の後、地を蹴りルドルフが疾走した。

見守っていたロギンスのみならず余裕を保っていたフリーデルまでもが目を見開くような速さで迫ったルドルフに、アンゼリカは動じもせず氣迫を込めた拳で以て迎えた。

氣功により高められた全身の筋力を余すことなく乗せた裂帛の正拳、一直線に特攻するルドルフを穿とうとしていたそれが、空を切る。

「——っ!？」

消えたと見紛うような目標の喪失をアンゼリカは見逃しては居なかった。

直撃の寸前に地を蹴って飛び上がったルドルフはアンゼリカの頭上で大きく身を翻している。

意表を突く跳躍回避だが武器も持たない彼が宙に浮いたままではできないことはたかが知れる、地を蹴る反動を得られない空中では拳や蹴りを見舞ったところで威力も望めない。

跳躍した勢いそのままにアンゼリカの後方へ抜け仕切り直しとなる、筈だった。

宙に描く放物の軌跡、その頭頂でルドルフの体が慣性という条理に背き直下、拳を振り抜いたアンゼリカのすぐ背後へと跳躍の勢いそのままに落下、床を大きく振動させて着地する。

「くっ!？」

焦燥露わに振り向きながら肘を打ち込もうとするアンゼリカだが、相手に対し宙で向き直るまでに体軀を制御していたルドルフに背後を取られた不利を覆すことはできず、その二の腕が受け止められると同時にがっしりと掴まれる。

掴んだ腕を捻ると同時に足元を蹴り払われ、次の瞬間アンゼリカはうつ伏せる形でその身を押し倒されてしまっていた。

「痛う……なるほど、こんな真似ができるんだな」

背を膝に押さえ込まれ完全に抵抗を封じられたアンゼリカの呻きには感心も混ざっていないようだった。

「足蹴にする無礼をお詫びします」

「ハハッ、まさか私が男の子に組み敷かれる日が来るとはね……誇っても構わないよ、やれば出来るじゃないかルドルフ君？」

「あれだけ手心を加えられておいて、今さら勝ち誇ることできませんよ」

アンゼリカのからかうような台詞に苦笑しながら返すルドルフ、それはこの手合せの

終わりの意味も意味していた。

拘束を解きルドルフに手を借りながら身を起こすアンゼリカは服についた埃を払いながら先程までの強烈な闘気を微塵も感じさせないほど気安い調子で朗らかに笑った。

「まあよし、私が言ったことは覚えておいてくれるね？」

「はい、いざとなれば躊躇うような真似は決してしません、お嬢様は必ずお守りします」

「んー……やれやれ、ちよつと気になるけれど前進ありということで見逃そう」

期待通りの返答が得られなかったのか、どこか不満そうにジツとルドルフを見るアンゼリカだったがそれ以上は言うまいとばかりに小さく息を吐くだけに留めるのだった。

「ふう、あんな勝負をしたのは久しぶりだよ」

「あそこまで体を張るなんて貴女も意外に面倒見が良いのね」

ラインとの待ち合わせに向かったルドルフを見送った後の修練場でアンゼリカはフェンシング部のフリーデルらと言葉を交わしていた。

「私は普段から面倒見がいいつもりだけど？」

「ええ、可愛い女の子に対してはね」

フフツと笑ってそんなことを言われると図星らしく否定せずにアンゼリカも笑い返す。

そんな二人に焦れたようにロギンスが口を挟んだ。

「それよりアンゼリカ、お前最後本気だったな？ そりゃあの一年も最後の動きはすごかったけどよ、心臓に悪すぎだ……」

「すまないね、彼がなかなか本気になってくれないものだからつい熱くなってしまったみたいだ」

まるでこたえた風もないアンゼリカに片手で抱えた頭を振って見せるロギンスはすっかり疲れたような目をしていた。

「……少し出て気分変えてくる」

そう言い残し修練場を出ていくロギンスは背中に哀愁を漂わせていた。

「二年の頃に比べれば彼も丸くなったけど、もう少し余裕が欲しいところだね」

「そうね……手伝いはいる？」

手甲を外そうとしているところにそう声を掛けられたアンゼリカは一瞬動きを止めると、次いで照れ隠しをするように微笑んだ。

「お願いしてもいいかい？ 固定具を外してくれると助かる」

「ええ、分かったわ」

右手の手甲、その固定具を外すのに苦勞していたアンゼリカは申し出をあっさりと受け入れ、フリーデルの助けを借りて両手の手甲を外し終えた彼女が黒ツナギの左袖をめくるとその下には青い腫れが広がっていた。

「最初の払い受け、ね？」

「彼も咄嗟のことだったから加減できなかったんだろう、始めから気功を使っていなかったとはいえこれは私の油断かな。人の事ばかり言ってもいられないね」

足払いからの一撃、その追撃を弾かれた際アンゼリカが浮かべた渋面はこの痛みによるもので、気功まで使い決着を急いだのはそれによるほろが出るのを避けるためでもあった。

「今年の新入生は面白い子が多いって言ったけど、彼の場合そんなことを言うのは不謹慎ね」

ぼつりと呟いたフリーデルの面持ちには何かを慮るように深く、沈痛な色が差していた。

彼女が察し取ったであろうことを知るアンゼリカは驚きに目を瞠る。

「——流石だね、もう気づいたのかい？」

「気づかないわけじゃないでしょう？ 気功無しとはいえあれだけ貴女の拳を受けて腕が上がる人間なんてそうそう居ないわよ」

「ハハハ、それは光榮な評価だね。——さて、そろそろ午後の活動時間になるだろうし、私は街の教会に湿布薬でももらいに行くとしようかな」

アンゼリカが言うように大陸全土、トリスタにも存在する七耀教会では独自に調合した治療薬をほぼ無償で怪我人、病人に処方してくれている。

だが士官学院には保険医であるベアトリクス教官が詰めている保健室が存在しわざわざ街まで出ていく必要性に疑問を感じたフリーデルは首を傾げていた。

「どうしてまた教会まで、たまに居るらしいけど貴女保健室嫌いつてわけでもなかったでしょう？」

「なに、以前から目をつけ——気になっていた一年のロジーヌ君が今日の自由行動日からシスター活動をしているらしくてね、お近づきになるいい機会じゃないか」

満面の笑みで語られたその言葉の意味を数秒かけて理解したフリーデルは呆れたように眉尻を下げて言うのだった。

「貴女って人は……転んでもただで起きないのね」

旧校舎の異変

ギムナジウムを後にし学院の裏手、林の中にそびえ立つ旧校舎へ向かうルドルフだったが裏門を抜けたところでその背中に声が掛かる。

「あ、ルドルフ！」

ルドルフが振り返ってみると魔導杖のケースを背にしたエリオットが駆けてくる姿。彼もまたリインの旧校舎調査の助力を引き受けていたのだった。

「エリオット、丁度良かったですね、僕も今来たところですよ」

「うん、すぐ合流できて良かったよ。あ、お昼用意してくれてありがとう、美味しかったよ」

寮に残っていたメンバー、と言っても二人だけが昼食をつくり置いていたことに礼を言うエリオット。

並んで歩き始めながらそのほがらかな笑みにつられるようにルドルフも微笑み返す。

「お口に合ったのなら幸いです」

「またそんなこと言って謙遜しなくてもいいのに、そういえばルドルフは料理部とかには興味無かったの？ クラブに入っていないみたいだけど」

「——ええ、僕は支度に少し時間をかけ過ぎてしまうものですから、ああいった活動には向かないと思ひまして」

ふと気になった様子で問い掛けたエリオットの言葉にほんの僅か、ルドルフは言いよどむような間を空けていた。

それにエリオットは少し首を傾げながらも追及するようなことはしなかった。

「ふーん？ あ、そういうえばガイウスも来てくれるみたいだよ、美術部に入ったらいいんだけど午後から合流してくれるんだって」

「それは心強いですね、間違ひなく戦闘になることでしょうか」

ガイウスの巧みな槍捌きはこの日までの戦技教練でⅦ組の皆知っている。

続いたエリオットの言葉によれば他のクラスメイト達はクラブ活動や個人の予定があるということでは来られないらしく、魔獣が多く徘徊する旧校舎の探索にガイウスが加わってくれるということは彼らにとって朗報だった。

「それにしても旧校舎かあ……あの石の魔獣みたいなのと出くわさないといいけど」

「そうですね、あの時は皆が居ましたが今回は僕たちだけですから、一層気を付けておくべきでしょう——？」

先日のオリエンテーリングを思い出しながら待ち合わせ場所へ向けて歩いてきた二人だが、その道中で不意に小さな息遣いのような音を耳にして足を止める。

「この声……もしかして」

それが最近聞き慣れたものであることに気づきエリオットが耳を頼りに木立の方へ目を向けた先、木々の間隔が空き僅かに開けた空間に予想通り。

赤い制服の上着を傍の木に掛け左手を腰に佩いた太刀の鞘に、右手で柄を握り込んで構えを取っているリインの姿がそこにはあった。

声を掛けようと口を開きかけるエリオットだったが、普段柔和な印象を周りに与えているリインの表情が神経を研ぎ澄ませているように引き締まり、その張り詰めた雰囲気から声が出せなくなる。

瞬間、リインが小さく息を吐いたかと思うやその姿が霞む。

「――！」

少なくとも二人にはそのように見えていた。

気づけばリインは数歩分、前方まで踏み込んでおり鞘に納められていたはずの刃が抜きざまに振り抜かれている。

刹那の一闪、その鋭さのあまりエリオットはゴクリと生唾を呑み込んでいた。

「……エリオットにルドルフか、もう来てくれたんだな」

その気配に気づいたらしくリインは表情を緩めて太刀を鞘へと納めると、木に掛けていた上着を取り二人の方へ足を向ける。

「悪いな、折角の自由行動日にこんなこと頼んじやって」

「いえ特に予定もありませんでしたから、どうかお気になさらず」

「僕も実家からの荷物整理ぐらいしかすることもなかったしこれぐらいお安い御用だよ、リインの方は今の……ウオーミングアップしてたの？」

「ああ、そんなところかな」

屈託なく笑うエリオットに着直した上着のボタンを留めながらリインが返す。

戦闘が予想されるダンジョン区画の調査ということもあり体を温めていたところらしい。

「そうだよね、急に激しく動いて肉離れでも起こしたら大変だし、僕も少し走るぐらいしておいた方がいいかな」

「エリオットにはオリエンテリングのときみたいに後ろから支援してもらおうことになるだろうけど、柔軟ぐらいはやっておいた方がいいかもしれないな」

オリエンテリング時に共に行動していたリイン達はお互いの戦い方を心得ているせいか勝手を知った様子でそんな言葉を交わす。

「それにしても今の、リインの剣もすごいですね、東方由来の剣と聞いていますが剣術もそちらの方の流派を嗜まれているのですか？」

帝国二大剣術の一つ、アルゼイド流のラウラとはまるで異質な剣技に興味を引かれ

ドルフが尋ねると、リインはどこか気まずそうな苦笑を浮かべた。

「ユミル、俺の故郷に昔この剣術、八葉一刀流っていう流派を創設した人が滞在したこと
があつてさ、この太刀と剣術はその人から学んだんだ。……初伝を授かりこそしたけど
腕の方はあまり上達しなくて修行は途中で打ち切られちゃったんだだけだな」

「創設つて、自分で剣術をつくつちやつたつてこと？ そんなすごい人が居るんだ……
でも打ち切られるなんて、僕からしたらリインの剣の腕も十分すごいんだだけなあ」

「ハハハ、老師は俺なんかと比べ物にならないぐらいすごい人だったよ、今の技だつて実
戦ではあんな理想的な形で放てるわけじゃない、だからこそ日々型の鍛錬を重ねてるわ
けでもあるけど……きつとあの人の教えを受けるには俺の方の器が小さすぎたつてこ
とだろうな」

「リイン……」

自嘲気味にそんなことを言うリインにエリオットは釈然としない様子だが剣術とい
う理解の及ばない領域の話であるせいかそれ以上の事が言えずに眉根を寄せるだけに
留まる。

VII組の中でも人柄の良い部類に属するリインだが時折そんな自分を卑下するような
態度を見せるところがあつた。

「旧校舎の鍵は俺が預かつてきてるけどガイウスもそろそろ来るかもしれないな、門の

前まで行っておかないか？」

「——そうしましょうか、そちらの方がすぐ合流できるでしょうし」

気になるとはいえまだ付き合っても浅いルドルフとエリオットは胸の内にわだかまりを残しながらもこの時、ラインに何故そのような態度を取るのかと踏み込めずに言葉を濁してしまうのだった。

足を踏み入れた旧校舎は異常有りと報告するに十分過ぎる変貌を遂げており、オリエンテリングの際に探索した迷宮区画は構造から一変している上に徘徊する魔獣にも見覚えの無い種が見られていた。

建物の内部構造が変化していたという異常事態に加え、詳細な報告の為調査に踏み込んだルドルフら四人は最奥と思われるフロアで突如何もない空間から姿を現した大型魔獣と遭遇し交戦、幸いにしてあのガーゴイルのような再生能力は有しておらず四人は大きな負傷も無く撃退に成功し調査開始から数刻の後、旧校舎の正門まで帰り着くことができていた。

「はああ……なんとか無事に戻ってこれたね」

陽が沈み始め赤らんだ空の下で魔導杖にもたれかかりながら大きく息を吐くエリオット。

四人の中で最も疲労の色が濃いのは彼がⅦ組男子の中でも線の細いせいだけでなく戦闘経験の無さからくる緊張によるものが大きく、そんなエリオットの肩をラインが労るように叩く。

「お疲れ様だったな、ありがとうエリオット、それにガイウス、ルドルフ、皆のお陰で学院長にちゃんとした報告ができそうだ」

「役に立てたのなら幸いだ、それに俺達にとつても戦術リンクの感覚を掴むいい訓練になったようだ」

十字槍を包みながらガイウスが答えたように、ARCSの機能を意識して戦闘に望むことで四人はそれなりに戦術リンクによる連携、その感覚を掴めるようになっていた。

出現した大型魔獣を撃退できたのもその効果が大きい、あのオリエンテーリングの時のようにその場の全員で感覚を共有——リンクを繋げることは叶わなかったものの、二人程度であれば十分な連携が可能なまでに至っている。

たった二人と言えどその恩恵は絶大だ、ラインとガイウス、前衛の二人がリンクを組めば攻めにおいても守りにおいても即座にお互いを援護できる緻密な連携が可能にな

り、前衛の二人が戦闘領域を広く見渡すことが出来る後衛のルドルフ、エリオットと組めばアーツ行使に息を合わせるのみならず死角からの接敵を察知することができ不意を打たれることがまず無くなる。

試験中ということもあつてかその機能は常に十全というわけではなく、時折動揺や意識の散漫までもARCCUSが拾い上げてしまったかのように伝わる感覚に歪みが出てはいたがそれでも戦術リンクの機能は出会って一月に満たない仲だとは思えないほど四人の連携力を高めていた。

「ARCCUSを通じて呼吸を合わせる、って感じみたいだったな」

「ああ、悪くない感覚だった」

「ごめんねリイン、僕はもつと上手くサポートできれば良かったんだけど……」

手応えを感じたらしいリイン、ガイウスと比べエリオットの表情は浮かない。

今回魔導杖とアーツによる後方支援に回っていたエリオットだが直接魔獣と交戦する前衛を二人に任せ、殿にはルドルフがつくという比較的安全な立ち位置に居たことを気にしていたのだった。

「十分エリオットには助けられてるよ、アーツにも大分慣れて来たみたいだし、気にする必要はないと思うぞ？」

「ええ、それに戦術オーブメントも完全な状態ではありませんから、無理をするべきでは

ありませんよ。——戦術オーブメントといえませんが」

ふと思いついたようにルドルフは懐から小ぶりの袋を取り出すと紐で閉じられた口をリイン達へ開いて見せ、袋の中身を覗き込んだ三人が僅かに目を瞠る。

そこには紅、蒼、琥、翠、色とりどりの輝きを放つ七耀石の欠片が詰められていた。

「道中交戦した魔獣の死骸からセピスを回収しておきました、これだけの量ならオーブメント工房に持ち込めば四人分でもそれなりのクオーツが作れるでしょう」

戦術オーブメントの要となるクオーツは世代ごとに規格が異なる上にⅦ組に支給されたARCU Sは特注品とも呼べるもの、適合するクオーツが一般に流通している筈もなく用意するのなら工房に製作依頼を出すしかない。

貴重な資源であるセピスを使用するクオーツの製作には通常なら安くは無い料金を請求されることになるが、素材となるセピスさえ持ち込めば支払うのは僅かな加工費だけで済む。

資金に余裕のある貴族生徒なら入学からすぐに用意してしまえるのだろうが、そうではないルドルフやエリオットにとつては今日のような形で多量のセピスを得られたのは僥倖でもあった。

「……こんなに……あんな短時間ですごいよルドルフ、僕なんか回収することもすつかり忘れちゃってた」

「セピスの溜まっている場所を探すのは得意ですので、リインとガイウスも必要な種類を教えてくださいだけければ……?」

分配の仕方を相談しようとしていたルドルフだったが、リインとガイウスが顔を見合わせ言葉も交わさずに頷き交わしているのに気づく。

何をと尋ねるより早く、リインの方からその意味は語られた。

「俺達はいいいよ、そのセピスは二人のクオーツを作るのに使ってくれ」

「えっ?」

その発言にエリオットが目を丸くして固まり、ルドルフにしてもあっさりと言は出来なかった。

「ダメだよそんなの、リイン達ばかりに損させるような真似」

「いいんだ、今後も二人と組むことはきつとあるだろう、その時に助けてもらえれば損なんかじゃないさ。俺もガイウスもアーツはそんなに得意じゃないみたいだしな」

「ああ、教本は読んだが俺も槍を振る方が性にあっていて、それは二人の方が使いこなしてくれるだろう」

そんなことを言いながら二人が分配を辞退しようとするものの、ミラ通貨に換金することも可能なセピスをそんなに気安く扱って良いわけがない。

そう断ろうとする寸前で、以前ラウラからクオーツを借り受けた時のことが脳裏をよ

ぎったルドルフは思いとどまる。

リン達ンのやり方は極端ではあったがアーツを得手とする者のクオーツを充実させておいた方がいいというのは確かに事実。

ARCUUSの特性からして評価に連携行動が重視されるⅦ組の方針上、リンらのように実践経験者が豊富で前衛を担当できるメンバーが揃っている現状なら逆にエリオットなどの経験の浅い者が多い後衛の装備を整えておくのはむしろ望ましい。

——成程、そこまで考えてのことは、流石ですね。

自分の視野の狭さを恥しながらルドルフは申し出を受けることを心に決める。

実際のところその提案をした彼らの気持ちは二人の助けになればいいという程度の単純なものだったが。

「エリオット、ここは二人のお言葉に甘えておきましょう」

「でも……」

「実技テストも控えていることですし、きつと報いる機会がありますよ。エリオットならすぐに新しいアーツも使いこなせるようになると思います」

「そ、そうかな？ うーん……やっぱり気が引けるんだけど、ルドルフまでそう言うんだったら……」

ようやくエリオットが折れはしたものの、一つの問題にルドルフは気づいてしまっ

た。

「そういえばトリスタにはオーブメント工房が無いのでした、流石に明日の実技テストには間に合いませんね」

クオーツの作成には当然専門技術を修得した技師と機具が必要になるのだが民間にも多くの導力製品が普及しているこの時代には珍しく、トリスタの街にはそれらを備えたオーブメント工房が存在していなかった。

今日中の加工を諦めようとしていたルドルフだったが、その解決策が意外なところから示される。

「それなら問題無い」

「リイン?」

「学院の裏門から入ってすぐ左手に技術棟があるんだ、そこでオーブメント関係の仕事は一通り技術部の人が請け負ってくれるらしい。俺達のARCUのメンテナンスもやってくれるみたいだ」

この日の午前中、生徒会の手伝いをしていたリインだがその依頼の中に技術部からのものがあつたのだという。

その時にトールズ士官学院の技術部が代々この街での動力器の整備役を担当していることを聞かされたらしい。

「街にオーブメント工房が無いのはそういうことでしたか、それにしても学生の方で戦術オーブメントの整備までできる技術を修得されている方がいるとは驚きですね」

「クオーツの加工もやってくれるって話だ。学院長への報告はこつちでやっておくから、二人はこの後行つて来たらどうだ？」

「それなら俺も付き合おう」

またしても気を遣われてしまう形となりルドルフとエリオットは一瞬躊躇つてしまふがすぐに先程と同じやり取りを繰り返すことになつてしまふことを悟り、顔を見合わせ苦笑する。

「分かった、ありがとうリン」

「この借りはいずれお返しします」

「はは、そんなに気にする必要無いさ、それじゃあ二人ともまた後で」

手を振りルドルフはエリオットと共にその場から離れ学院へと向うのだったが離れる間際――

「――？」

何故か旧校舎を振り返りじつと見つめているリンの姿が頭に残つた。

技術棟での出会い

「確かに預かったよ、君達そろそろ実技テストなんだろう？　なら明日の朝までには仕上げて届けさせてもらおうよ」

リンから聞いた技術棟を訪ねた二人を迎えたのは入学式の日、小柄な生徒会長と共にⅦ組新入生を校門で迎えた黄色ツナギの二年男子だった。

今日中の仕上りを約束してくれた彼の名はジョルジュ・ノーム。

加工依頼をあつさり快諾したことからも窺い知れるが、オーブメント技師として一線級の技術を修得しているらしい非凡な学生といえる。

「いいんですか？　技術部って結構忙しいみたいですけど……」

「気にしないでくれ、君達のサポートは学院の教官方からも言付かってるし、最新鋭の戦術オーブメントの調整に関わるのは僕にとつてもいい経験になるんだ」

笑顔でそう返すジョルジュの表情はふくよかな体形もあつて温和な印象が強く滲み、人柄の良さを感じさせる。

そんな彼が迷惑そうな素振りを全く見せなかったこともあり何かと他人に遠慮しがちな二人も厚意に甘えることができた。

「そうだ、聞いた話だとルドルフ君は珍しい導力器を扱ってるそうじゃないか。良ければ後学の為に見せてもらっても構わないかな？」

「僕の……ああ、このキャパシターのことでしょうか？」

ケースを持ち上げて見せるルドルフにうんうんとジョルジュが頷きを返す。

個人の兵装としてそんな代物が扱われていることに興味を引かれたのだろうか。

「もちろん無理にとは言わないよ、分解させて中身を見せてくれとは言わないし。見たことのない導力器っていうとつい調べたくなくなっちゃうというか……ハハ、技術畑の人間の病気みたいなものでね。加工の件だって気にしないで欲しい」

そう付け加えたジョルジュだったが、僅かの間考え込む様子を見せたルドルフの答えは承諾の意を示すものだった。

「いえ、その程度でしたら構いません。簡単な整備なら僕も出来ますが導力工学の専門知識を修めているわけではありませんから、先輩には今後お世話になってしまいかもしれませんし」

ジョルジュとの間のカウンターにルドルフはキャパシターのケースを置きロツクを解いてから差し出す。

「ありがとう、失礼させてもらうよ」

薄い目を嬉しそうに細めながらジョルジュはケースの蓋を開くと収められたキャパ

シターを取り出した。

ためつすがめつ導力器の外観を眺め備わった盾の裏側、キャパシターの本体と戦術オーブメントのセットされる基台をつぶさに観察していく。

「ふんふん……本当にARCCUSに対応しているんだね。となるとやっぱり……んん？」

時折眩きを漏らしながら首を傾げ、頷き、目の前の二人の存在を忘れたかのように集中し顔に浮かぶ疑問と得心がころころと移り変わる様にクスリと微笑んだエリオットがこっそりとルドルフに囁きかける。

「すごい真剣になってるね」

「ええ、流石こんな施設を任されているお方のようです」

「でも分かっちゃうなこういうの、僕も新しい楽譜を練習するときなんかつい——」

楽しそうに話しかけていたエリオットだったがその中途、後ろで技術棟の正面玄関が開かれたことで途切れる。

「ようジョルジュ、邪魔するぜ。ちよつと頼みが——お？」

扉を開きながら現れるなりルドルフ達の姿を見取り動きを止めた白い髪青年は平民クラスの学生であることを示す緑の制服を着ていた。

額に巻かれたバンダナが特徴的で、緩んだネクタイやボタンの外れた上着からはどこ

となくだらしない印象が漂う。

「なんだなんだ、サラんとこの連中じゃねえか。どうした？　A R C U Sの整備にでも来たのか？」

ラインやジョルジュが浮かべるようなものとは印象が異なる、悪戯めいた薄い笑いを浮かべながらその平民生徒は二人へ歩み寄ってきた。

VII組、そしてA R C U Sのことを知った様子の彼にルドルフとエリオットは顔を見合わせる。

「おっと、悪い自己紹介がまだだったな。俺はクロウ・アームブラスト、二年のV組に所属してる。見りやあ分かるだろうが平民生徒だ、よろしくな」

「失礼しました、僕はルドルフ・シユヴァルベと申します、どうかよろしくお願いしますアームブラスト先輩」

「エリオット・クレイグです、よろしくお願いします」

唐突に現れたもののその生徒、クロウと名乗った青年の気安さにほだされルドルフ達も名乗りを返す。

「んなかしこまらなくなっちゃっていいぜ？　名前もクロウって呼んでくれていいからよ。つーかお前、ルドルフってもしかして……昼に修練場でゼリカの奴を押し倒したって一年か？」

「ええっ!？」

驚愕の声を上げるエリオットの視線を受けながらその内容、ゼリカという名前が示す人物をすぐに察したルドルフは小さく頷く。

「ゼリカ、というのがアンゼリカ先輩のことでしたらおそらくその通りかと思えます。実技指導を受けている最中のことでしたので押し倒した、というのにはいささか語弊があります」

事もなげに答えたルドルフの反応が期待通りのものでなかったのか、クロウはじつと目を細めるとため息と共に天を仰いだ。

「……かてーなー、想像以上だぜおい」

「クロウ、人をからかうのもほどほどにしておきなよ。ルドルフ君、ありがとう、もう十分に見せてもらったよ」

差し出されたキャパシターを取めたケースを会釈しながらルドルフが受け取る。

「はあ、ルドルフがそんなことするわけないとは思ってたけど、びつくりしちゃったよ」

「悪い悪い、そんな話をちよつと小耳に挟んだんでついな。けど大したもんじゃねえか、ゼリカの奴とまともにやり合える奴なんて二年にもそうそう居ねえんだぜ？」

「大分手心を加えて頂きましたから、それほどのことはありません。それにしてもARRCUSのことまでご存知とは先輩ももしや——？」

「おう」

親指を立てた握り拳で自らを示しながらルドルフの予測を肯定するクロウ。

「去年はまだ特別にクラス分けなんてしてなかったけどな、ゼリカにそっちのジョルジュ、あとは我らが生徒会長のトワ——入学式の日に会っただろ？ あの小さいの。Ⅶ組の試験運用は俺ら四人がやらされてたんだよ」

入学式の日、校門でジョルジュと共にⅦ組生徒達を歓迎したあの小柄な少女は次の日になり知った皆を驚かせることに名をトワ・ハーシエルというトールズ士官学院の今年度生徒会長を務める人物だったのだ。

試験運用の件は初耳だったのかエリオットが目を丸くしてその話に聞き入る。

「まあそんなわけで他の連中よりかはちつとだけお前らのことに詳しいぜ、トワなんかは随分気合入ってたしな、お前らの寮の清掃もバッチリしてあつたらろ？」

「あれは生徒会長のお気遣いでしたか、後日お礼に伺わせて頂かなければいけませんね」
「よせよせ、あいつなら礼なんて期待してねえよ。まあとにかく、これからよろしく頼むぜお前らっ？」

そう言うくとクロウは握手の形にした手を差し出した。

「はい、よろしくお願ひします、アーム——クロウ先輩」

「ははっ、先輩もいらねえよ、気楽に頼むぜ。ルドルフだったか？ お堅いお前さんは特

にな」

エリオットと握手を終えた手をルドルフへとニヤリと笑いながらクロウが向ける。

不思議と上級生であることを微塵も鼻にかける素振りの無いその気性は不快さを感じないもので、ルドルフは少し躊躇うような間を挟みながらも差し出されたその手を握り返す。

「そういうことでしたら……よろしくお願いします、クロウ」

「——おう、よろしくな」

技術棟を後にした後輩である二人を見送るとカウンターへ肘をつきジョルジュと向き直った。

「まだ上手くいつてねえところもあるらしいけどいい奴らじゃねえか、あのサラの教え子とは思えねえな」

「クロウやアンと一緒にしないであげようか、聞いたよ？ 昨日はリン君から五十ミラ巻き上げたそうじゃないか」

「ちよつとしたゲームの余禄だよ、そんな目くじら立てるなつて」

好人物ではあるものの学生としてはいささか素行に問題のある生徒であるクロウは苦言にもこたえた様子も見せなかった。

そんな友人にため息を漏らしつつもジョルジュが強く諫めないのも、彼がそういった手段をコミュニケーションの一環にしながら越えてはいけないラインを見極めることができる人間であることをよく知っているが故だった。

「そういや珍しく職人面になつてたじゃねえか、どうだつたんだ例のキャパシターとかいうのは、何か珍しいもんだつたのか？」

「ん？ 確かに個人の装備としては珍しいかもしれないけど、機構としては既存の導力技術の範疇にあるものだからね。目新しい発見があるわけじゃないよ」

そう前置いてから作業用のゴーグルを巻いた頭を掻きながらジョルジュは言葉を続けた。

「まず一般に流通していないARCCUSに対応している時点で予想はしてたけど純正のラインフォルト産だね、ただその割にあのサイズってことは戦術オーブメントの畜力補助装置にしては随分容量が大きいんじゃないかな」

ARCCUSはラインフォルト社とエプスタイン財団が秘密裏に共同開発したものだ。

その情報は当然機密事項であるしそんな代物に適応した装置となれば出処は絞られ、その分野に詳しい人間が調べれば特定も難しくは無い。

がくつきりと浮かんでいた。

和解と不覚

クオーツの加工依頼も済み後は日課となっている夕食の支度をするばかりだったが、ルドルフは一旦エリオットと別れその足を学院グラウンドへと向けていた。

昼の失敗を反省しつつもやはりアリサのことが気がかりなのは変わらず、何事も無いが遠目に確認だけしておこうという腹積もりでいたが、やや低地になっているグラウンドへ校舎区画から階段を下りたところで見つけたアリサの姿に思わず駆け寄ってしまった。

ルドルフがやってきたのが予想外だったらしいアリサもまた目を丸くして足を止めていた。

「アリサ……」

「ルディ？ どうしたのよこんな時間に学院まで来るなんて、まさか迎えに来たなんて言わないわよね」

「いえ、学院に来たのは別件です。ですがアリサ、何故お一人でそのようなことを？」

運動系のクラブは皆活動を終えたらしく夕暮れのグラウンドにはアリサ以外の人影は無い。

そんな中で未だラクロス部のユニフォーム姿のままのアリサは一人で後片付けをしているのだろう、ラクロス部の使用したゴールネットを引きずっていたのだった。

「後片付けは一年の仕事なのよ。当番になった子はもう一人いたんだけど、貴族の仕事じゃないって帰っちゃったの」

要するところアリサは本来当番の相手となるはずだったその貴族生徒に仕事を押し付けられてしまったらしい。

アリサとてその女子に対して思うところが無いわけではないのだろうがそれで仕事を放りだすような気にはなれないらしく、こうして一人後片付けに取り掛かっているのだった。

「お手伝いします」

「う……いいわよ、あなたどうせ今日も寮の夕食つくるんでしょ？ 遅くなったら皆にまで迷惑かけちゃうわよ。こっちは私一人でもなんとかなるから先に帰りなさい」

そう言つてルドルフの申し出を断るアリサだったが、グラウンドに目につく用具には今しがた引きずっていたゴールネットを始め一人では手間取りそうなものも少なくは無いらしい。

一人でそれらを全て片付けるとなれば彼女の帰宅時間は相当に遅くなってしまうだろうことが想像に難くない。

そうなれば明日の授業に影響が出ないとも限らないだろう、そんな彼女一人に貧乏籤を引かせるようなことを承服しかねるルドルフがどう説得しようか悩み始めたところへ。

「なんだ、まだ帰ってなかったのかルドルフ、アリサも……二人でどうしたんだ？」

その声のした方へルドルフとアリサが二人してハッとしながら顔を向けると、いつの間にか目と鼻の先に居たリインが不思議そうな表情を見せながら歩み寄ってくるころだった。

学院長への報告を済ませた帰りなのだろう彼の姿に気づくなりアリサの方は気まずそうにした顔を伏せてしまっていたが。

「リイン……」

「もしかして、アリサは一人でクラブの後片付けをしたのか？」

アリサとオリエンテーリングからの不仲が解消していない彼にどう状況を説明したら良いものかとルドルフは言いよどむが、リインの方はラクロス部の備品が残るグラウンドを見回しておおまかな見当がついてしまったらしい。

「はい、本来はもう一方いらしたそうなのですが——」

「ルデイ、余計な事言わないでいいから、彼と一緒に帰っちゃいなさい。これはラクロス部の、私の仕事なんだからあなたが気にする必要はないのよ」

説明を遮ってまでアリサはルドルフの手伝いを拒もうとしていた。

どうあっても自分一人でやるつもりであるらしい彼女になおもルドルフは言いすがろうとするが。

「なるほど、だったらここは俺に手伝わせてもらえないか」

「え？」

その発言にルドルフとアリサの声が重なる。

「俺ならもう今日の予定は無いし、適任だろう？ まあアリサが良いって言うてくれるのなら、どうぞ」

言葉の最後の方だけは少し自信無さげに、アリサをちらりと見ながらもリインはあつさりそう申し出てきた。

人の良いリインならではの言葉ではあるが、そこまで頼ってしまっているのだろうかという思い、そして彼とアリサの間の事情がルドルフを躊躇わせる。

しかし――

「……そう、ね。お願いしても、いいかしら」

「アリサ？」

予想に反して、顔を余所へと背けじつと考え込むような仕草を見せていたアリサの口から漏れたのは拒絶の言葉ではなかった。

ルドルフは思わずそんなアリサを見つめてしまい、リインも一瞬驚いたような顔をしていたがすぐに安心したような面持ちになつていた。

「それじゃあルドルフ、ここは任せしてくれ」

「アリサがそう仰るのでしたら……その、リイン」

「構わないさ、どうしても気になるならそうだな……ルドルフは今日も夕食を作つてくれるだろうか？ そちらの方に期待させてもらおうよ」

飾らない笑みを浮かべながら冗談めかせた事を言つてみせるリインにそれ以上何も言えなくなつてしまったルドルフはアリサの方を一瞥し、暫しの間考え込む様子を見せていたが。

「分かりました、ご期待に沿えるよう全力を尽くします」

「ははは、そこまで大袈裟に考えてくれなくてもいいんだけどな」

「いいえ——アリサ、先に戻らせて頂きます。帰りはどうかお気を付けて」

「ええ、あなたこそ気を付けて帰るのよ」

ようやく折れたルドルフが名残惜しそうにしながらもグラウンドを離れていく。

その背を見送つたリインは先程からずっと自分と顔を合わせずにいるアリサを横目で窺つていたが、やがて意を決したように少女へと向き直り口を開く。

「それじゃあ——」

「待って」

しかし同時に顔を上げていたアリサの言葉がそれを遮る。

見上げてくるその強い眼差しに思わずリインは息を詰まらせてしまった。

「その前に私、あなたに言っておかなくちゃいけないことがあるの。……聞いてもらえるかしら？」

アリサの発言に思い当たる所のあつたりインは領きを返しながら密かに腹を括る、遂にこの時が来たのだと。

オリエンテーリングでのトラブルからずっとリインは彼女に謝らなければいけないとその機会を窺っていた。

避けられてばかりいたせいでこの日までその望みは果たせておらず、すっかり目を合わせまらずは彼女の責めを受け入れようと覚悟していたのだったが。

「ごめんなさいー！」

「——えっ？」

予想に反し、おもむろに頭を下げたアリサが放ったのは謝罪の言葉。

謝ろうとしていた自分が何故逆に謝られているのかと混乱してしまい呆けてしまった。

「オリエンテーリングの事、あの時あなたは私の事を助けようとしてくれたのに頼まで

叩いちやつて、むきになつてずっと避けたりまでして、本当にごめんなさい」

「そんな、俺の方こそあんな事をしてしまったのは事実なんだし、謝るなら俺の方が……」

「つ、それは、それなただけど……やつぱり悪いのは私の方だわ。だからお願いリイン、謝らせて。それとお礼も……あの時は私を助けようとしてくれて、ありがとう」

顔を上げたアリサの僅かに不安が覗く顔色にリインは胸を衝かれてしまう。

真面目な性分であるアリサもまたリインと同じく、ずっとこの言葉を口にする機会を探していた。

原因となる出来事が出来事であるだけに気まずさからついそれが先延ばしになっていたことはリインにとつて気がかりだったが、アリサにとつてもまた謝ることができないことが自分で自分を責める重荷になつていたのだった。

それに気づいたことで、リインは自分が口にするべき言葉が謝罪ではないことを理解する。

「どういたしました、でいいのかな」

「もちろんよ——ふふっ」

夕陽の差すグラウンド上で改まって謝罪やお礼を交わしていることが今になって可笑しくなり、アリサの緊張していた顔がくすりと和らぐ。

つられてリインの顔にも笑みがこぼれ、少しの間二人は笑い合ってしまった。

「それじゃあアリサ、何から手伝おうか」

「そうね、大荷物から片づけたいところだけどその前にリイン？ 一つだけ言っておかなくちやいけないことがあるわ」

そう切り出すとアリサは首を傾げるリインに頬を少し赤く染めながら咳払いして告げた。

「あの時のことは不可抗力だけど、思い出したりしないよね。特に、その……感触とか、忘れなさい」

「あの時？ あっ——」

その件についての謝罪を済ませたばかりであるせいでもリインにも彼女が何の事を示して言っているのかはすぐに察しがついた。

忘れろなどと言われてしまえばかえって思い出してしまうのが人の性というもので、リインの頭の中には事の発端となったあの日の出来事、アリサの胸に顔を埋めてしまった記憶が鮮明に甦ってしまう。

それはあつさりとして表情に出てしまい、当然伝わってしまった目の前のアリサはそれまで以上に顔を赤くし。

「だ、だから……思い出さないでって言ってるでしょーっ！」

少女の叫びがグラウンドに響き渡るのだった。

うつすらと夜の帳が落ち始めたトリスタの街並み、第三学生寮までの帰り道をリインとアリサの二人は談笑を交えながら並んで歩く。

わだかまりさえ解けてしまえば元々人当たりの良い二人であるだけにその雰囲気は前日までとは全く別物に変わっていた。

手伝いのお礼からラクロス部の内容、クラブに所属しなかったリインがこの日任せられた生徒会の手伝いのことなど話題を移り変えながら会話は弾む。

「旧校舎の調査って、それ大丈夫だったの？」

「ちよつと手強い魔獣も出たけどエリオットにガイウス、ルドルフにも手伝ってもらえたから何とかなったよ」

「ああ、だからあんな時間に学院に来てたのねルデイったら。びつくりしちゃったわよ」
「ルドルフには寮の家事までやってもらってるし、確かアリサの実家で働いてるんだっ
たよな？」 同い年なのにあそこまで働けてるなんてすごいと思うよ」

親しい人物が手放しに褒められることがこそばゆいのか、アリサの方は照れたように

視線を泳がせてしまう。

「……まあ先生が良かったのかもしれないわね、ルデイだつて最初からあそこまで出来たわけじゃないのよ。

働き始めた頃はむしろひどかつたんだから。洗い物で何枚もお皿を割つたり、何もな
いところで転んだり、見てて不安になるぐらい」

素人よりもひどくすらある過去話が今の彼の仕事ぶりからは想像できないのかりイ
ンが目を丸くする横で、アリサは当時の事を思い出しているのか遠い眼差しになりなが
ら一瞬噤んだ口を開く。

「でも、だからあの子のことを拒まずにすんだのかもしれないわね。また失敗して怪我
でもしちゃうんじゃないかつて心配になっちゃつて……手のかかる弟が出来た気分か
しら?」

「……弟?」

「そうよ、そうでもなくちやいきなり同じ年頃の男の子と傍で生活なんて身が持たない
わよ。シャロン——家に昔から居てくれてるメイドから紹介されたときなんて吃驚し
たんだから」

怒りを表すように頬を少し膨らませるアリサだったが、それは使用人に対して叱責す
るような態度とは程遠くそのシャロンというメイドとの親しい関係性を窺わせる。

可愛らしくすらあるむくれ顔について浮かべてしまいそうになった笑みを噛み殺しながらリインは納得したように頷いていた。

「なるほど、初めて二人と会った時から不思議には思ってたけど、アリサとルドルフはそういう仲だったんだな」

「学院に居る間ぐらいは気を遣わなくていいって言ってるんだけど、改める気が無いみたいで困っちゃうわよ——あら」

今では改善を諦めつつあるルドルフのかしこまりようを嘆いていたアリサが歩く道の先、駅前公園脇に居を構える商店の軒先で箒を手に立つ幼い少女と目が合ってしまった。

歩道に散った公園のライノの花びらを掃き集めていたらしい少女は二人に気づくとあつと声を漏らした。

「士官学院の——東門の方の寮に来られた生徒さん達ですよ、こんばんは！」

「こんばんは、そちらの商店のお子さんだったかしら、こんな時間までお店の手伝いなんで偉いわね」

「いえこのぐらい普通です。あ、私はティゼルっています、皆さんにはいつもご鼻屑にありがとうございます」

ルドルフが第三学生寮で消費する食品の買い出しに利用するそこ、ブランドン商店の

一人娘である少女、ティゼル。

そのにつこりと笑って丁寧にお辞儀までして見せるといふ年齢離れた成熟ぶりがアリサとリインを驚かせる。

「まだ小さいのにすっかりしてるな……俺はリイン、こちらこそよろしくお願いするよ」
「ふふふ、私はアリサ、これからお世話になると思うけどよろしくねティゼルちゃん」
「はい！ それにしても士官学院の学生さん達は貴族の方も多いそうですし、やっぱり今夜はパーティーでもされるんですか？」

少女の口から飛び出した心当たりのないその質問が二人に首を傾げさせた。

「……パーティー？」

「違うんですか？ いつもウチをご利用して下さってるお兄さんが今日は随分と食材を買い込んでらっしゃったので、てっきりそうだとばかり」

きよとんとしながらティゼルが続けた言葉に未だリインが頭の中に疑問符を浮かべる隣で、腕を組み考え込んでいたアリサがハッと目を見開き、次いで片手で頭を抱えるようにしながらうなだれた。

「アリサ、どうかしたのか？」

嫌なことでも思い出したかのような仕草を心配するリインに、アリサは硬い動きで暗い顔を向ける。

「……リイン、あなたグラウンドでルデイになんて言ったか覚えてるかしら」

「え？ グラウンドでって、何かおかしいこと言ったか？」

「そう……あのねリイン、あの子のことについて一つ言っておかなくちやいけないことがあったわ」

そのただならぬ霧囲気にゴクリと息を呑むリインを見据え、アリサは沈痛な面持ちを浮かべながらゆっくりと告げた。

「ルデイはね——たまに冗談が通じないのよ」

「……………え？」

それがどういう意味を持っているのか、その時は理解できずにいたリインだったが、寮に帰り着き食堂の扉を開いた先。

テーブルに所狭しと並べられた豪華な料理の数々と何とも言えない表情で説明を求めようなⅦ組の面々に迎えられ言葉を失くしたところでようやく事の次第を悟るのだった。

『ご期待に沿えるよう全力を尽くします』

軽い気持ちで口にした頼みに答えたルドルフの言葉が嘘偽りないものだったことに。

「お帰りなさいませ。どうぞでしよるかリン、力は尽くさせて頂いたつもりですが、至らないところがあればどうぞ気兼ねなく仰ってください」

「はは、は……そういう、ことだったのか」

いつものスマイルでそんな事を言つてのけるルドルフと集中する皆の視線にリンは胃が縮こまるような感覚を覚えながら乾いた笑いを漏らしてしまうのだった。

実技テスト【一】

自由行動日が明け三日目の水曜日、兼ねてより通達してあった実技テストの為にⅦ組の生徒達はグラウンドに集められていた。

それぞれ武装を携えて並んだメンバーの前に立ったサラは皆の準備が整ったことを確認し口を開く。

「それじゃあ予告通り実技テストを始めましょう、前もって言うておくけど——」

注意点としてサラが告げた事は単純に戦闘するだけでは高評価を望めないということだった。

『状況に応じた適切な行動』を取れるかを見る為のものであるという、少なくともこのテストにおいてはその結果よりも内容が重要であるらしい。

「単純な力押しじゃ評価に結びつかないわけね」

アリスが呟いた通りどれだけ早く勝利しようともそれだけでは良い成績は修められないだろう。

どういった行動がその『適切な行動』に結びつくと言うのかⅦ組の面々が思索する中サラによりまずリイン、エリオット、ガイウスの三人の名が呼ばれた。

全員まとめてテストに臨むわけではなくいくつかのグループに分け評価されるらしい。

オリエンテーリングの時のような全員による連携は偶然の賜物であり現段階で望めないことは学院側も理解しているのだろう。

どういった試験内容となるのか気を引き締める皆の前で、サラが指を鳴らす。

すると正面の空間が一瞬歪み次の瞬間には何もなかった筈のそこに奇妙な物体が出現し生徒達を驚かせる。

目の前で滞空するそれは金属の柱に金属鎧の上半分を被せたような独特の形をしており、呼び表すなら機械仕掛けの操り人形——傀儡といった見た目だろうか。

「そいつは作り物の動くカカシ、みたいなものよ。実技テストではこいつを相手に戦ってもらおうわ。」

そこそこ強めに設定してるけど決して勝てない相手じゃないわ——ARCSの戦術リンクを駆使すれば尚の事ね」

その言葉でこの実技テストの内容を理解した皆が納得した様子を見せ、リインらはそれぞれ武器を構え臨戦態勢を取っていた。

固唾を呑み残る七組メンバーが見守る中、サラがテスト開始の合図を言い放つ。

「——それでは、始め！」

先日旧校舎で戦術リンクを意識しながら共に戦った経験が生きたのかリインら三人はさほど手こずることもなく傀儡、戦術殻と名付けられているらしいものを戦闘不能に追い込んでいた。

鎧われている肩周りを除けば人よりも小さいぐらいの相手に息を合わせ攻撃を打ち込む見事な連携を見せた三人にはサラも上機嫌で拍手を送っていた。

続けて呼ばれたアリサ、ラウラ、エマの三人もほぼ全身金属製で硬い上にアーツまで行使する機能が搭載されているらしい戦術殻にリインらと比べ多少苦戦を強いられていたが大きな怪我もなく勝利を収めている。

そして――

「次、ユーシス、マキアス、ルドルフ、フィー」

最後のグループとなる四名だったがその内の二人は名を呼ばれた瞬間表情に苦いものを浮かべていた。

言うまでも無くそれは今もって関係性が最悪と言えるユーシス、マキアスの二人でそんな間柄であるだけに彼らが連携した行動など取れるかどうかすら疑わしい。

「くっ……サラ教官、この人選には——」

「異議は却下、Ⅶ組に参加した以上この程度のことには文句つけてもらおうわけにはいかないわよ。大人しく前になさい」

マキアスが何を言わんとしているのかはその場の誰もが察していたが口にするよりも早くサラによつて拒まれてしまう。

納得いかないとはばかりに歯噛みするマキアスだったが抗議が意味を成さないことは理解したらしく、首を振ると大人しくサラの指示に従った。

「せいぜいつまらぬ事にこだわって足を引つ張らないようにしてもらいたいものだな」
「っ……ふんっ！ ならばそちらこそオリエンテーリングの時のように先走らないようにしてもらいたいものだ」

これから共闘しなければならぬというのに早速不穏な空気を漂わせ始めた二人に先にテストを終えた六人の心配が一層深まる。

同じグループとなった二人はたいして表情に変化は見えないものの、この編成が爆弾を抱えていることを理解してのことかフィーの方は普段から瞳に滲ませている気怠さの色合いが増しているようだった。

選考したサラですらも険悪な二人を前にため息を漏らしている。

「まったく……いくらテストといつても遊びじゃないのよ、油断すればタダじゃ済まな

いことは理解しておきなさい。

それじゃあ——始め！」

そうしてようやく新たに用意された戦術殻との戦闘が始まるも率先して前方へ出たユーシスにマキアスが苛立ちを見せる。

このメンバーの中で騎士剣を持つユーシスが最も前衛に向いていることは彼にも理解できることではあったのだが——

——まずは牽制するなり、やりようはあるだろうに！

マキアスの獲物は主として散弾を扱うショットガン、その性質上攻撃範囲は広くなつてしまいかうして味方に敵と接近されると同士打ちの危険性から迂闊に射撃することは出来なくなる。

弾を破壊力の高い榴弾として撃ち出す機能も彼の銃には搭載されているがその機能は通常の射撃よりも多くの導力を要し、導力で弾丸を撃ち出す導力銃にとっては多用できるものでもなかった。

止むを得ずマキアスは射角とタイミングを測るために戦術殻の側面へと駆け出す。

「ふっー」

一方先んじて交戦に入ったユーシスは縦長の体幹を振り子のように回した体当たりを身を反らして躲すと騎士剣による一撃を見舞った。

踏み込みながら繰り出された刺突は関節らしき部分を狙ったものだったが戦術殻が宙に浮いたまま身を揺らめかせたことでの的を外してしまふ。

しかし浮遊している分剣に乗せられた衝撃は余すことなく通り激しい擦過音を鳴らして金属体を打ち飛ばす。

すぐさま追い打とうとしたユーススだったが次の瞬間、機械故怯むことを知らない戦術殻は肩当のような部位の先から光刃が伸ばすと旋回しながら振るい付けた。

導力により生み出された刃は斬るというより熱量で以て灼く性質の代物で致命傷にはなりえないだろうことは予測されたが、実体の無い刃は受け太刀することが適わず舌打ちと共にユーススは跳び下がりその軌道上から逃れる。

その瞬間を見計らっていたように、小さな影が入れ替わる形で飛び込んだ。

拳銃とナイフの機能を併せ持つ銃剣を両手に構えた少女、フィーの接近に戦術殻は鋭く反応し光刃を出力したまま更に機体を旋回させる。

少女の俊敏な動きにも構造上勢いを殺すことなく振るうことが出来る刃は対応し今にも届こうとしていたが、フィーの前面に突如として展開した光壁がそれを阻んだ。

導力刃を受け止め霧散させたそれは後方からアーツとしては下位の術式にあたる防戦壁展開術式、《クレスト》を行使したルドルフによるものだった。

戦術殻の反応が間に合わない程ギリギリのタイミングでアーツが発動させることが

できたのは勿論戦術リンクによる疎通、ファイの敏捷な動きにも合わせる事が出来るという確信がルドルフからファイへARCUUSを通じて伝わったお陰だ。

リンらが先日旧校舎探索で戦術リンクの運用法を掴んだのと同じように、ルドルフは自身に与えられた黒耀^{クラウンダイヤ}石製のマスタークオーツの機能を把握していた。

マスタークオーツに限らずこの種のクオーツの一部はごく狭い範囲ではあるが特殊な導力場を発生させることができ、その空間内にもたらす効果は——時間の流れに対する干渉という破格の代物である。

強弱に関わらず他の導力場に接触してしまうだけで解けてしまうほど不安定な力場だが戦術オーブメント内にその効果、時の流れを遅滞させる作用を絞ったこのクオーツの恩恵は甚大だ。

周囲で一の時が流れる間に効果の発生した戦術オーブメント内ではそれ以上の時間が経過している、即ち相対的に加速している戦術オーブメントはそのアーツ駆動の時間を短縮することができるのだった。

元より駆動時間の短い下位のアーツならば今ルドルフが披露して見せたような高速発動も可能となり、戦術リンクの効果も相まってアーツによる連携行動が容易となる。

そうしてがら空きとなった懐へ踏み込んだファイはすれ違うように駆け抜けながら戦術殻の脇へ銃剣を閃かせ、同時に引き金を絞り銃弾を撃ち込む。

刻み撃たれた部位からスパークを放ち深刻なダメージを受けたのか戦術殻はその機体を大きくよろめかせた。

「マキアス」

「ああ！」

アーツを発動し原点化の始まったARCCUSを一瞥しルドルフが呼びかけると側面に回っていたマキアスがさかさず導力銃の引き金を絞る。

撃ち放たれた散弾により痛烈に穿たれた戦術殻は破壊には至らなかつたものの錐揉み回転しながら宙を舞う。

思いのほかルドルフらが順調にダメージを蓄積させていることに観戦するⅦ組メンバーらは緊張をいくらか和らげ、日頃から何かとフィーの事を気に掛けているらしいエマなどは胸を撫で下ろしていたのだが。

「！」

肩部を折りたたみ身を守るように縮こめた戦術殻の周囲に紋様が浮かぶサークル、アーツの術式陣が出現する。

先の二組の戦闘でその機能は全員に知られており、ルドルフら四人も心構えはしていた。

「——させるかつ！」

だが今回に限ってはそれこそが仇となってしまふ。

駆動を解除させるべく刺突の構えで踏み込んだユーシス、そして威力を強化した銃弾を発射しようとしたマキアス、二人の攻撃タイミングが声と共に重なってしまった。

「——マキアス、ストップ！」

「ユーシス！ 退いて下さい！」

「な……っ」

現状複数の相手と戦術リンクを繋げることではできないルドルフとファイは咄嗟に二人へリンクを結びながら警告を放つ。

あわや射線に飛び込もうとしていたユーシスとそれに気づかず銃撃しようとしていたマキアスは寸でのところで踏み止まった。

しかしそれは敵の前で動きを止めてしまうことでもある、追い詰められたように見せながら同士打ちを誘うような位置を取ることによって時間を稼ぐことに成功した戦術殻のアーツが発動する。

「くっ！」

ズシリと響く地鳴りと共に足元の大地が揺れ始めユーシスは立っていることが出来なくなり地に剣を突き立てながら膝をついてしまふ。

局地的な地震を引き起こすそのアーツにより足を止められたユーシスに、浮遊し地震の影響を受けない戦術殻が肩を向けた。

「くそっ、狙いが……」

マキアスの居る所まで届く地揺れの影響は弱いものだったが、不安定な足元に加え狙いの傍にユーシスがいることでまともに狙いがつけられずマキアスが歯噛みする。

逃れられないことを悟り覚悟を決めるユーシスだったが、その頭上を——影がよぎる。

「——!?!」

そこには持ち前の導力を感じ取る感性、そして駆動時間から行使された術式を読み取りアーツの発動に先んじて跳躍していたルドルフの姿があった。

その接近に反応した戦術殻が標的を切り替え、肩口から導力刃を出力させる。

「ふっ——」

しかし狙われたルドルフは空中で宙返りを打ち、振るわれた導力刃を躲すと同時に回転の勢いを乗せた踵を頭から叩き込んだ。

金属が破碎されたような甲高い音を響かせると戦術殻は異音を内から漏らしながら今度こそ偽装では無いだろう動きでふらふらと宙を漂う。

そこへ地揺れの収束と共に一瞬で背後まで忍び寄ったファイアが両手の銃剣を突き立

てた。

「終わり」

眩きと共に二つの銃口から放たれた銃弾が傷跡を抉り、正に糸の切れた操り人形のように動きを止めた戦術殻は地面へと墜落しその機能を停止した。

「これでテストは終了よ、あなた達の課題は——言わなくても分かるでしょうね」

目標を沈黙させ勝利を収めることが出来たわけだが、サラの指摘に試験内容に対して最悪の形で自分達の間の問題を露呈させたユース、マキアスの表情には苦い感情が浮かぶ。

そんな反応にため息を一つ漏らしサラが指を鳴らすと、出現したときと同様に転がっていた戦術殻が空間へ溶け込むように消失する。

「指摘事項はたつぷりあるけど、まずはこの後の事について説明させてもらおうかしら」
「この後……?」

「ええそう、Ⅶ組独自のカリキュラムとして最たるものである《特別実習》について、ね」
言葉に出したリインを始め、Ⅶ組の面々が気を引かれたその言葉について、足元に置いていた鞆から封筒の束を取り出しながら、意味深そうに微笑みながらサラはその内容を語り始めるのだった。

第三学生寮一階のエントランスに設置された応接用のソファアームに座り込んだサラはコートを放ると今しがた食堂で明日の仕込みに入っていたルドルフに用意させた脇詰め肉ヴルストをテーブルに置き、手にしたビール缶のプルタブを起こし小気味の良い音を鳴らして口を開ける。

早速ビールを一気に半分ほどまで呷り、病みつきとなつているのど越しにくしゃりとサラの表情が顔を緩んだ。

「あゝこの一杯の為に生きてるわね」

他の人間に見られたなら間違いなくおっさん臭い、などと評されるだろう台詞を口にしながらビール缶を置くサラ。

教官業務に加え実技テストの評価をまとめ日頃より疲れの溜まった体で味わうビールは心地良く、ついそんな独り言まで漏らしてしまふのだった。

カレーソースの乗ったばら切りのヴルストをフォークに一刺し口へ放りこみ、辛味と割けた皮の下から溢れ出した肉汁の程よく調和した旨みに舌鼓を打つ。

こうして晩酌のお供のレパートリーが増えたことはⅦ組担当教官を任じられてから増えた数少ない喜ばしい事だ。

先日はリインの冗談を真に受けて大層な食事を用意したものの、支給金を使い込むわけにはいかず自腹を切っていたことがバレてしまいアリサに大目玉を食らったらしいが。

丸投げしてしまっていた寮の管理について話し合った方が良さだろうかと思いつくべも、その程度のことは自分達で何とかしてしまいそうならいには生徒達が優秀であるせいかすぐにサラはその思索を打ち切つてビールをまた呷り、ふと階段を誰かが下りてくる気配に目を向ける。

「……サラ？」

「あら、まだ起きてたの」

姿を見せたのはⅦ組の中では最もサラと馴染みのあるフィーだった。

若干特殊な間柄ではあるものの入学以前から付き合いのあつた彼女のサラに対する態度には親し気とまで言わないものの気安い印象がある。

「キッチンにでも用事？」

「ん」

コクリと頷き淡々と答えるフィー。

クラスメイト達と比べ二つ年下だというのに表情の変化に乏しく年相応な幼気とは縁遠い。

「ホットミルク、たまにもらってる」

言い方から察して眠る前ルドルフにつくってもらっているということだろう。

物怖じせず使えるものは使うフィーはアリサを除きⅦ組メンバーの中で最も彼に順応しているのかもしれない。

「そう、アンタでも今日はそこそこ疲れたでしょうから、遅くならないうちに寝ときなさいよ」

「分かってる」

目の前の少女に対してそれは言うまでも無いという事をサラは十分に知っており社交辞令としてその言葉を口にしていた。

普段から瞼を眠たげ緩め實際暇があれば教室の机に突っ伏し眠っているフィーに生真面目なマキアスなどは眉を顰めているが、それは別に彼女が怠惰であるというわけではない。

必要な時に体を動かせるよういつでも体を休める為に身につけた技術、それが求められる環境で彼女は生きてきたのだ。

そんな彼女をこのⅦ組へ誘ったのは他でもないサラ自身、今回のようについ保護者のような言葉をかけてしまうこともある。

フィーの方もそんなやりとりには慣れてしまっていた筈だが、この日に限っては何故

か自分を見つめる瞳に何かを訴えかけるような色が浮かんでいることにサラは気づく。「なあに？ ひよつとして班分けのことについて不服でもあった？」

「別に」

口ではそう言いつつも指摘されるなりついと視線を背けた仕草からして昼の実技テスト後発表された特別実習、その班分けについて本心では多少なり不満があるのだろう。

今週末、Ⅶ組の生徒達は二つのグループに分かれ帝国内の指定地に赴き様々な課題が与えられることになっている。

リイン、エリオット、ルドルフ、アリサ、ラウラのA班。

ユース、マキアス、ガイウス、エマ、フィーのB班。

その課題を通して戦術リンクの練度を高めることがこの特別実習の主目的となるわけだが。

サラの脳裏によぎる、Ⅶ組設立の立役者である飄々とした人物の言葉。

『彼らに感じ取って欲しいのですよ、この帝国が抱える歪みを。そして——』

彼が密かにⅦ組に期待しているであろうもう一つの役割、それが果たされるかどうかは担当教官を任されたサラにもまだ分からない。

何しろこのクラスときたら頭を抱えたくなるような問題までも抱え込んでいるのだ

から。

その問題の一つ、ユーシスにマキアスと同じ班に回されてしまったのだからフィーの態度も無理からぬことだろう。

あの二人が行動を共にしてまともに実習課題をこなせるかどうか、懸念材料だけは十分だ。

「まあ初回はあたしもサポートには回るつもりよ、大変かもしれないけど出来れば委員長やガイウスを助けてあげなさい」

「……了解、じゃ」

VII組のクラス委員長となったエマとの仲はまんざらでもないらしくしつかりとした領きを返してフィーはダイニングへと入って行く。

それを見送り扉の奥から微かに聞こえてくる二人のやり取りを耳にしながらサラは今日の実技テストで目にしたものを思い起こしていた。

予想通り戦術リンクを繋ぐ気を全く見せなかった二人に対して懸念は抱いていたが、その失態をまるで動揺することなくフォローした彼についてもいささか気になるところである。

フィーのように特殊な環境に身を置いていた経験があるなら話は分からないでもないが、年頃の男子にしてはドライに過ぎる反応ではなかったかと。

まるで二人が連携を取ることなど期待してもいかなかったかのような。

冷静であることはむしろ評価すべき長所、悪意的な見方だとはサラも自覚している。

しかし時折彼が見せる——いや隠すのを忘れる、素の表情がその疑念を増量させるのだった。

あのあり得ない身のこなしも含めて、気にかけておくべきだとサラの前職で培った勘が告げていた。

「ま、ひとまずは様子見かしらね」

考えを重ねたところで解決しない問題はあるというもの。

今日のところは絶えない気苦労を紛らわそうと思案を打ち切り、新しく口を開けたビール缶に口をつけるのだった。

交易町ケルディック

「ええつとここにパスワードを打ち込んで……よし、開いた！」

「後は導力灯を交換するだけよ、はい」

座り込み街道灯の筐体を開いて作業にかかっているリインとアリサ。

魔獣避けの特殊な光を放つ街道灯が機能を停止していることで人の気配を察知した魔獣が周囲から集まり、二人に迫ろうとしていたが――

薄い翅を震わせて飛来した細長い体躯の虫型魔獣がラウラの一閃を受けて真つ二つに両断される。

別の方向から大きな巻殻を背負った粘体生物がにじり寄るも、ルドルフのアーツにより放たれた錐形の石弾に殻ごと穿たれ粉砕されてしまう。

一步後ろに立ったエリオットはそんな二人と戦術リンクを随時組み替え魔導杖の導力波による索敵能力を生かし魔獣が近づく暇を与えない。

三人に守られたリインとアリサはつつがなく故障していた導力灯の交換作業を終えるのだった。

「よし点いた。ありがとう皆、これで問題無いはずだ」

街道灯に光が灯ったことを確認しリインとアリサが背中を守ってくれてくれた皆へ振り返り、近づくと魔獣の気配が消えたことで三人も領き交わし警戒を解くのだった。

「これで依頼完了だね」

「ええ、戻ったらサムスさんに壊れてた導力灯を返しに行きましょう」

言いながらアリサが預かったケースへと交換した導力灯を収める。

そんな五人の周囲、街道の脇は収穫時を迎えた麦畑の稲穂に埋め尽くされ、あちこちで製粉用の穀物風車が風に吹かれ羽を回していた。

不意に辺りを強く薙いだ風に一面の麦穂がたなびく。

「——間近で見るとまたすごいわね」

「うむ、流石帝国有数の穀倉地帯なだけはあるな」

この度の特別実習でA班として分けられた五人は肥沃な大地に恵まれた実習地、クロイツェン州北部ケルディックの絵画めいた風景に目を奪われていた。

「つと。いけないいけない、まだ今日の依頼は残ってるんだからゆっくりもしてられないわね」

「そうだな、教区長さんに頼まれた薬の材料ももらえたり、真っ直ぐ街まで戻ろう」

遂に迎えた特別実習の初日、早朝から列車で彼ら五人はこの地へとやってきていた。

そうしてどんな課題が待っているのかと待ち構えていた皆に言い渡された内容は

様々な意味で予想を裏切るものだった。

「それにしても意外だったよ、こんな街の人のお手伝いみたいなことが課題だなんて」

「そうですね、ですがリインの言う通りこうして周辺を回ることでこの地の見識を深められる良い機会なのかもしれません」

「生徒会からの依頼の時も思ってたけど、ひよつとしたらそういう意図があるのかもしれないな」

街道を歩きながら話すのはそれぞれが課題として与えられている、今しがた終えた街道灯の交換のような依頼に抱いた気持ちだった。

「B班の方もこんな依頼を任されてるのかな」

「多分そうだろう。向こうの実習地のパルムはトリスタから遠いし、到着は夕方頃になるだろうけどな」

「正直、あのメンバーでちゃんと依頼をこなせるか心配ね……エマは大丈夫かしら」

朝にトリスタの駅で別れたB班のメンバー、特に集合しておきながら一言も言葉を交わそうとしないユースとマキアスのことを思い出しながらアリサが物憂げにクラスメイトへの心配を呟く。

彼らの事についてはアリサ以外の四人も心配するところではあったが、実習地が異なる以上手助けなど出来るはずも無い。

「気にし過ぎてもしょうがあるまい、我らは我らで与えられた課題をこなすことにしよう」

「そうだな、まずは残つてる課題を片付けていこう」

こうして初めてとなる特別実習の課題をA班の面々は手探りながらもこなしていくのだった。

オーブメント工房と教会で報告を済ませたA班の面々は明日まで予定されている実習でこの日宿泊することとなる駅前大通りの一角に居を構えた宿酒場、風見亭へと戻り女将であるマゴツト婦人の朗らかな笑みに迎えられた。

「お帰り学生さん達、休憩かい？」

「はい、あと一つ依頼が残っているんですが手配魔獣の討伐ということでしたから疲れを抜いておこうと皆で話しまして」

ラインが答えるとマゴツト婦人は口を丸くして驚きを見せる。

「あらあらそれは大変じゃないか。そうだ、それならウチの特製丸絞りジュースでも飲んでいきなよ、お代は気にしないでいいからさ」

「そんな、いいんですか？」

「構わないよ、サラちゃんにはアタシも昔世話になったことがあるからね、教え子のアンタ達にそれぐらいしたってバチはあたらないさ、カウンターにでも座って待つといてくれ」

目じりに皺を浮かべた柔和な微笑みを見せながら婦人はカウンター奥の厨房へと向かって行つた。

若干の気後れを感じながらも今日会つたばかりの人物から受ける厚意を受け取ることにした五人がそれぞれカウンター席へ腰掛ける。

そしてケルディック到着からこの店に入るなりカウンター席へ陣取り、この地特産の地ビールをかつくくらい始めた教官、サラの変わらず酒杯を傾けている姿へと皆呆れ交じりの視線を向ける。

「サラ教官……まだ呑んでいらしたんですか？」

「まあね。次はいつ呑めるか分からないし、しつかりと堪能して行かないとね」

気にしていないのはルドルフぐらいなもので、ご機嫌な様子のサラに指摘したアリサだけでなくリインらも物言いたげな視線を送っている。

初回となる特別実習の補足説明の為と列車に乗り合わせてきた彼女だったが、今となつてはこちらの方が本命だったのではないかと疑いたくもなる姿だ。

士官学院の教官らしからぬ態度を改めさせるのをため息と共に諦めながらラウラが話題を切り替える。

「残る依頼は確か東街道の魔獣討伐だったな？」

「農家の人から出されてる依頼みたいだな、しっかりと準備を整えておく必要があると思うけど」

「うむ。——リイン、お互いに力を尽くすようにしましょう」

改まったその言葉に何か思うところがあるような気配を感じたリインだったが、じつと見つめてくるラウラの瞳の強さに思わず息を呑んでしまう。

「あ、ああ。心して行こう」

「……それにしても」

微細な緊張感を漂わせ始めた二人の空気を切り替えようとするように、エリオットがおもむろに口を開いた。

「街道の風景もすごかったけど、大市もすごく見所ありそうだったよね。後で時間があつたら皆で行ってみたい？」

「そうね、実習中ではあるけど、それぐらいなら構わないんじゃないかしら、教官もこんな有り様なぐらいだし」

その提案にはアリサもサラに流し目を送りながら肯定的な様子を見せた。

この町の中心部に場を設けられた大市には帝国各所の名産品や諸外国からの輸入品を扱う屋台が軒を並べ他の街では類を見ないような景観を織り成している。

交易地との二つ名を持つケルディックは諸外国との交通の要である東のクロスベル自治州と鉄道により通じていることから国内外からの物流が盛んになっており、それらの品々を目当てに大市には帝国各地から多くの観光客や買い付けの商人達が訪れてくる。

昼前にこの町の七耀教会に属する教区長の依頼で大市に軒を並べたある店へ薬の材料を貰いに立ち寄っただけでも建ち並ぶ屋台に並べられた商品の多様さには皆が圧倒されていた。

「む……そうだな、土産物程度なら買って行ってもよいか。珍しいぬいぐるみを扱っている店もあったようだし」

「ええ、いいんじゃないかしら。私もラクロス部の皆に何か買って行こうかな」

ラウラもまんざらでは無さそうな様子を示したことで密かにエリオットも口元を綻ばせる。

順調に課題がこなせていることもありA班の面々には確かな余裕があった。

「はいよ、お待ちどうさま」

そうしている内に厨房から戻って来たマゴット婦人が五人それぞれにグラスを配つ

ていく。

注がれた乳白色に透き通るジュースからは絞り立ての果実特有の甘い香りが立ち上っていた。

「頂きます。——わあ」

口をつけたアリサがその爽やかな甘味に思わず息を呑むと、その素直な反応にマゴツト婦人は嬉しそうに笑みを深めた。

「お嬢さんは都会の出身かい？ ウチは採れたての野菜を使った料理が自慢だからね、腕によりをかけたくから夕食は期待しとくれよ」

「はい、ありがとうございます」

人柄の良さが滲み出るようなその暖かな言葉にはすっかりとアリサらもほだされ、自然と皆が表情を緩められていた。

「確かにルーレではこの町ほど新鮮な素材は手に入りませんね、是非とも勉強させて頂きたいです」

「楽しみが増えちゃったね。あ、そうだマゴツトさん」

そこでふと西街道のある出来事を思い出したエリオットが質問を投げかける。

「ん？ どうしたんだい」

「僕達がさつきまで行つてた西街道の先に森みたいになつてるルナリア自然公園、つて

いうらしい場所があったんですけど。入口で管理人の人達に立入禁止だつて追い返されちゃったんです、あそこつて普段は開放されてないんですか？」

そう問ひ掛けられたマゴツト婦人が嘆くような顔になると共に、樽ジョッキを置いたサラが不審そうに目端を上げた。

「人、達？ おばちゃん、あそここの管理人つて確か」

「……そうだよ、あそこはジョンソンさんつていう男の人が一人で管理してた場所だったんだけどね。少し前にクビになつちまつたのさ」

「クビつて……何か問題でも起こつたんですか？」

「とんでもない、ジョンソンさんはあの公園の管理を生き甲斐だつて言うぐらい仕事熱心な人でね。急にクロイツェン州の役人がやってきてクビにされたつて話を聞いたときは皆どうしてつて思ったもんさ」

解雇された当人でなくとも憤りを感じる出来事であつたらしく、マゴツト婦人の説明には浅はかならない苛立ちが込もつていた。

「それ以来ジョンソンさんは自棄になつたのか酒浸りになつちまつてね……多分今日も町のどこかで呑み潰れてるんじゃないかねえ」

氣遣わし気な息を漏らすその姿に詳細な事情を知らないとはいえその管理人という男性に同情する気持ちがエリオツト達に湧いていた。

「それで代わりにどつから来たか分からないあんた達が見た若い連中が管理人になつたらしいんだけど、町にもそんなに姿を見せないし町の人の印象も良くは無だね。ただそれつきりどうしてか自然公園も封鎖されちゃつてるのさ。」

あそこはなかなか見応えのある所だから折角の機会に見学させてやれないのは申し訳ないんだけどね」

「そんな、この町の人が悪いわけじゃないですから、マゴットさんがそんなこと言う必要ありませんよ」

申し訳なさそうなマゴット婦人にエリオットが慌て出しリンらも一緒になつて止める横で、すっかりとそれまでの上機嫌な様子がなりを響めたサラが思考に耽つていたが、それを打ち切るように空になつたジョッキを置く。

「まあこれも——の内かしらね、おばちゃん、勘定いい?」

「おやもういいのかい?」

「ええ、この子たちは順調みたいだし、もう一組の教え子達がグダグダにならないうちにヘルプに行くことにするわ」

そう言つてサラは立ち上がると身支度を整えながら、ルドルフらへ顔を向け教訓めいた一つの言葉を残す。

「まあ初めての實習で慣れないこともあるでしょうけど、せいぜい悩んで、何をすべきか

自分達で考えてみなさい」

「サラ教官……？」

だらしない印象が目立つサラがその言葉を告げる際、時折見せる真剣な眼差しをしていたことでその言葉は皆の胸に奇妙な重みを伴って届くことになった。

大市の騒動

体内に七耀石を取り込み生態を変化、凶暴化した野生生物を総称し魔獣と呼び表し、元となった種族や七耀石を取り込んだ経緯などによりその種類は多岐に渡るが基本的にどの種も一部の例外を除き高い凶暴性を秘めている。

その中においても多量の七耀石を摂取し異常変化を遂げたもの、あるいは元となった生物自体が強靱な種族であった場合そんな魔獣が人に対してどれだけの脅威となるかは言うまでも無く、生活圏で発見されたならば即座に手配魔獣として指定され駆除依頼が出されることになる。

魔獣駆除は《遊撃士協会プレイサー》と呼ばれる民間の団体が請け負うことが多かったのだが、二年前に起こったとある事件がもととなって政府が進めた政策によって遊撃士協会は帝国におけるその規模を縮小されてしまっており、一部の地方を除き今では国内でめったにその姿を見ることは無い。

その為現在では国の治安維持組織である正規軍、そして四大名門が収める四つの州では準正規軍と言える役割を担う領邦軍がその任に当たっていた。

士官学院生への課題として今日既にこなした二つの依頼に比べればまっとうなもの

と言えたが、それだけ危険な仕事ということでもある。

依頼者である東街道の農家から詳細を聞きルドルフ達が向かった街道から少し外れた高台には目標となる魔獣の姿があった。

つるりとした外皮の爬虫類のような風貌をしておりながら二本の足で立ち、何より人の倍近く、全長にして三アージュ以上にまでまで膨らんだ巨大な体躯には並の人間なら圧倒されてしまうだろう。

かすめただけでも手痛いどころでは済みそうにない、振りつけられた尾による一撃を跳び下がり回避したリインは着地と同時に膝を曲げ溜めをつくると手配魔獣、《スケイリーダイナ》へと踏み込んでいた。

すれ違い様、鞘に納めていた太刀を抜刀しながら斬りつけ次の瞬間には呻かせた蜥獣の背後へと離脱していたが、得られた手応えの硬さにリインは表情を固くする。

分厚い外皮に加えその下の見た目相応に異常発達していた筋肉に阻まれ思うように刃を立たせることができなかつたのだ。

とはいえ浅くは無い傷を刻まれたスケイリーダイナは怒りを表すように鋸のような歯が並んだ顎を開きけたたましく鳴き散らすとリインへ振り返り襲いかからんとする。

だが横合いから飛来した矢がその横腹へ突き刺さり、矢の纏っていた炎に焼き焦がされる苦しみに呻きを漏らした大蜥蜴はその矢を放ったアリサへと狙いを変え駆け出す。

しかしその疾走が十分に加速しきらない内にすぐさま間へと割って入ったルドルフが導力盾を振るい、鼻先へ叩き付けたことによつて勢いを削がれた蜥獣の足が地を削りながら止まる。

攻撃本能のままに目の前の敵へ食らいつこうとしたスケイリーダイナだったが、一撃を浴びせかけたルドルフはすぐさま後方へ低く跳躍し離れており空を切る。

体格こそ屈強だが、知性まではたいして発達していないらしい視野の狭いこの手配魔獣が気づくことの無かったARCUUSの駆動を終えたエリオットがアーツを解き放つた。

フロストエッジ、ガーゴイルとの戦いでルドルフも使用した対象を取り巻くように現れる三つの白い霧から放たれた氷刃が蜥獣へと突き刺さり、氷刃から放出される冷気が魔獣の動きを鈍らせる。

「今よラウラー！」

「——うむ」

両手剣を構えたラウラーが応じる。

クラスを問わず新入生の中で最強と目されている彼女の剣ならば目の前の魔獣に対してでも十分に通用するだろうと皆が考えていたが次の瞬間、彼女が見せた技はそんな予想を超えていた。

深い呼吸を挟み、キツと目を見開き馴染みのないアリサやエリオットをして肌を感じさせるほどの気を迸らせるラウラ。

剣へと流し込んだその気を白く輝く、刀身を越えて伸びる刃へと変じさせると、大気を揺るがすような気の奔流に怯む姿を見せていた蜥獣の懐へラウラは飛び込んだ。

袈裟懸けに振るわれた剣は魔獣の剛皮を容易く斬り裂き、その身を深々と抉る。

一撃に止まらず足を踏み込みながら即座に切り返された光刃が更に深い傷を刻み込み、流れるような足捌きで身を回転させたラウラの剣は更に勢いを増し――

「はああっ!」

二撃目の傷へ氣勢と共に繰り出された横薙ぎの一閃は威力のあまりスケイリーダイナの厚い筋肉に守られた胴をも両断し、息の根ごと完全に断ち切った。

高台に一瞬の静寂が訪れ、吹き飛ばされた手配魔獣の上半身が地に落ちる音にラウラ以外のメンバーがようやくハツとして我に返る。

「……すごいわね、まさかこんなにあっさり倒しちゃうなんて」

「うーん……リインも一年最強はラウラだろうなんて言ってたけど、これは納得しちゃうね」

見せつけられた実力をあらためて認識したアリサやエリオットが興奮交じりに言葉を交わす中、圧倒的な戦技を披露したラウラは静かに血を拭った剣を剣帯に収めてい

た。

「流石ラウラだな、すごい技だったよ」

「……そなたにでも、この程度なら出来たのではないか？」

「え？」

ラウラを労おうとしたリインだったが、思いがけない反応を返されてしまいその目をしばたかせてしまう。

少しの間そんなリインの顔を見つめていたラウラだったが、やがて目を反らしたその顔にはどこか浮かない表情があった。

「すまぬ、勝手な事を言った、忘れてくれ」

「ラウラ……」

風見亭で休憩をとった時から何か思うところがあるような素振りを見せているラウラの事はリインだけでなく他のメンバーも気にしていたが、その理由が分からず密かに戸惑っているのだった。

「とにかく、退治できたことを報告に行きましょう。きっと喜んでもらえるわ」

「はい、ですがアリサ、少々お時間を下さい。他の魔獣を呼び寄せてしまう可能性もありますので七耀石を回収しておきます」

「そうね……任せてもいい？」

「勿論です、なるべく手短に済ませますので皆さん少しばかりお待ちください」

魔獣の死骸から七耀石を取り出すの慣れていないアリサに微笑みながら応えたルドルフはスケイリーダイナの死骸へと歩み寄る。

その死骸に残る導力の反応を探りながら、ルドルフは斬り刻まれ凄惨な様相を呈した有様に『彼女らしくない』という思いを抱いていた。

ラウラは卓越した剣の腕の持ち主だが、相手が魔獣であったとしても敵をいたぶるような気性は持ち合わせていない。

そんな彼女にしては今回やり過ぎとも思える程の技を見舞ったのにはどういう思惑があるのか、意図が掴めずともそれが誰に対して向けられているのかはルドルフにも分かっている。

出来ればリインの手助けをしたいところですが……手の打ちようが見つかりませんね。

入学から何かと助けられているとリインのことを意識しているルドルフはどうやらまた厄介事を抱え込んでしまいそうになっているらしい彼のことを気にかげながらも、その場で有効な手立てを思いつくことはできなかった。

手配魔獣の討伐を終えたことで初日の依頼を全て完了させた五人はこの日の残り時間をどうするか相談しながらケルディックへと戻ってきていた。

「今日のレポートをまとめないといけませんからあまり遅くならないようにした方がいいでしょう」

「そうだね、なんだかんだ大分疲れちゃったし、僕なんてベッドに倒れ込んだらそのまま寝ちゃいそうだよ」

「よく考えたら一日で相当歩き回らされたものね。……でもあなた達、くれぐれも不埒な真似はするんじゃないわよ、特にリイン——？」

この日宿泊する予定の部屋に男女同室をあてがわれてしまったことを気にしていたアリサは男子三名へ、特にオリエンテーリングのトラブルは解決したはずだがリインに名指しで釘を刺す。

しかしリインはその声に応えず、真剣な顔色を浮かべ視線を前方、町の中央広場の方へと向けていた。

大市と駅とに挟まれている広場は元より人通りの多い場所ではあるが、集まった人達がざわつきながら大市の方を見ているのにリイン以外のメンバーも何かが起こっている気配を感じとる。

「大市で何かあったみたいだな」

「行ってみましょう」

頷き交わしルドルフ達は足早に広場へと向かう。

注目を集めているのはやはり大市であるらしく、皆で入場口から市場を見やると問題の中心らしきものがすぐに視界に入った。

大声で怒鳴り合う二人の男、一方は薄手のシャツに皮のベストを羽織った地元民らしい身なりだったがもう一方は仕立ての良いスーツに身を包んでおり都会の出身者らしい出で立ちだ。

「ふざけるな！　ちゃんとシヨバ代だって払ってるんだ、ここは俺の店の場所だぞー」

「それはこちらの台詞だ！　許可証だって持っている、そちらが嘘を吐いているに決まっているだろうー！」

どちらからともなく相手の襟首にまで掴みかかり、互いに商人であるらしい二人は今にも殴り合いに及びかねない一触即発の雰囲気醸し出していた。

野放しには出来ずラインとラウラが駆け走り二人の男を引き剥がしにかかる。

「な……何だ君達は!?!」

あつさりと腕を押さえ込まれてしまい泡を食う男達。

「自分達はツールズ士官学院の者達です」

「正式な軍属ではないといえ公共の場での乱闘騒ぎを見過ごすわけにはいかぬな」
「士官学院つて……軍人のタマゴかよ……」

二人の商人は年若いリイン達に取り押さえられはじめはむきになったような態度を見せていたが、身分を明かされると流石に抵抗しなくなる。

しかしそれで男達の気が収まるわけではなく、険悪そうな視線を応酬させ続けている二人にルドルフ達が事情を聞こうとしていた矢先。

「やれやれ、何をやっておるんじや」

その声に道を開けるように野次馬の人垣が割れ、姿を見せた礼服に身を包んでいる品の良さそうな老人に周囲の人々が注目していた。

「元締め……」

言い争っていた二人の内、地元の商人らしい青年が呟いた言葉から老人がこの大市の責任者であるらしいことを察したルドルフ達は視線を交わし周囲の反応に納得する。

騒ぎを聞きつけ場を収めるためにやってきたのだろう、止めこしたものの部外者の自分達には難しそうな商人達の問題をとりなすことが出来そうな人物が現れたことに皆安堵していた。

元締めの老人はそんなルドルフ達に目を留めると得心が行ったように頷く仕草を見せる。

「どうやらお前さん達に助けられましたよ、彼らには儂の方から事情を聞いておくが礼を言わせてほしい」

「いえ、自分達はただ止めただけです、お気になさらないで下さい」

そんなリインの返事に元締めは相好を崩し、威厳を感じさせていたその眼差しが柔らかに緩む。

「若いのに謙虚なことじゃの、しかし別にお前さんたちからも話を聞いておきたい、どうかこの後時間を取らせてもらえんか？ ついでにお茶の一杯でもご馳走させてもらおう」

丁寧な物腰で持ち掛けられた提案にリインが確認を取るように他のメンバーへ顔を向けるが、断る理由も無いため皆揃って頷きを返し、Ⅶ組の面々はこの日の夕方、ケルディック大市の元締め——オットー氏の家に招かれることになった。

大市での揉め事、その発端となったのはあの二人の商人が出店しようとしていた場所が重なってしまったことらしい。

通りから市場へ入ってすぐ正面の最も目立つ集客の見込めそうな位置であっただけ

に彼らが頑なに譲らないのも無理はなく、そもそも同じ場所の出店許可が下りていたことと自体がおかしいことだったのだが二人が持っていた許可証はどちらも正式な本物だったのだ。

加えてケルディックではこの二月程の間、売上税が大幅に上昇し少しでも利益を上げたい商人達の気が立っていたことも暴力沙汰に発展しかけたことに拍車をかけていたという。

増税による商人達の苛立ちと出店管理の下手際が重なり起こった災難——にも思えたがオットー元締めの話によればそうとばかりも思えない事情がこの町にはあった。

「あまり他家のやり方に口を挟むような真似はしたくないが、此度の件についてはいささか問題があると言わざるを得ないな」

「ええ、いくら四大名門といってもやっていい事と悪い事がある、はずなのにね……」

その夜、風見亭の客室でレポートをまとめ終えたルドルフ達の話題に上がるのもやはりその事についてだった。

「うん……ユーシスの実家の話って考えるとちよつと気が咎めるけど、やっぱりおかしいよね」

クラスメイトであるユーシスの実家であるアルバレア公爵家を悪し様に言うのは皆にとつて憚られることだったが、それをおしてもかの家の振る舞いは度が過ぎると言え

るものだった。

そもそも出店許可は領から出されるものであり、今回不手際があつたのはクロイツェン州を治めるアルバレア家ということになるのだが、その不手際にも不審な点が多い。

商人達に過剰な負担を強いる増税にはオットー元締めも懸念を抱いており度々陳情に赴いてはいるが成果は芳しくない、どこるか陳情を続けるならば大市の治安維持活動について保証しかねる、との内容をこの地方を任されている領邦軍隊長から仄めかされたという。

実際今回起こつたような騒動は本来なら領邦軍が仲裁するのが定石であるはずだったが、ケルデイツク内に詰所が存在しながら兵士の一人も駆けつける気配は無かつたことから疑いの余地はないものと思われる。

杜撰な出店手続きの処理も相まり、それは陳情を取り消さなければ問題が起これると知らしめるためにあえて見過ごしていたようにすら思えてくる。

公爵家がそこまでして税収を上げようとする理由は定かではなかつたが、いずれにしても横暴と表現して差し支えない。

「この町の方々に気の毒ではありませんが、ユーシスさんがこのようなやり方を肯定されると思えませんね」

「そうだ、ユーシスにこの事を教えたらなんとかしてもらえないかな？」

「難しいだろうな、貴族の家柄なら当主の決定は絶対だ」

ラインが首を振つて示すと閃いたとばかりに瞳を輝かせていたエリオットもしゆんとうなだれてしまう。

「無理かあ……どうにかしたいって思っちゃうけどね」

「……なら明日は実習の合間になるべく大市の様子を見ておくようにするか？　今回みたいにトラブルが起こりそうな時役に立てるかもしれない」

「そうか、それぐらいなら僕達にでも出来るよね。せめて、それぐらいなら——」

「うむ、問題は無いだろう」

「いいと思うわ、女将さんにもお世話になってることだし少しでも手助けしたいもの」

一日しか滞在していないもののこのケルディックに対して好意的な印象を抱いているA班の皆異論は無く、明日の方針が定まっていく。

——それが明日の実習内容に大きな影響を与えるとはこの時誰も予想すらしていなかったが。

A班始動

うつすらと瞼を開けたエリオットがカーテンの隙間から差し込む朝日の眩しさに目を細めながら身を起こすと、既に起床していたルドルフとアリサがテーブルで自分達の武装に仕込まれている導力器を調整している姿に気づく。

「……おはようルドルフ、アリサ、二人とも早起きだね」

「おはようございませうエリオット」

「もしかして起こしちゃったかしら」

導力器を整備する音で起こしてしまっただかとアリサが申し訳なきような顔をするが、エリオットはにこやかに首を振る。

「ううん、全然気にならないぐらいだと思ふよ。普段もこのぐらいの時間に起きてるから気にしないで」

そう言つてエリオットはうん、と伸びをしてからベッドから降りる。

丁度整備を終える頃だったらしくルドルフもアリサも工具を片付けると装備をケースへとしまい戻す。

「あれ？ リインとラウラはどうしたのかな？」

「二人とも素振りに行かれたようです、ラウラさんは今しがたお出になったところですが」

早朝から二人と顔を合わせているルドルフの答えにエリオットは口を丸くして納得したような声を漏らしていた。

「そっか、実習先でも鍛錬を欠かさないなんて、やっぱりあの二人はなんていうか……すごいね」

「まあ、目立ってるのはラウラだけどリインも相当なものよね」

VII組にはユーシスやガイウスのように確かな実力を持ったメンバーは他にも居るが、帝国では珍しい得物を扱っていることも相まってリインの剣術の冴えぶりは皆が知っている。

あくまでこの場の三人のように武術の薫陶を受けていない者の視点からすればの話であるのかもしれないが、彼の腕前が非凡なものであることには違いなかった。

「朝食までは少し時間もありますし、食堂から飲み物でも頂いてきましようか。コーヒー、いえ水かミルクがいいでしょうか。二人ともいかがなさいますか？」

「ん……そうですね、ここはミルクも新鮮みたいだしそっちでお願いしようかしら」

「僕もミルクがいいかな……ここでもルドルフにこんなことお願いするのはちよつと申し訳ないんだけど」

「お氣になさらないで下さい、好きでやらせて頂いて頂くことですから」

椅子から立つといつもの笑みを浮かべルドルフは部屋を出る。

客室のある二階の廊下から見渡せる吹き抜けになった一回の喫食スペースには早朝なこともあり人気が無かつたせいか——その話し声はルドルフの耳にまでよく届いた。

「リイン、そなた……何故本氣を出さない？」

——この声は、ラウラさん？

聞き間違えようもないその声が含まれていた緊張感にルドルフはつい足を止めてしまふ。

素振りから戻つて来たリインと鉢合せたのだろう、階下から聞こえた話し声に廊下の手すりから顔を覗かせると、階段傍で向き合つた二人の姿が見える。

「本氣つて、どういふことだ？」

「あまり人の事情を詮索するような真似は好まぬ故、尋ねるか悩んでいたのだが……そなたの劍、八葉一刀流に間違いないな？」

以前にリインからも聞いた流派の名がラウラの口から語られ、微かに驚いているような氣配がリインの背からは伝わって来た。

《劍仙》ユン・カーファイが興した東方劍術の集大成とも言ふべき流派。皆伝に至つた者は理ことわりに通ずる達人として《劍聖》と呼ばれるという」

リインは大したことのようには語らなかつたが、ラウラの話しぶりからするとその流派は特別視されるだけの理由がある謂れを持つらしい。

彼女がリインのことを気にかけていたのはどうやらその事に端を発しているようだ。

「……父に言われていたのだ、そなたが剣の道を志すならばいずれ八葉の者と出会うだろう、と」

「《光の剣匠》が？ はは……それは光栄というか、恐れ多いというか」

帝国最強と呼ばれる父からそんな言葉を授かつていたこともあり、彼女はリインが本来の実力を隠しているのではないかと勘繰っていたのだろう。

苦笑を浮かべるリインだったが真っ直ぐに見つめてくるラウラの強い眼差し、そこに込められた訴えを感じ取り顔つきを神妙なものにすする。

「俺は……ただの初伝どまりさ、確かに一時期ユン老師に師事したことはあるけど——
剣の道に限界を感じてその老師からも修行を打ち切られた身だ」

「……え？」

そんな答えが返ってくるとは予想もしていなかったのか、ラウラは目を丸くして絶句していた。

「だから手を抜いているってわけじゃないんだ。八葉の名を汚しているのは重々承知しているけど……これが俺の限界だ、誤解させてしまったならすまない」

申し訳なきようにリインが謝りの言葉を口にする、ラウラは目を伏せると暫くの間瞑目するように瞳を閉じる。

いかなる思案を巡らせたのか、やがて顔を上げたラウラの瞳には責めるような色は浮かんでいないものの、それまでと比べどこか精彩に欠けていた。

「いや、私に謝る必要は無い。それはそなた自身の——」

「大変だ！ 女将さん！」

その時、風見亭の入り口扉が大きな音と共に開かれ息を切らせた町の男性が駆け込んできた。

只事ではないその様子にリイン達の意識が逸れ、大声で呼ばれた朝の仕込みにかかつていた女将マゴツトが店の奥から姿を見せる。

「どうしたんだいこんな朝から」

「大市で事件だ、昨日一悶着あった二人の屋台が滅茶苦茶に壊されちまってたらしい、おかげで今広場はひどい騒ぎになってるよ、あれじゃあ今日は大市が開けるかどうかもおからんね」

男性の口から語られた内容はマゴツト婦人だけでなく、居合わせたリイン、ラウラ、ルドルフでさえも無視できない、Ⅶ組A班二日目となる特別実習に波乱の予感をもたらすものだった。

「よくも私の屋台を滅茶苦茶にしてくれたなこの田舎商人め！」

「何を言つてやがる帝都の成金が！ そつちこそ場所を独り占めにしようとしたんだろ
うが！」

大市に響き渡る男達の怒鳴り声、間に入ったオットー元締め仲裁空しく、二人の商人は怒りは鎮まるところか怒声の応酬につれ高まっていく一方。

駆けつけたルドルフ達が一目見て分かるほどに惨状は明らかだった。

昨日の出店場所を巡る騒動は二人の商人が週毎に店の位置を交代するということで落ち着いたものの、代わりとなる空いていた場所は大市でも奥まった位置にあり、本来の大市へ入つてすぐ正面という好条件の出店位置からすれば不満を抱かざるを得ない場所だった。

それでも元締めの説得により二人は条件を承諾したのだが、今日の前にある帝都出身の商人の屋台は見るも無残に破壊され、用意されていた商品に至つては影も形も残っていない。

一夜の内に屋台を破壊された上商品までもが盗まれてしまつていたのだという、それ

も二人の口ぶりから分かるように被害は一方だけでなく、二人の商人の屋台で同時に発生していた。

仕入れた商品までもが盗まれたとあつては商人らの被害は計り知れず、怒りの程は昨日の比ではないことを理解しながらも、言い争いが暴力沙汰に発展してしまうのただ見過ごすわけにもいかず仲裁に入ろうとしたルドルフ達だったが。

「そこまでだ」

語気鋭いその声と共に現れた青い制服に身を包む一団に集まった野次馬達が慌てて道を開ける。

「え？ あれって……」

「領邦軍、だな」

整然と並び歩みを進めてくる集団、領邦軍の威圧感には言い争っていた商人達も流石に萎縮し動きを止めていた。

集団の戦闘に立つ、隊長格であることを示す長衣を羽織った壮年の男は商人達をじろりと見回すと間に入っていたオットー元締めに視線を移す。

「老人、あなたはこの大市の元締めであつたはずだな。この騒ぎはどういうことか、説明願おうか」

「う、うむ……それがですな……」

戸惑う様子を見せながらもオットー元締めは領邦軍隊長へ騒動の詳細を昨日あった出来事も含めて説明していく。

その光景を見ていたルドルフ達は争いが一応収まったことに安堵しながらも、違和感を感じ取ったのは皆同じであるらしく顔を見合わせていた。

「この町の領邦軍つて、大市の問題に不干渉を貫いてるつて話だったわよね？」

「それなのに今朝に限ってどうしたんだろ？」

アリスとエリオットが皆の認識を確認していると、聴取を終えた領邦軍の隊長は納得が行ったとばかりに頷いて見せ背後の部下達へ向けて指示を告げる。

「なるほどな、ならば話は簡単だ。二人とも引つ立てろ」

「ハッ！」

商人達を捕えるよう命じた隊長とその命令に応える兵士達の淀みない様に呆気にとられた商人達が一步遅れて事態を呑み込み驚愕する。

「ど、どういうことですかそれは!？」

「どういうこともなからう、いがみあう二人が同時に同じ事件を起こした——そう考えれば辻褄は合う」

つまりは商人達が互いに屋台を壊し、商品を盗み合ったのだらうという。

動機こそ有り得たとしても彼らが同時にそんな事件を起こし、しかも互いに今朝まで

気づかなかつたなどあまりにも破綻した論理と言えるが、隊長は冷徹な面持ちを微塵も揺らがさずそう断定してしまつた。

「お、お待ち下さい。調査もしない内からそれはあまりにも決めつけが過ぎるのでは!」
「往來で連日喧嘩を始めようとするような者達だ、その程度しでかしてもおかしくは無
かろう。いずれにしても領邦軍にはこのような些事に手間を割く余裕など無い。

——このまま騒ぎを続けるのならばそのように処理させてもらうまでだ」

言いすぎるオットー元締めは領邦軍隊長がそう告げたことで言外に言わんとしてい
ることに元締め達だけでなくルドルフ達もまた氣付きハツとさせられる。

『騒ぎを続けるのならば』、要するところ逮捕されたくなければ事件を無かつたことに
しろと隊長は言っているのだ。

商人二人はその表情にはつきりと苦澁を浮かべていたが、やがて全てを諦めたように
がつくりとうなだれてしまう。

それを承諾と取つた隊長は尊大な態度を隠そうともせず鼻を鳴らした。

「フン、それでいい。我々も余計な仕事を増やしたくはない。それではこれで失礼させ
てもらふ、今後はあまりトラブルを起こさないよう氣をつけたまえ」

話は終わったとばかりに隊長は踵を返すとやってきた時同様乱れなく行進する兵達
を引き連れ大市から去つていつてしまつた。

何の解決にもなっていない領邦軍の対応に気落ちした様子を見せていたオットー元締めだが、いち早く気を入れ替えると打ちひしがれた様子の商人達に呼びかける。

「色々と腑に落ちんじやろうが、お前さん達も一度頭を冷やすべきじゃ、辛い気持ちは分かるが……殴り合ったところで店は戻らん。その前にやるべきことはいくらでもある」

元締めの言葉に争う気力を失くしてしまつたらしい商人二人は悄然としながらも同意する姿勢を見せ、それ以上事を構える意思は無いようだった。

「大市を開くためにまず壊れた屋台を片付けねばならん、すまぬが皆も手伝ってくれ」

集まつた町人や他の商人達へオットー元締めが呼び掛け、破壊された屋台の片付けが始まる。

普段通り——とまではいかないものの大市には落ち着きが戻り始めていたが、ルドルフ達は目にした領邦軍の対応の杜撰さを嘆かずにはいられなかつた。

「あれが領邦軍のやり方というわけか」

「いくらなんでも、こんなにあんまりだよ」

非難を口にこそしてこそいないが、険しい顔つきで領邦軍の去つた方を見つめていたラウラが彼らにどんな感情を抱いたのかは聞かずとも分かるだろう。

エリオットの素直な感想は領邦軍以外の誰しも思うところだつただろうが、州を治め

る公爵家からこの町の犯罪を取り締まる権利を与えられている彼らに表立って反抗できざる者も居なかつた。

「いいのかしら、このまま見過ごしちやつて」

「アリサ？」

ぼつりとアリサが漏らした言葉に、他のメンバーの目が集まる。

一刻も早い大市再開の為片付け作業に追われる町の人々や氣力を失くしている当事者の商人を見ながら、じつと考え込むようにしていた彼女だったがやがて皆に振り返つたその目には強い意思が込められていた。

「何か私達に出来ることはないかしら？」

「それは……私達でこの事件の真犯人を見つけようということか？」

「そこまでのことが出来るか、分からないわ……でも、こんな理不尽なことが目の前であつてるのに、黙つて見てるなんて出来ない」

言い出したアリサ自身どうしたいのか、具体的に思い描けているわけではないらしい。

「で、でも、士官学院生といつても素人の僕らにそんなことが出来るのかな？」

エリオットが口にしたように、軍人のタマゴと言える彼らではあつたが今はまだ犯罪捜査の訓練を受けているわけでもない。

そんな自分達に果たしてどれだけのことができるのか、懸念が湧くのは当然だったが。

「いや——アリスの言う通りかもしれない」

リインが発した言葉は彼女の意思を肯定するものだった。

「リイン？」

「サラ教官は言っていた。せいぜい悩んで自分達でどうすべきか考えてみる、つてさ」
皆がハツとしてサラがケルディックを離れる間際に残して行つた言葉を思い出す。

「課題だけじゃなく、それも特別実習の一環なのかもしれない」

「そう、か……うん、そうだよね」

「義を見てせざるは勇無きなり、との言葉もある。確かに我々がこの町の手助けをしない理由も無いな」

元から彼らにはケルディックの町の人々の力になりたいという意識が根付いている。

アリス、そしてリインの言葉を切つ掛けにその感情を抑える必要も無いのだと気づいたことでこの日のA班の行動方針は決まったも同然だった。

「リイン——ありがとう」

「礼を言われるようなことはしてないよ、切つ掛けをつくってくれたのはアリスだ」

「もう、あなたって人は……こんなことになっちゃったけどルデイも構わないかしら？」

無言を貫いていたルドルフにアリサが確認すると、彼女にとってほぼ予想されていた返事が恭しい頷きと共に返る。

「勿論、異論などございませぬ。全力でアリサのお手伝いをさせて頂きます」

「お手伝い、じゃないでしょう。まったく……あなただつて今は皆と同じ、仲間なのよ」
「……………」

アリサの言わんとするところが上手く理解できなかつたらしく、人前でなければ小首を傾げそうな顔になったルドルフにはラインまでつい苦笑してしまう。

「さ、俺達も片付けを手伝おう、調査するにしてもまずはそこからだ。オットーさんに何の相談もせずには調べて回るわけにもいかないだろうしな」

ラインによってその場を締めくくられA班のメンバーは気持ちを新たにしつつ、破壊された屋台の片付け作業に加わるのだった。

見えてくる真相

片付け作業が完了し大市が無事に再開したことを見届けたA班は早速行動を開始していた。

オットー元締めはこの町の問題にⅦ組の生徒達を巻き込んでしまうことにははじめは難色を示していたが、アリサらの説得もあつて最終的には調査活動を認めてくれる。

初回の特別実習ということに加え今夜にはトリスタへ戻る予定であることを考慮してか、この日の課題として用意されていた依頼も遺失物の搜索など僅かなもので、ルドルフ達は依頼を遂行しながら事件の事について町の人々に聞き込んで回っていた。

特に事件の当事者である二人の商人に直接話を聞いたことで得られた情報は大きく、帝都で流行りの品だという装飾品を扱っていたハインツ氏、地元の農産物や畜産物を加工した食品を扱っていたマルコ氏。

二人共に事件があつたと思われる夜中のアリバイが裏付けられたことで第三者の犯行であることは確実、しかしその第三者をどう探り当てればいいのか話し合った結果――

「我々も忙しいのでね、用件はなるべく手短に済ませたまえ」

領邦軍詰所、その正面でA班の面々は隊長を務める男と向かい合っていた。

そもそも元締めの話によるなら彼らは大市の問題に干渉せず、この頃は喧嘩の仲裁にやってくるなど無かつたという。

それなのに今朝はどうしてすぐに駆けつけろくに調査を行わないにしても強引な手法で場を収めたのか、不自然さを感じ取ったリインが指摘し、何らかの手掛かりが得られないかと考えたのだった。

領邦軍が話を聞きたいというルドルフらの求めに応じるだろうかという懸念はあったものの、士官学院の生徒として先達の現場を勉強する機会を貰いたいというラウラの口上にほだされる形でなんとかこうして隊長と顔を合わせることが出来ている。

士官学院の卒業生は正規軍、領邦軍問わず在籍している、先達としての自尊心もあり後輩としての立場からの申し出を無碍には出来なかつたというところだろうか。

こうして時間を取れている彼らが口にするほど多忙であるのか実際の所は定かではないが。

「では単刀直入にお聞きします。今朝の大市での事件について、領邦軍はあれ以上の調査を行わないおつもりですか？」

「何を言い出すかと思えば。良いかね？ 君達学生の目から見れば不自然に映ったかも

しれないが我々には我々の立場というものがある、事はそう単純な話ではないのだ」

皆を代表したリインの問いかけに隊長は分かり切ったことだと言わんばかりの態度で言葉を続ける。

「我々が仕えているのはこの地を治める領主、アルバレア公爵家だ。我々領邦軍が各地を維持するにあたって最も重要なものはその意向ということになる。

領邦軍に所属する以上貴族の命令は絶対、我々はその規則を遵守し守るべきものを判断しているだけなのだよ」

治安維持を差し置いてまで優先すべき公爵家の意向、それが何であるのかを隊長が口にするとはなかったが、察することは容易だった。

「つまり……この町からの増税取りやめの陳情が取り下げられない限り、大市の治安は守るべき対象ではないということですか？」

「フン……軍人であるならば与えられた職務を忠実に果たすことが当然なのだ。誰に何を吹き込まれたのか知らないが、好きに解釈したまえ」

全く悪びれる素振りも見せない隊長に苦い思いを抱きながら、あくまで事件を捜査する気は無いらしい彼らにそれ以上の追及が意味を成さないことをリイン達は悟る。

「用件はそれだけかね？　ならばそろそろお引き取り願わせてもらおうが——」

「あのっ！　僕からも一ついいですか？」

話を打ち切ろうとした隊長に声を上げたエリオットに他のメンバーも意外そうに目を向ける。

線が細く柔らかい彼の印象によるものか、隊長は気分を害した様子も無く余裕を見せつけるように促す。

「いいだろう、何かね？」

「盗まれた商品の行方だけでも領邦軍の方で調査することはできないんですか？ 被害者のマルコさんが扱っていた装飾品なんかは帝都で流行りの品だそうだし、足が付きやすいんじゃないかと思うんですけど」

そのエリオットの言葉にはむしろルドルフ達の方こそ違和感を覚えてしまう。

それを皆が表情に浮かべるよりも早く、隊長は訝し気に眉根を寄せつつ答えてしまった。

「何を言っている？ 装飾品を扱っていたのはハイנטツとかいう帝都の商人だろう、マルコというのは地元の出身者であつたはず……だ、が」

そこまで口にして失言を悟つたのか言葉尻を濁す隊長だったが既に遅い。

これまで標榜してきた立場からするなら明らかに知り得ていないはずの情報を彼は口走つてしまつていた。

「そ、そうでしたか？ 僕達もさつき聞いて回つてから初めて知つたことだったので。

領邦軍の方がそこまで調査されていたなんて」

「——我々にも独自の情報網があるということだ。あの件については既に終わった話、商品の行方などこちらの与り知る所ではない……話はこれで終わりだな？　これで失礼させてもらう」

明らかに狼狽した姿を見せながら強引に話を打ち切った隊長は詰所へと戻って行ってしまう。

しかしそんなことで自ら明かしてしまった事実は隠せるわけではない。

「エリオット、今のは……？」

「うん……おそらくこの事件には領邦軍が関わってる。それも少し前から計画されていたんだよ」

それは詰所の前で話すような内容でもなく、その場から離れながらA班の面々はエリオットによる最後の問いで明らかになった事実と共に情報を整理していく。

そもそもがおかしい状況だったのだ、不干渉を決めているとはいえ任されている領内で不審な事件が起こっているというのに領邦軍の態度には余裕があり過ぎる。

仮にも治安維持を任されているような組織が目の前で事件が起こり犯人が野放しになっっているような状況で落ち着いていられるだろうか、そこに気づいたエリオットは領邦軍の内情を探り当てたのだった。

今朝がた発覚した事件について領邦軍が密かに調査を進めるような時間があつたわけも無く、商品の方は全て持ち去られてしまっている。

ならば事前にどちらの商人がどのような商品を扱っていたのか知り得ていなければあのような発言は出来ない。

商売の許可証を発行している公爵家を主とする領邦軍ならばその情報を予め入手しておくことはできるが、今度は一商人の情報をわざわざ事前に控えていたという点に疑念が湧く。

それも出店場所が重なってしまふという不手際があつた二人である、彼らに対して明確な意図があつたことは明らかだろう。

「こうなると、出店場所が重なつたのもただの不手際ではないのかもしれないな」

「二人をいがみあわせて、ほとぼりが冷めない内に事件を起こす」

「そこに介入しながらもまともに取り合わないことで大市の人々の危機感を煽り陳情の取り下げを促す、といったところでしょうか」

あくまで推測ではあるがこれまで明らかになつた情報と領邦軍の態度を鑑みればこれが真実であつたとしてもおかしくはなかった。

「よくよく考えれば……領邦軍の詰所がある町で夜中とはいえこんな事件を起こせる輩がそうそう居るわけもないのよね」

あのような姿勢を見せている領邦軍といえど町周辺の警邏活動は行っているらしい。そんな町で犯行に及ぼうとするのは余程の無謀か、絶対に捕まらないという確信を持つものぐらいではないかとアリサも理解する。

「ふふ、あなたのお陰で事件の全貌が大分見えて来たようだなエリオット」

「あはは……たまたま上手くいっただけだよ、あそこまで口を滑らせてくれるなんて思っただけだったし」

「そんなことない、間違いなくお手柄だよ。さて、こうなってくると犯人には領邦軍が関わっている可能性が濃厚だな」

あえて事件を起こすというのならば不測の事態に至らせない為にも彼らは事件を制御できる立場に居ようとするはずである。

ならば実行犯は領邦軍そのものでなくとも何らかの形で彼ら、あるいは公爵家の意を受けた者達であるだろう。

「軍内部の者が実行犯とは考えにくいだろう。領邦軍はプライドも高い、自ら手を汚しあのような事件に関わるとは思えぬ」

「そうね、それに屋台から盗み出した商品は相当な量があるはずだし、町のどこかに隠しておいたら目立つはずよ。もう町の外まで運び出されると考えていいんじゃないかしら」

「犯人は町の外の人間であるかもしれないことを考慮に入れたほうがいいかもしれませんね、捜索範囲が広がってしまうことになりませんが」

「出来れば目撃情報でも欲しいところだけど、犯行があつたのは夜中だし、難しいところだろうな……?」

不意にリインが歩みを止め道の脇へと目を向ける。

「どうしたのリイン……あつ」

リインが視線を向けた先にあつたものにはアリサらもすぐに気付く。

舗装された大通りの脇に座り込み、木の柵にもたれかかっている男性の姿がそこにはあつた。

「あの、大丈夫ですか? 気分でも——うっ」

「ああ?」

急に体調でも崩したのかと声を掛けたリインに向けられる赤ら顔、そして片手に持った酒瓶が男の状態を如実に物語っていた。

「酔っ払い!? こんな昼間から……」

瞳の焦点はすぐ目の前のリインとすら合っておらず虚ろで、泥酔状態であるらしい男にアリサも引いた様子を見せてしまう。

「……大分酔つてらっしゃるようですが、良かったら家までお送りしましょうか?」

そんなアリサを庇うように前に出ながらルドルフが男へ持ち掛ける。

傍目にも男は歩くことすらままならないように感じられた。

「ほっとしてくれよ……おじさんはいきなり仕事をクビになつちやうようなダメなやつなんだからさ……」

不貞腐れた様子でくだを巻いている男を言葉通りにするのも気が引けてしまい、どうしたらよいものか皆で困った顔を突き合わせてしまったが、そこでふとルドルフはあることを思い出した。

「もしかしてこちらの方——昨日マゴツトさんの話でお聞きした自然公園の元管理人の方なのでは？」

「あつ」

他の四名もその話、突然解雇されてしまったという男性の話を思い出し小さく声を漏らす。

まさか本当に、それもこんな町の通りで呑み潰れているなどは予想もしていなかったが、そんなやり取りを耳ざとく聞きつけた男が声を上げた。

「なんだあ？ 坊ちゃんたち俺の事を知ってるのか？」

「ええ……ルナリア自然公園の管理人だったジョンソンさんというのは、あなたのこと間違いありませんか？」

その問いに男はコロリと表情を陽気なものに変え、機嫌良さそうにすら見える笑顔で答えた。

「そうさ！　びつくりだなこいつは、もしかして坊ちゃん達とどつかで会ってたかな？」
一転して上機嫌になった男はいかに自分が生き甲斐としていた自然公園の管理に心を砕いていたか、聞かれてもいない話を語り始める。

とりとめなく続く過去語りに相槌を打ちながら皆がどう言つてこの場を離れようか考え始めたところでまたも男性、ジョンソンは機嫌を変え座った目つきで拗ねたような声を漏らす。

「まったくよ……あんなチャラチャラした若造連中よりおじさんの方がよっぽどまともな仕事するつてのにな」

「チャラチャラした連中？」

「ああ、俺の代わりに管理人になつたていう連中さ。おじさんは昨日の夜中からここで呑んでただんどきさあ、あの連中夜中だつていうのにヘラヘラしながらでかい木箱なんかをいくつも西口の方に運び出してやがったのさ。」

まったく公園の管理はちゃんとやってるのかって心配になってくるってもんさ」

その言葉が正しければ、現管理人達の行動はルドルフ達にとつてあまりにも意味深過ぎるものだった。

昨日の夜、そして運び出された荷物、結び付けられる事案は一つしかない。

「……確か、自然公園の管理人は最近理由も無く急に変えられたって話だったよね」

「役人、公爵家の手回しと考えるのが自然でしょうね、結構な広さがあるみたいだったし、あそこなら隠し場所にももってこい——予想以上に真つ黒だったみたいね」

封鎖されていた自然公園、そして最近になって雇われた管理人達、彼らが追い求める真犯人の条件がそこには全て揃っていた。

領き交わした五人は決定的な証言をもたらしてくれた元管理人のジョンソンに向き直り礼の言葉を口にす。

「ありがとうございます、ジョンソンさん。お蔭さまで真相に迫れるかもしれません」

「ああ？ おじさんが役に立ったっていうのかい？」

「うむ、礼と言ってはなんだが御仁——そなたの居場所を取り戻してやれるやもしれぬ、今の内に酒を抜いて置くがいい」

ラウラに予想もなかったであろう言葉をかけられたジョンソンはぼかんと気の抜けた表情になってしまい、駆けだしたルドルフらの背を呆けたまま見送るのだった。

「昨日の男達は……いないようだな」

西街道を抜けルナリア自然公園の前までやってきた五人は昨日立っていた二人の姿が無い事を確認できたことで入口まで近づく。

自然公園の外周は高い塀に囲まれ、目の前の入口も大きな鉄格子の門によって閉じられている。

門は南京錠によって施錠されていたが鍵穴は公園内側を向いており、内側から掛けられたことが見て取れた。

「見て、これ……」

足元に転がっていたあるものに気づき、アリサが拾い上げたものに皆注目する。

ブレスレットらしいアクセサリ、こんな場所に落ちているものとしては明らかに不自然なものだ。

「もしかしてこれ帝都の商人さんが扱ってるっていう品の一つなんじゃ……」

「決めつけるべきではない、などと言っていていられる状況でもなさそうだな」

盗み出した商品を運び入れる際に落としてしまったのか、経緯はともかく最早大市の盗難事件の犯人が自然公園内に居ることは明白に思われた。

門に歩み寄ったラウラは南京錠の太い棒状の掛け金に触れ感触を確かめると一步退き、左腕の剣帯から両手剣を引き抜く。

「こゝ、壊しちゃおうの?」

「うむ、相手が出てくるのを待っていられる時間もないだろう。手荒ではあるが、致し方あるまい」

既に引き下がるつもりは無いらしくラウラが錠前を破壊するべく剣を構えたそこで。

「あ……」

何事かを言いかけたラインの姿をラウラは見逃していなかった。

「どうしたリイン?」

「……いや、確かにここはラウラの言う通りだ……任せるよ」

「——そうか、多少音は響くかもしれないが、中はそれなりに深いようだ。気づかれる可能性は低いだろう……ゆくぞ」

振り下ろされたラウラの剣は過たず錠前を叩き斬り、弾けるような金属の音を鳴らして分割された南京錠が地に落ちる。

余波で格子門の一部がひしゃげてしまっていたが、奥から人が駆けつけてくるような心配も無い。

こうしてこの先に潜んでいるだろう実行犯達の身柄を確保するべく、A班メンバーはそれぞれ武装を確認し自然公園の中へと足を踏み入れるのだった。

自然公園のヌシ

自然公園と呼称されてはいるが、草木生い茂る新緑の空間を高い木々の間から差し込んだ陽の光が満たし、あちこちに残った大昔にあつたとされる精霊信仰のシンボルだった石碑もあいまり園内の光景はどこか神秘的な雰囲気すら醸し出していた。

遊歩道として整備された道沿いは魔獣避けの導力灯が設置されていたが道から外れた先には魔獣のものと思われる気配が色濃ゆく、観光地としてはなかなか気の抜けない土地であるらしい。

最も人の気配に鋭敏な感覚を持つリインを先頭とし魔獣や盗難事件の真犯人と目される管理人達と鉢合わせてしまわないよう先を警戒しながら道なりに進むことしばらく。

一刻と経たない内に最奥らしき地形が見えてきたところで、後続の四人に止まるようリインが手で制した。

「いたか？」

「ああ、この先に四人。……少し様子を窺ってみよう」

小声を交わしたラウラ、残るルドルフ達もその意見に頷き、足音を立てないよう注意

を払いつつ樹木の陰に身を隠し、隆起した地形に囲まれた広場のようになっていいる空間へ目を凝らす。

ラインの言葉通り広場の片隅、そこには管理人の作業服を着込み肩には魔獣対策か導力式の小銃を掛けた四人の男達が談笑している姿があった。

加えて男達の目の前には荷車とそれによつて運び込まれたのだろう木箱の数々が積み並べられていた。

開封した木箱から高価そうな装飾品の品々を手にとった男達の表情がだらしなく緩む。

「こいつはいい、持ってくるのには苦勞させられたが、いい稼ぎになったな」
「連中が陳情を取り下げなけりやまだまだ稼げるしな」

明らかな盗品を前に不届きな算段を立てる男達にA班メンバーは今すぐ飛び出し身柄を確保したい衝動に駆られてしまう。

しかし誰かに話を聞かれるかもしれないなどは夢にも思っていないのか、耳を澄ませば内容まで聞き取れる声量で話し続ける迂闊な男達の実情を探るべく息を潜め続けた。

「しかしあいつら何者なんだろうな、領邦軍の兵士にまで顔が利くなんて」

「まあ肝心の金払いは良いんだ、俺達の氣にすることじゃないさ。それよりいつでもぞ

られるように準備をしとこうぜ」

話からして男達が何者かに雇われ、盗みを働いたことは確実なようだ。

口ぶりからしてその依頼者は男達に直接身元を明かしてはいないらしい事が惜しいところだったが、そこまで分かっただけでも十分だろうと判断し、ルドルフ達は満を持して男達の元へ歩を進める。

「ん——!? お、おい!」

「どうした——っ!?!」

いち早く駆け走ってくるⅦ組メンバーの姿に気づいた男が声を上げると、残る三人も目を剥きながら身構える。

「てめえら、昨日の!」

「門には鍵をかけておいた筈なのに……まさかこじ開けて来やがったのか」

先日門で彼らを追い返した男二人が見覚えのある姿に声を張り上げるが今更そんなことで怯むルドルフ達ではない。

「後ろの荷物は大市から盗み出した商品で間違いないな?」

「現行犯逮捕には十分ね、元締め達のところまで連行させてもらうわよ」

睨み据えながらラインとアリサが言い放った言葉に男達は焦燥露わに歯ぎしりするも、すぐにその口角を獯猛に歪ませた。

「ハッ——たかがガキ共が何を言つてやがる」

「お前達を黙らせちまえば問題は無い——やるぞっ！」

管理人達は肩に掛けた小銃を五人へ向けて構え、躊躇いなく引き金を絞つた。

四つの銃口から一斉に撃ち放たれる銃弾——フルオート射撃による連射はまともに浴びれば只では済まない。

しかし——

「エリオット」

「うん！」

皆の前に飛び出したルドルフが盾を構え、出力を全開にした防壁を展開する。

更に即応したエリオットが導力杖にセットされたアーツを瞬時に起動させルドルフの前面にもう一枚の防壁を発生させた。

二重の防壁は飛来した銃弾の雨霰を悉く弾き、矢面に立つたルドルフにすら一発たりとも届かせない。

「なっ!?!」

「ちっ——そのまま釘付けにしておけ！」

並の人間なら抵抗もできないだろう一斉射を凌がれたことで動揺を見せる男達の中で、一人が射撃を止め銃のセレクターを切り替える。

防壁を突破する為に射撃時の導力を高めた高威力モードに切り替えたのだろうが、それを黙って見ているⅦ組ではなかった。

ルドルフの背後からリインとラウラが同時に飛び出し、横合いから男達へ接近している。

慌ててセレクターを切り替えた男が迎撃しようとしてリインらへ銃口を向けるが――

「――つぐあー!」

導力により威力を強化された矢が銃身を横から射抜き、男の手から銃を弾き飛ばした。

相手を無力化する手段として武装の解除は基本の一手だが、的として狙える範囲が狭い銃器は射撃武器にとってそれが難しい。

しかしそれは正面から相対した場合のこと、今のようにリイン達へ狙いを向け幅広い銃身が晒されている場合アリサ程の腕を持つならば格好の的となる。

自らの得物として選択こそしていないもののサラによる日々の武術教練で銃器の扱い、対処を学んでいる彼女はその隙を見逃さなかった。

そうして憂いが取り除かれたならば後は彼らの独壇場だ。

消えたと思ふばかりの速度で一気に距離を詰めたリインは銃を弾かれた衝撃で腕を痺れさせている男の鳩尾へ太刀の柄を叩き込み、一撃で昏倒させる。

残った男達は目と鼻の先に飛び込んできたリインの姿に慌ててそちらへ銃を向け直そうとするが。

「せいっー」

体勢を整えるよりも早く振りかぶった両手剣をラウラが振り付け、剣の峰で一人の銃を払い飛ばす。

更にリインが抜きざまに太刀を振り抜くと、もう一人の銃も半ばからスルリと両断され半分銃身が地に落ちる。

あつという間に一人が気絶、二人も頼みにしていた武装を解除され呆然とし、残った一人は銃を構えながらもじり寄るリインとラウラ、弓で狙いをつけているアリサの圧力に汗を垂らし——ややして観念したように両手を上げた。

そうして数分後には文字通り瞬く間に制圧された管理人達が拘束された姿になっていた。

「口ほどにもないな」

「どうなるかと思っただけど、サラ教官の武術教練に比べたら楽なぐらいだったわね」

一纏めに座らされた管理人達は悔しそうに五人を見上げていたが、実際に両者の間にはそれほど練度に差があった。

ARCSによる連携もあるが男達は終始A班の皆に翻弄される一方で、おそらく戦

闘訓練などもまともに受けたことはないのだろう。

「くそっ……まさかこんなガキ共に」

「抵抗は無駄だ、大人しく大市の人達に謝罪してもらおうぞ」

「それと、そなたらの雇い主についても白状してもらおう必要がありそうだな」

無事取り押さえることができた犯人達の身柄をケルディックへ連行すべく、男達を立たせようとしたリイン達だったが。

「——?」

不意にエリオットが何かに気を引かれたように目を余所へ向ける。

「どうしたのエリオット?」

「うん……今なんだか笛のような音が聞こえたような気がして」

彼のみが聞き取れたらしいその音を不審に思う間もなく——異変は起こった。

「——っ!」

突如として森全域へ響き渡るような轟声、それは猛獣の咆哮のようだった。

ただしその規模がそこらの魔獣のものとは桁違い、空気がビリビリと震えその場に居合わせた全員の肌を打ち、理性よりも早く本能がかつてない危機が迫っていることを告げていた。

地を揺らすような振動が規則的に響き——それがこの場へ迫ってくる存在の足音に

伴うものであると皆が気づくのにそう時間はかからなかった。

「……大型の獣か？」

ラウラですらも冷や汗を浮かべながら接近してくる気配に固唾を呑み、誰もが困惑せずにはいられない中やがてそれは姿を現した。

丸太のように太い足で苔むした地を踏みしめ、木々の間から飛び込んできた見上げるようなその巨体。

体形としては野生の魔獣種に少なからず存在する狒々のようであったが、その大きさは昨日相手取った手配魔獣を遥かに上回る。

加えて肩からは巖のような瘤が突き出し、頭部に備わる二対の角が凶相に拍車をかけ、余りある威圧感を放っている。

その偉容だけでも畏怖を感じずにはいられない猛獣の出現に管理人の男達などは完全に腰を抜かしていた。

「な、な……何だよこいつは……」

見下ろしてくる白眼は敵意に満ち、その場の全員が外敵として認識されているのは疑いようも無い。

予期せぬ事態に動揺しながらもA班五名は各々武器を構え大狒々と向かい合う。

「まずいわよりイン、このままじゃ……」

「分かつてる、彼らを見捨てるわけにもいかない——俺達で撃退するぞ！」

この魔獣が難敵であるのは刃を交えるまでもなく知れる。

だが盗人とはいえ腰を抜かした管理人達を置いて逃げるといふ選択肢を彼らは選べなかつた。

抱えて連れ出すような真似もできないはずがなく、これほどの魔獣を相手にすることになつたアリサやエリオットの表情は流石に青気が差していたが残る道は正面突破のみ。

「ラウラ、俺達で引き付けるしかない、頼む！」

「承知している、任せよ！」

自らを奮い立たせる意味でも声を張り上げ応じたラウラとリインは我先に巨大魔獣へと挑みかかつていく。

腹を括つたⅦ組の面々を改めて敵と認めたのか、大狒々は再び咆哮を上げると迫るリイン達を叩き潰そうとするように前脚を打ち下ろす。

左右に分かれる形で飛び退きそれを躲したリインとラウラが隙を窺うも、すぐさま体を振り回し周囲を薙ぎ払う尾をすんでのところを身を屈めやり過ぐす。

腕と尾、どちらの一撃にも掠めただけで深刻なダメージを負つてしまふような重みが込められており、僅かな判断の遅れすら命取りになつてしまふかねない。

「さ、こんな化け物が居るなんて聞いてないぞ……」

恐れ慄く男達を一瞥しながら、アリサ、エリオット、ルドルフもまた戦闘へ臨む。

リン達のような立ち回りが出来ずとも、クラスメイトが命懸けで戦っているのを指を咥えて見ていることなどできはしなかった。

「下手に注意を引きたくなかつたら大人しくしてることね」

腰を抜かした男達に釘を刺しながらアリサは弓へつがえた矢を引き絞る。

微かに肩を震わせているエリオットもまたリンらを支援するためARCUを駆動させ始めていた。

そんな二人をいつでも庇えるよう、大狒々との間に立ちながらルドルフもまたARCUを構える。

前衛として優れた二人が引き付けてくれているとはいえ、一瞬の判断ミスが命取りになるのは後衛である彼らも同じこと。

大狒々の動向に細心の注意を払いながら彼らVII組にとって今回の特別実習、最大の試験となるであろう戦いが始まった。

「——そこだっ！」

エリオットのアーツによる水弾が狒々の頭へ命中した瞬間を見計らい、飛び込んだらウラが剣を振り上げ脇腹へ斬りかかる、

急所に近い部位であるはずだったがしかし、大狒々はその筋質も並外れているらしくラウラの一振りを以てしても大きな傷は刻めなかった。

口惜しそうに退くラウラだったが、逃すまいとするように振りつけられた尾が迫り身を強張らせる。

刀身に腕を添えた剣を咄嗟の盾代わりに構えた彼女を太い尾が打ち払おうとした瞬間、間に生じた光壁が尾に込められていた威力を大きく削ぎ落とした。

その助けにより尾を受け流すことに成功したラウラは距離を取りながら今のアーツを行使したルドルフに礼を叫ぶ。

「すまぬルドルフ、助かった!」

「お構いなく、無理はされないで下さい」

駆動時間の短さ、そして旧校舎の探索で得たセピスの多くを支援アーツの為琥珀耀石アンパールのクオーツに加工してもらっていたルドルフは中距離から前衛の二人に随時防壁を張り支援に徹していた。

戦いが始まってから当人達にとっては数時間にも感じられるような数分が経過した頃、決定打を与えられずにいたルドルフ達だったがエリオット、アリサによる後方から

の射撃やアーツにより生じる隙を見計らいリインとラウラは確実に大狒々へダメージを蓄積させていった。

巨大な体躯の端々には太刀と剣による傷跡が刻まれ、噴き出した鮮血が全身を覆う獣毛の一部を赤く染めている。

先程のように時折ヒヤリさせられる場面はあるものの、通常の魔獣との戦闘時以上にルドルフが守勢に回っていることもあり未だA班の面々は誰も傷を負っていない。

ほぼ絶え間なく動き回らされているリインとラウラも、学院の厳しい武術教練に加え彼ら自身が日頃から重ねている鍛錬がものを言い、まだまだ息は上がっていないかった。

思いのほか状況が優位に進んでいることもありこのまま倒しきれるのではないかという希望的観測すら皆は抱き始めていた。

——そうあって欲しいという願望が彼らに現状を維持しようという受け身の姿勢を取らせてしまったのかもしれないが、いずれにしてもこの場で先に行動を起こしたのは大狒々の方だった。

野生の猛獣といえど、劣勢の状況でただやられるままになることを良しとするはずがない。

巨獣は今またリインによって新たな傷を受けながらも、それに対する反撃を捨て——傍に転がっていた荷車を叩き飛ばした。

「……」

宙を舞う荷車は後方のアリサ目掛けて打ち飛ばされていた。

すぐに気付いたルドルフが間に割って入り導力壁を展開した盾でそれを受け止める。

ヒヤリとしたリインらが安堵するのも束の間、大狒々の本命はアリサでは無かった。

「……っ、待て！」

地鳴りを響かせながら地を蹴った大狒々は追いつがるラウラの振るった剣が後ろ足を大きく切り裂くのも厭わず、疾走する。

——アーツの駆動準備に入っていたエリオット目掛けて。

「う……わ」

急接近する大狒々にエリオットは思わず動きを止めてしまった。

逃げなければと理性が警鐘を鳴らすも初めて遭遇する大型魔獣の偉容、それが自分へと迫っている恐怖に呑み込まれ、体は金縛りにあつたように動かない。

リイン達が助けに入るのには間に合わない、誘導されたルドルフも同様だ。

魔導杖の防壁など振りかぶられた剛腕は容易く打ち砕き、華奢な体格のエリオットなど一撃で叩き潰してしまうかもしれない。

リインらがエリオットの名を叫び絶対絶命の瞬間、振るわれた狒々の拳が今にも彼の身を打ち抜こうという時——大地が跳ね上がった。

『!?!』

困惑はエリオットのものか、はたまた大狒々のものか、硬質な破砕音が轟き大狒々の拳は地からせり上がった透き通る結晶体の壁により阻まれている。

地質の構造を変化させ強力無比な即席の防壁と成す、冷や汗を浮かべながらもルドルフは間一髪そのアーツ、アダマスシールドを発動させていた。

窮地を逃れたエリオットだったがそれも束の間のこと、アーツにより構造を変化させ生み出したその結晶体は硬度において比類なきものだったが、強度においては脆弱である。

拳を受けた結晶壁に生じた罅は見る間に広がり、次の瞬間にはその全てがばらばらに砕け散ってしまった。

どのような攻撃であっても防ぐのは一度きりが限界の防壁が消失し再びエリオットは無防備な姿を晒すことになる。

強固な壁を全力で殴りつけたことにより痛めた拳を庇うような仕草を見せていた大狒々、その頭部へ——炎を纏った矢が突き立った。

炎は体毛に燃え移り、呻き声をあげながら狒々は刺さった矢を打ち払う。

「エリオット、下がって！」

他でもないアリサによる射撃だったが、彼女の予想以上に火矢による一撃は怒りを

買ったらしく、目の前のエリオットすら放って大狒々はアリサへと跳び駆ける。

迫りくる巨獣の姿に息を呑むアリサだったが既に何度も見た動き、前腕が振りかぶられるのを見て取ると咄嗟にARCU Sに指を走らせ、身体強化の簡易術式を秘めたクオーツを励起させる。

大気を引き裂きながら迫る剛腕の薙ぎ払いを、アリサは大きく後方へ跳び上がることで回避した。

「アリサ、駄目だ!」

「えっ?」

唐突に上がるリインの叫び、それが何を意味するのかすぐにアリサは理解することになる。

身体能力を強化した並の魔獣であれば追いつがるのもやつとである後方への跳躍、しかし桁違いの体躯を持つ目の前の巨獣はその距離を一蹴りで詰めていた。

威嚇するように鋭利な牙を剥き出しながら迫る危機に対して、宙に身を躍らせてしまっているアリサに逃れる術はない。

宙を蹴る翼を持たない人にとって、迂闊に跳び上がることは無抵抗な姿を晒すことと同義なのだ。同義なのだ。

先程のルドルフのオーツは戦術オーブメントへの負荷もそれなりに大きいもの、次の

アーツを駆動させることは間に合わないだろう。

底冷えするような感覚が体の内を満たすのを感じながらアリサは硬く目をつむり痛みに備える。

しかし次の瞬間、その身に感じた衝撃は予想に反してごく僅かなものだった。

まるで誰かによつてその場から押し退けられたような。

痛みを覚悟した瞬間に覚えたものとはまた異なる悪寒に瞼を開いたアリサの目に映るのは——彼女を突き飛ばしたのだろうルドルフの姿。

そんな状況だと言うのに彼はつくりものではない、心の底から安堵したような表情を浮かべていた。

「——」

全てを理解するのと同時、アリサの目の前を横切った剛腕はルドルフを虫でも払うかのように呆気なく打ち飛ばした。

「あ——」

込められた勢いそのままに地を跳ねながら彼方までルドルフの体は転がっていき——

「あ、ああ——」

力なく苔の生えた大地に倒れ伏した彼はやがてピクリとも動かなくなつた。

「ルデー……！」
身代わりとなった彼の名を叫ぶ、アリサの慟哭がこだまする。

決意と焰の太刀

「アリサ、エリオット、ルドルフを頼む！」

「これ以上はやらせん！」

焦燥が強く滲む声で二人へ呼び掛けるとリインはそれまで以上の果敢さで大狒々に攻めかかっていき、ラウラも同じくルドルフを介抱する時間を稼ぐために真っ向から向かっていく。

「二人とも、ごめん……ルデイ！」

五人がかりでやつと相手にしていた凶獣をリイン達だけに任せてしまうのは二人にとつても抵抗があつたが、ルドルフの手当てをしなければとの思いが勝り後ろ髪を引かれながらもアリサは倒れ伏した少年の元へ向かう。

身を挺してアリサを庇つた当のルドルフは地に叩き付けられてから数瞬の間、失つていた意識を辛うじて取り戻していた。

「くっ……は、あ」

体中に痺れが走り思うように首が回らない。

咄嗟に盾を構えるのが間に合いこそしたものの、あれだけの一撃を受けたのだ。

衝撃が抜けきっていないのも当然だろうと、こんなときにまで彼の冷えた頭は分析していた。

全身の感覚が痛みに悲鳴を上げる中、ルドルフは力を振り絞り深く息を吸い込み、吐き出す。

呼吸に問題は無く伴う痛みも無い、幸いにして骨折にまでは至っていないようだった。

この程度で済んだのだからラインフォルトの導力器はやはり優秀である。

暢気ですらあるそんなことを思い浮かべながらルドルフは無事に動いてくれている手足を支えに身を起こし、その感覚を確かめる。

——特に支障は無し、後は痺れが回復するまでどれぐらいかかるかが問題でしょうか。

ダメージ分析を終えたルドルフが離脱してしまった戦闘の状況を見極めるべく顔を上げると、丁度アリサが彼の元へ駆けつけたところだった。

「ルデイ、大丈夫なの!？」

「アリサ——はい、大事には至っておりません、すぐに復帰しますのでそれまでの間どうかリイン達の助力をしてあげて下さい」

「何言ってるのよ……あんなに跳ね飛ばされて只で済んでるわけじゃないじゃない、いいか

ら診せてみなさい」

「っ！ お嬢様お待ちを——」

傷の程度を見ようとルドルフの両肩に触れた瞬間、アリサの不安に満ちた表情が凍り付いた。

「……………」

制止が間に合わず口を閉ざしたルドルフの肩にかけた手を、アリサは恐る恐る確かめるように腕へと下ろしていく。

「……………何よ、これ」

アリサが震えた声で漏らした呟きにルドルフは沈痛な面持ちでただ黙することしか出来ず、二人が互いに言葉を発せなくなってしまったところへエリオットが息を切らしながら駆け寄ってきた。

「エリオットまで——すみません、ご心配をおかけして」

「な、何言ってるのさ……ごめん、ルドルフ。僕があの時、しっかり動いていれば、こんなことにはならなかったかもしれないのに」

竦んでしまったことを悔いているらしいエリオットはアリサが狙われてしまったことまで自分に責任があると感じているのか、横に跪いた彼は明らかに平静を欠いているのを見て取れる。

そんな彼の姿に逡巡してしまいがちでもルドルフには頼まねばならないことがあった。

「それよりもエリオット、どうかリン達の援護をお願いします——二人が持たなくなる前に」

「……っ」

息を呑むエリオット、一刻も早くそれが必要であることは彼にも分かっていた。

今なお二人は大狒々の注意を引き続けている、どうやってそんな無茶を可能としているのか——単純な事、彼らは無理をしているのだ。

目を離すことができないほど攻め続けながら極限まで神経を張り詰めさせ、反応速度を高めることで至近距離での回避を間に合わせている。

しかし、意識しての集中状態というものは長くは持たない、体以上に人の脳が耐えられないのだ。

そしてそれが途切れたときの反応速度は通常よりも低下してしまう、もしその瞬間を狙われたならば、今度は彼らの身こそが危ない。

そうなる前に何か手を打たなければならなかった。

「で、でも、僕のアーツがあんな魔獣に通用するのかな」

エリオットの懸念は最もだった、これまで彼は何度か攻性アーツを使用していたがあ

の巨獣はよほど導力魔法に耐性があるのか、それ自体が大したダメージとなっていない様子は見られていない。

「今のままでは難しいでしょう、ですから——」

ルドルフはARCSを開き、スロットから蒼耀石サファイヤルのクオーツを二つ抜き出すとエリオットへと差し出す。

「上位アーツの威力なら状況を変えることができますはずですが、今の僕では上手くアーツを駆動させることができるか怪しい。どうかお願いできませんか？」

その要請にエリオットは目を見開いて硬直してしまう。

上位アーツと呼ばれる導力魔法の中でも大規模な影響力を持つ術式ならば確かにあの巨獣にでも通用するだろう。

エリオットの戦術オーブメントには未だ空いているスロットがある、ルドルフより借り受けたクオーツを嵌め込むならば必要な属性力も賄えるかもしれない。

しかし——

「む、無理だよ……上位アーツなんて、教練でも一度だつて成功したことないのに」

上位アーツともなれば必要となる属性力が増した分だけ調整も難しくなり、正しく戦術オーブメントを駆動させるのにそれなりの習熟を要する。

アーツを扱い始めて一ヶ月と経たないエリオットには厳しいというのが現実で、事実

この日まで彼は学院の武術教練でも上位アーツを成功させたことは無かった。

「大丈夫です、もし失敗したとしてもまだ手はあります。勿論エリオットが成功させてくれることが最も近道なのです、が……」

責任を感じさせまいとそんなことを口にしたルドルフだったが、言葉の途中でエリオットの顔がうつむき気味になり悲壮な色が漂い始めたのに気づき、失策を悟る。

先程の一件で彼はすっかりと自信というものを失っていた。

今も自分を責め続けているであろう彼にこんなことを言ってしまったら、かえって追い詰めてしまうのではないか——失敗したならば自信を取り戻せなくなってしまうほどに。

ルドルフとしては本心、彼に非など無ければ上位アーツを成功させることができなくとも気に病む必要などないと思っている。

けれどもそんなことすら耐えられないらしい優しい気性の彼に、どんな言葉をかければよいのか思い悩んだ末——ルドルフは口を開く。

「そういえば、知っていますかエリオット」

「え？」

「戦術オーブメントの習熟に関して、こんな説があるんです」

それはたまたまルドルフが読む機会のあつた雑誌に記載されていた学説ですらない、

何の裏付けも保証もない記事だった。

しかしエリオットを前にしたルドルフには不思議とそこに書かれていた内容があながち的外れでもないように感じられたのだ。

「音楽を嗜む者は導力魔法に対して高い理解度を示す傾向にあると、なんでも演奏に必要な感性が戦術オーブメントと繋がっている感覚に似ているのだそうです」

「音……楽、が？」

「ええ、自由行動日、ヴァイオリンでしょうか、寮で演奏していらしたのはエリオットですよね？」

あの日の、耳にした音色を思い出しながらルドルフが尋ねると推測は間違っていないかったらしくエリオットがこくりと頷きを見せた。

「僕自身はあまり音楽に詳しいわけではないのですが、あの演奏はとても心地良いものを感じました。良ければ今度、お聞かせ願いたいです」

絞り出したルドルフの言葉にしばらくの間エリオットは虚を突かれたように目をしばたかせていたが、やがてその手をゆつくりと差し出されたクオーツへ伸ばし、受け取った。

「うん……ありがとう、ルドルフ。……やってみるよ」

手に取ったクオーツをARCU Sにセットし、エリオットが立ち上がる。

緊張しているのは一目瞭然で表情は硬く肩も小刻みに震えていたが、先程までのような悲壮感までではない。

ライン達が懸命に足止めし続けている大狒々を見据えたその背に、何とか励ますことができたのかとルドルフは胸を撫で下ろす。

可能性は十分にあると考えてはいる、けれども彼が本当に上位アーツを発動させることができるとは限らない。

もしもの時の備えにと左手の導力盾に仕込まれたキャパシターへ伸ばそうとしたルドルフの手が、アリサによって掴まれる。

「アリサ？」

「駄目よ。任せたんでしょう、エリオットに」

「それは……そうですが、しかし」

アリサの手に込められた力が増し、ルドルフは掴まれた右腕が軋むのを感じ取る。

その腕を握り締め離さないままアリサは決意の滲む強い眼差しでルドルフを見つめていた。

「信じなさい、エリオットを。……それでもどうにもならなかったときは、止めないであげる。でも、これ以上の無茶は——許さないわ」

仕えるべき少女の怒っているようにも、泣き出しそうなのようにも見える、複雑な感情

が入り混じった榛の瞳にルドルフは何も言えなくなつてしまった。

A R C U S を手にしたエリオットは自身の心臓が早鐘を打つように高鳴つてゐるのを感じながらもその原因が緊張だけでなく、ある種の昂揚感であることに気づいていた。

特別オリエンテーリングという波乱の幕開けから特科クラスVII組という枠組みでの生活が始まり、今でこそ馴染んでしまつたが、入学数ヶ月前までのエリオットは自分がそんな進路へ選ぶなど思つても居なかつた。

学院のクラブ活動でも吹奏楽部に所属する彼は幼い頃から姉と共に親しんだ音楽という分野に傾倒しており、当然将来もそれに因んだ道を歩むのだと信じて疑わず、通うことになる教育機関にも帝都の音楽院を志望していた。

しかし、それを打ち明けられた父は姉も驚くほどの猛反対を示し、軍学校への入学を薦めてきた。

姉は最後まで父を説得しようとしてくれたが、今まで見たことも無いほど険しい顔つきでそれを拒む父の姿に反発してまで音楽に入れ込もうという気になれず、エリ

オットはツールズ士官学院へと進路を変更する。

音楽の道を諦めることにもさほど抵抗は無い、そう思い込んでいた。けれど、彼は今になって自覚してしまったのだ。

——ルドルフが本心から笑っていないのには気づいてた。

嫌な顔一つせず寮の掃除や料理の支度を引き受けてくれている彼の歪な内面、浮かべる表情にまともな感情が込もっていないことを既にエリオットは知っていた。

決して人に自分の都合を押し付けたりせず、無理な事を頼んだりはしない彼ではあつたがそれは優しさからくるものではなく、ただやらせるべきではない、出来ないかと判断しているだけなのだ。

それは誰に対しても期待を、信頼を向けていないことでもあり、彼の事が怖くなる時すらあつた。

そんな彼にまで励まされてしまうほど、先程までのエリオットは追い詰められた顔をしていたらしい。

そしてもう一つ、エリオットには気づいていることがある。

——彼に心から嘘は吐く気は無い。

表情を取り繕っているルドルフだがおそらく聞けば答えてくれるだろう、本当は喜びなど感じていないことを。

エリオットが失敗しても構わないというのも真実だろう、まだ手があるとも言つていたことも。

——演奏を褒めてくれたこと、心地良いと言つてくれたことも、偽りなく、彼が思っていることなのだろう。

それが分かつたエリオットにはこんな状況だと言うのにどんな気休めよりも、ただ演奏を褒められたことが嬉しかったのだ。

気づかされる、執着は無いと思つていた、思い込もうとしていた音楽を、自分が捨てきれないのだという事実を。

『赤毛のクレイグ』という二つ名を持ち、帝国正規軍の第四機甲師団を預かる中將の身である父は帝国男子として音楽などで生計を立てることを認められないと口にしていった。

VII組の皆と送る学院生活にエリオットは多くの出会いの予感を感じ取っている。

今でさえ個性豊かなクラスメイト達との生活に驚きの連続なのだ、学院生活を終えるまでの間、様々なものに触れ、出会い、感じることでだろう。

そうした経験の後にまだ自分がこの音楽に対する思いを抱き続けていたとするならその時こそは。

——父さんの顔を真つ直ぐ見て、言える気がする。

どうあっても、僕はこの道に進みたいんだって。

生まれた新たな思いを、実現させるための決意へと変えエリオットはARCU Sへと指を触れさせる。

——その為にも、皆で無事に帰らないといけないよね。

いつの間にか肩の震えは止まっていた。

戦術オーブメントとしての機能が起動したARCU Sへ繋がる感覚へ意識を研ぎ澄ませながら、エリオットは指を滑らせる。

基点となる蒼耀石のマスタークオーツからスロットを渡っていく指の動きに合わせ、導力のラインが繋がっていく。

嵌め込まれたクオーツが励起し光を放ち始め、封じられている属性力の蓋が開かれる。

ARCU Sと深く意識を同調させ、エリオットは秘められたいくつもの波長から目標とするパターン、持ち得る属性力を最大限に生かせる術式を掴み取り、クオーツから放たれる力の波をそこへ落とし込んでいく。

弦へと乗せた弓を引くようなイメージが頭に浮かび、今までARCU Sを駆動させるときには得られなかった手応えに、我知らずエリオットは微笑みを浮かべていた。

確かにこれは楽器をただ弾き鳴らすのではなく、奏でることが出来た時の感覚に似て

いると。

ARCUUSが駆動し、エリオットの周囲を紋様の浮く術式陣が取り巻く。

上位アーツともなれば駆動完了までにはそれなりの時を要する、だが彼らならきつと持ちこたえてくれるとエリオットは信じ、目標とする大狒々へと意識を収束させていった。

アリサ達による後方支援が無くなり過酷を極めていたリイン達の戦いにも限界が近づいていた。

注意を引き続けるために攻めの手を休めるわけにはいかないというのに、巨獣の腕の一振りでも受けてしまえば重傷を免れない彼らには一瞬たりとも気を抜く暇など無い。

神経を張り詰め通していた二人だったがついにはそれが綻ぶ瞬間が訪れる。

「ぐっ！」

左手のリインを狙っているかと思われた殴り下ろしは大きく弧を描いて軌道を変え、逆位置から斬りかかろうとしていたラウラへと襲いかかった。

咄嗟に剣を返し、その拳を峰で受け流して凌いだラウラの表情が苦悶に歪む。

「ラウラー！」

「……大事ない、気にするな！」

そんな応えを返したラウラーだったが、それが強がりであることをリインは察してしま
う。

大型魔獣の重い一撃を完全に逸らし切れるはずもなく、受ける際に両手剣の峰へ添え
た左手を挫いてしまっていたのだ。

構え直した剣を握る形にはしているものの、あれではまともに振るうことすら難しい
だろう。

この状況では深刻に過ぎる痛手、彼女は大狒々との遭遇からこちら誰よりも前に出て
果敢に剣を振るい続けていただけに時間の問題であったのかもしれない。

何故そんな明らかに気負いすぎている真似をしたのか、理由はおそらく自分にあるの
だろうとリインは悔やんでしまう。

朝、風見亭で交わしたやり取り、口にしてしまった己の限界。

さぞかし頼りない印象を与えてしまったのではないかと思う、それが自分がなんとか
しなければならぬと彼女に普段以上の無茶を強いてしまったのではないかも。

あの時、気落ちした様子を見せてしまった彼女にもつと言葉を選ぶことはできな
かったのかと後悔するも遅い、このままでは自分はもちろん彼女もすぐに持たなくな

る。

「もう、あれしか——っ!？」

臍ほそを嘯むリインがこれまで胸中に秘していたあるものへ手を伸ばす決心を固めようとした時、繋がった感覚に意表を突かれた。

戦術リンク、ルドルフが狒々の一撃を受けてから彼と繋がっていたその感覚が切れてしまっていたことに今更気づきながらリインはそれが報せるものをすぐに見て取る。

ARCUを片手に構えたエリオットは瞑目するようになかつてないほど集中しきった様子で術式陣を周囲に浮かべアーツを駆動させている。

リンクから伝わるその場からの離脱を求める意思の力強さにリインはそれまでの思考を忘れ飛び退いた。

同じく戦術リンクにより意思を伝えられたラウラも微かな躊躇いを表情に浮かべながらも地を蹴って距離を取ると、大狒々はそれまでの焦りが嘘のように呆気なく退いて見せた二人を一瞬怪訝に思ったようだが、すぐに体をエリオット達の方へと向けなおす。

——それと同時に、エリオットのアーツは完成していた。

「い——けー！」

額に汗を滲ませるエリオットを取り巻いていた術式陣の光に狒々の動揺するような

気配が伝わる中、そのアーツが解放された瞬間、一陣の風が吹いた。

狒々の背後で風に吹かれた木の葉がそよぎ、森にさざめきを起す。

だがそれきりエリオット自身にすら何が起こるでもなく、警戒を解いた狒々が歩みを進めようとした時、変化は起こった。

「——っ!!」

空気の軋むような音が木霊し体毛に覆われていた狒々の体躯のみにとどまらず苔むした大地、その後ろの木々までもが白く色を変え——凍り付いていく。

変化に大狒々が驚愕し身を振り回すもその侵食は止まることが無く、風に吹かれた空間は瞬間に霜へ覆われ、芯まで凍り付かされていく。

エリオットが行使した上位アーツ、クリスタルフラッドにより零下を越えた極低温域にまで落とし込まれた大気は大狒々の全身を余すことなく極寒の檻へと包み込んでいた。

術の影響下から逃れる間もなく、全てを凍てつかせる氷牢は大狒々の全身、筋の動きすら奪い氷漬けにしてしまう。

あれだけの暴威を振るった猛獣のなすすべも無い姿に、リインは目を見開いた。

「エリオット……」

よほど緊張していたのか、それほどのアーツを放ったエリオットをついリインは見つ

めてしまう。

彼がどうしてこれまで満足に使ったことも無い上位アーツをこの土壇場で成功させることができたのかと。

——違う。

肩で息をするエリオットのその姿にリインは悟る。

出来たから、やったわけではない、目の前の結果はそんな打算とはかけ離れたものによる成果であることに。

彼はただ、全力を尽くしたのだ。

未熟であろうと、半端であろうと、その事実を前に自分の力量など問題ではない。

同時に気づく、彼女に対して自分が間違えたのが言葉選びなどではなかったことに。

新しい道を求めて士官学院、Ⅶ組へと参加したというのに、これが自分の限界だなど、自らでその道を狭めておいて何を甘えたことを言っていたのか。

胸の内から湧き出てくる後悔——その全てを振り払ってリインは太刀を構えた。

今すべきはそんなことではないと、教えてくれた仲間の為に。

一時は完全に動きを止めたかのように見えた大狒々だったが、ゆっくりとその脚は前へと踏み出しかけていた。

並の魔獣なら冷気だけで凍死させてしまうようなアーツをその身に受けながらこの

大型魔獣はまだ息を保っていたのだ。

そして今も固まり切った体を必死に震わせ動かすに足る熱を溜めようとしている。

それを許すわけにはいかない——そしてそれが出来るのは今この場で自分だけだとリインは分かっていた。

深く呼吸を一つ、リインの傍にまで届き始めた冷気により冷やされた空気が白く煙る。

呼吸と共に冷気を僅かに吸い入れてしまったがそれはすぐに、内から溢れた熱気に染め上げられる。

「……リイン?」

変化に気づいたラウラがはつとしながら見た先には、全身に練り上げた気を滾らせるリインの姿があった。

切っ先を垂直に下へ向けた太刀へと迸った気は次の瞬間、赤々と燃え盛る炎へと変じる。

先の手配魔獣戦の折ラウラが高めた気によって光の剣を生み出したように、リインは炎の刃を太刀へと纏わせていた。

「おおおっ!」

裂帛の氣勢と共にリインが駆ける。

閃いた太刀から刀身を越えて伸びた炎刃は大狒々の右腋を深々と切り裂き、返された一刀が左の腋までも灼き切る。

そして最後、燃え盛る掲げられた焰の太刀が猛るように焰を迸らせながら振り下ろされた。

空間を満たしていた冷気を塗り替え広がる熱波。

顔を腕でかばいそれをやり過ぎたりインを除くその場の全ての人間が見たものは。

――
首元に深々と刻まれた赤黒い傷、最後の一刀により完全に息の音を断たれた巨獣が一瞬の静止の後、地響きを起こしながら崩れ落ちる光景だった。

氷の乙女

戦いが終わり、大狒々が完全に沈黙したことでⅦ組メンバーの間に安堵が訪れ張り詰めていた緊張感がようやく弛む。

「ほ、ほんとにあんな魔獣を倒しちまいやがった……」

腰を抜かしていた管理人達もあれだけの魔獣を相手に勝利を収めたリイン達に恐れ慄き、抵抗する気を失くしてしまっているようだった。

A班の皆がそれぞれ武器を収めながら顔を見合わせていたが、ラウラと目が合ったリインは考え込むように瞳を落とす。

「リイン？」

「ラウラ、今朝はすまなかった」

リインの口から出た謝罪の言葉に目を僅かに見開くラウラだったが、視線を交わすリインの瞳に宿る意思の強さに黙って先を促す。

二人の朝のやり取りを知らない二人とアリスに肩を借りているルドルフがその空気に向け寄ろうとした足を止め見守る中で、リインが再び口を開く。

「初伝止まりだなんて、剣の道を軽んずる言葉を使ってしまった。それ以上に……勝手に

に限界なんて思い込んで、とんだ甘い考えでいたみたいだ」

今の戦いで無意識に己を貶めていたことを自覚したリインは今朝、ラウラに対しても軽率な物言いをしていたことに気づき、剣の道というものに対してどこまでも真っ直ぐな彼女に対してこの場で謝っておかなければ済まない気になってしまっていた。

しかしラウラは小さく首を振ってからその言葉に応じた。

「その程度のことですら私に謝る必要などない」

「えっ?」

「それよりもリイン、そなた——剣の道は好きか?」

そんな問いを投げられたリインは少しの間を挟みながらも、ラウラの顔を真っ直ぐに見返しながら言葉を返す。

「好きとか嫌いとかそういういった感じじゃないな、あるのが当たり前で……もう自分の一部みたいになってる」

「うむ——私もそうだ」

その言葉を聞いたラウラは満足そうに頷き、真剣だった面持ちに笑みを浮かべていた。

「振り返ってみれば、同じ学生の身分でありながらそなたに身勝手な期待を寄せた私にも至らぬところはあったように思う。」

どうかリイン、そなたが劍の道を疎んじているわけではないというのなら未熟者同士、共に精進してみてはくれぬか？」

そう言つて差し出された手をリインはついじつと見つめてしまいなながら、やがてふつと微笑みながらその手を握り返す。

「ああこちらこそ、改めてよろしく頼むよ、ラウラ」

そうしてお互いにわだかまりが解けたことで二人は屈託なく笑い合ひながら握手を交わすのだった。

「なんだか知らないけど、仲直りできたみたいだね？」

「いや、仲違いしてたわけじゃないんだが……まあいいか、それよりも助かったよエリオット。すごかったじゃないか」

「うむ、そなたのアーツがなければ私たちも危ないところだっただろう」

心から安心したように笑つていたエリオットだったが二人からの賞賛にたちまち慌てた様子を見せる。

「あ、あれはまぐれみたいなものだよ、止めはあのリインがあのですごい技で刺してくれたし、何より二人がずっと引き付けていてくれたから出来たんだ、僕だけじゃきつと無理だったよ」

「そうだな、この戦闘は誰か一人欠けていても危なかったと思う、だから――」

ラウラ、エリオット、アリサ、ルドルフ、それぞれの顔を見回し、確信を込めてリインは言葉を継ぐ。

「この勝利は俺達、A班の成果だ」

清々しいままでにそう締めくくったリインに皆、負傷したルドルフを気遣うようにしていたアリサですらも表情を綻ばせる。

その時——死闘の後だというのに心地良くすらある余韻に満たされた空気に水を差すような警笛の音が鳴った。

「——っ！ これは」

弾かれたように皆が顔を向けた先、自然公園の遊歩道から駆け込んでくる青い制服の一団、領邦軍。

銃剣付きの長銃で武装した兵士達は大型魔獣の死骸に一瞬驚きを見せながらも散開し——A班メンバーを取り囲んだ。

「抵抗は無駄だ、大人しくしろ」

「……何故我らを取り囲むのだ？」

盗難事件への領邦軍の関与、これまで立てた推測を裏付けるような行動に理由を察しながらもラウラが嘆きを吐く。

本来逮捕されるべき相手だろう管理人の男達はいやらしい笑みを顔に張り付けてい

た。

「へへっ、形勢逆転だな……っ」

そんな言葉を口にした管理人の男へ、兵士達から遅れて歩み出て来た長衣の隊長が睨みを飛ばし黙らせる。

もつともそれは犯罪者に対して睨みを利かせたというわけではなく、余計な口を滑らせないよう釘を刺すことが目的であつたのだろうが。

「まったく学生風情がよくもここまで引つ掻き回してくれたものだ……この場は我ら領邦軍が取り仕切る、大人しく身柄を預けたまえ」

「何を……目の前に盗品があるのよ!? ここまできて彼らを捕まえもしないつもりなの？」

「フン、彼らはこの自然公園の管理人だろう？ ならばたまたま盗品が運び込まれたこの場に居合わせてもおかしくはあるまい、——可能性で言うならば、君達の犯行とも疑えよう」

ぬけぬけとそんなことを言い放たれ皆が絶句する中、更に隊長はラウラの剣帯を腰に移した剣に視線を移した目を光らせる。

「それにこの自然公園の門には手荒な方法で破られた形跡があつたな、そちらは君達の手によるものではないかね？」

「——っ！」

錠前を剣で破壊したことで歪んだ門に気づいたのか、指摘にラウラの表情が険しいものになる。

その反応に隊長は余裕を見せつけるように薄く笑うと居丈高に言い放つ。

「公共物の破損についても君達には事情を聞く必要がありそうだが、歴史ある士官学院の名誉を汚したくなければ大人しくしている方が身のためだぞ？」

「……緊急避難というものがあると聞くが？」

「それを判断するのはこの地の捜査権を持つ我々だ。これ以上の問答は無用、素直に投降したまえ」

油断なく長銃を構えA班を包围する兵士達は管理人らと違い日頃から訓練を重ねている準正規の軍人、易々と突破できるような相手ではなかった。

それも大狒々との戦いで皆が大なり小なりに消耗、負傷を抱える状況ではとても対抗できないだろう、よしんば突破できたところで犯人と盗品を確保できないのでは何の解決にもなりはしない。

どうすることも出来ない状況、事件解決寸前での横槍に皆が悔しさに歯噛みする中、一人冷えた眼差しで隊長を見ていたルドルフが口を開く。

「仕方ありません、ここは大人しく従いましょう」

「ルドルフ……けど、このままじゃあまりにも……」

「リイン、他に手の打ちようも無いでしょう。——なにしろ彼らはアルゼイドを敵に回しても構わないほどの覚悟でここまで踏み込んできたのですから」

感情の起伏に乏しいルドルフは皆が少なからず判断力を欠いてしまう中で残された最後の手段に気づいていた。

彼の言わんとしてにその場の全員がすぐに気付かず一瞬の沈黙が広がり、最も早く気づき、大きな反応を示した者——領邦軍の隊長が余裕の表情から一転して渋面になりながらルドルフを睨み据える。

「……アルゼイドだと？ 貴様、何を言っている」

「ご存知ありませんでしたか？ そちらの青い御髪おくしの御方はレグラム領主アルゼイド子爵のご息女なのですが」

強張った動きでラウラへと視線を移す隊長、一連のやり取りでルドルフの意図にも気づいた彼女は隊長に向き直ると剣を抜き放ち、地へ突き立てて見せながら高らかに告げる。

「如何にも、私がヴィクター・S・アルゼイドが子、ラウラ・S・アルゼイドだ。今回の事件について、そなたらからしてみれば不服のようだが私は父の名にも、帝国貴族の名誉にも恥じるような行為はしないと断言できる。

領邦軍に逮捕されたとあつては当然父から事情を問われるであろうが、包み隠さず事のあらましを報告すればきつと理解を示して下さるだろう」

決然と言い放つその姿は正に誇り高い貴族そのものといった凛々しさに満ち、周囲の兵士達も動揺を隠せなかつた。

最もその言葉に衝撃を受けているのはこめかみに脂汗を滲ませ始めた隊長だろう。

本来彼らの主たるアルバレア公爵家にとつて子爵位程度の貴族など取るに足らない存在でしかない。

だがアルゼイドだけは別だ。

帝国二大剣術、アルゼイド流の当主にして帝国最強の剣士、光の剣匠の異名を持つかの領主の影響力は帝国貴族の武を貴ぶ気風も相まつて爵位以上に大きいものがある。

そんな人物の一人娘に不当な嫌疑をかけ拘束したとあつては彼ら領邦軍、ひいてはアルバレア公爵家に反感を抱く貴族も少なからず出てくるだろう。

少なくともアルゼイド子爵が仁君として慕われているレグラムにおいて、公爵家に対する領民感情が最悪なものになることは間違いが無く、自分達の行動が主の顔に泥を塗る結果となりかねないことを理解した隊長は苦悩するしかない。

「無論、事件について然るべき捜査が為され被害者が救済されるのであればその必要も無くなるであろうがな」

「た、隊長……」

「ぐ……ぬう……」

この事態を收拾する責任など持ちえない兵士達が狼狽えながら隊長へ判断を仰ぐが、その隊長であつても公爵家の意向とアルゼイド家の影響の板挟みになつており、容易に指示を下せない状態に陥つていた。

隊長が実行犯達を切り捨てるか、それとも公爵家の威光がその程度で揺るぎはしないと押しきるか、どちらの可能性も残つた状況に安心しきつていた管理人達ですらも固唾を呑んでいたのだつたが。

「お困りのご様子ですね」

場違いなまでに涼しげな声がある場に届いた。

「何……っ」

声の方、自分達も通つて来た歩道へと振り返つた領邦軍達が目を睜り驚きを示す。

現れたのは領邦軍のものとは異なる、華美さを排した制服に身を包んだ集団。

「……鉄道憲兵隊」

呻くようにその集団の名を領邦軍の兵士が呟く。

新たにやってきた集団が身に纏う鈍色の制服が示すのは帝国正規軍、その中においても精鋭と名高い鉄道憲兵隊の所属を示すものだった。

並び立つた隊員達の間から、一步前へと進み出た将校らしき若い女性の姿に領邦軍兵士達のどよめきが増す。

「氷の乙女……」
アイス・メイデン

その異名と共に領邦軍の間では広く知られている空色の髪を頭の横で一纏めにしたその女性の姿に領邦軍隊長は不愉快そうな声を発した。

「正規軍が何用だ、このクロイツェン州は我ら領邦軍が預かる地、貴様らに介入される謂れはないぞ」

「お言葉ですが、鉄道網の中継地点でもあるケルディックにおいては我々にも捜査権が発生することはご存知のことかと思えます」

敵意露わに睨みつけられながら女性将校は微塵も臆した素振りを見せず、反論できない主張に呻きを漏らした隊長を相手に淡々と言葉を返していく。

「ケルディックの町で我々が行った調査によれば、そちらの学生さん達が盗難事件の犯人であることはあり得ません。この場合は私達に預からせて頂いた方が無用なリスクは避けられると思いますが？」

「……………」

事件の背景を見透かした言い様に隊長の視線が強まるが言葉通り、それはラウラの処遇、公爵家への言い訳も立つこの段に至ってしまった彼ら領邦軍が妥協できる落とし所

だった。

「……良からう。撤収する、ケルディックへ戻るぞ」

「りよ、了解しました！」

隊長の指示を受けた兵士達がルドルフ達の包围を解き、隊長の後ろへと整理した。

「ちよ、ちよつと待てよ、そりやないだろ領邦軍、話が違うぞー！」

元から領邦軍、公爵家の決定的な関与を示す証拠は与えられていないのだから見捨てられた管理人達が身勝手な抗議を発するが、それを意にもかけず隊長は兵士達を引き連れその場から去っていく。

「……鉄血の狗が」

すれ違い際、女性将校に対して侮蔑に満ちた言葉を残して。

憲兵隊の隊員達がにわかに怒気を滲ませるが、当の女性将校が気にした様子も見せず片手を上げるとそれもすぐに鎮静化し、隊員達を落ち着けたその女性は解放されたA班の前へと歩み出た。

「トールズ士官学院の皆さんですね？ 帝国軍、鉄道憲兵隊所属、クレア・リーヴェルト大尉です」

整った容貌にその異名に似つかわしくない柔らかな微笑みを浮かべて名乗った女性にA班の皆が思わず一瞬見とれてしまう。

「調書を取りたいので、少々お付き合い願えませんか？」

彼女達の介入をもって、様々な思惑が絡み合った大市の盗難事件はようやくの解決を迎えるのだった。

届く為に

駆けつけた鉄道憲兵隊によつて管理人達は逮捕され、盗品も無事商人達の元へ返却された。

予想されたことではあつたが、管理人達に犯行を依頼したという人物は彼らに身元が明らかになつてしまうような情報を漏らしておらず、公爵家との直接的な関与を示す証拠も挙がらなかつたという。

大市の抱える問題が根本的に解決したわけではないことは皆にとつても気がかりではあつたが、鉄道憲兵隊の隊員がしばらくの間ケルディックの町に常駐することになつたらしく、これまでと比べればいくらか事情は改善される見込みがあるらしい。

事件について調書を取り終えたリイン、ラウラ、エリオットは商人達とオットー元締めに感謝の言葉を受けた後、クレア大尉と共に駅前広場までやつてきていた。

「その、ありがとうございました大尉。おかげさまで犯人達を逃がさずに済みました」
礼を口にするリインにクレア大尉は小さく首を振つて微笑みを浮かべた。

「礼を言われるほどの事はしておりませんよ、あれは皆さんの功績と言つて差し支えないでしょうから」

「え……？」

「私達は最後の一押しをしただけです、あのまま放つておいても領邦軍の方々は犯人達を逮捕する選択をしたでしょう、皆さんは十分に解決までの道筋を掴んでおられましたよ」

確信ありげにそう断言されてしまい、つい視線を交わしたりイン達の表情に照れが浮く。

「そ、そうでしょうか」

「ええ、むしろ余計な事をしてしまったのかもしれませんが。こういった状況への対処も含めての特別実習、なのかもしれませんから」

その言葉に自分達がこの事件へ関わろうと決めた朝の出来事を思い出すイン達だった。

「流石にそこまでは考えてないけどね」

横合いから掛けられたその聞きなれた声に意識を引かれる。

声の聞こえた駅へと繋がる道へ揃って顔を向けると昨日別れたばかりの教官、サラの歩み寄ってくる姿があった。

「サラ教官！」

「どうやら実習は片付いたみたいね、皆お疲れさま」

「教え子達に劳いの言葉を掛けクレアへと向き直ったサラはどこか探るような目つきをしていた。」

「まさかアンタが出張ってくるとはね、ひよつとして全部お見通しだったのかしら？」

「それは買い被りと言うものですよ、とある筋から情報提供は受けはしましたが。——サラさん、お久しぶりです」

顔見知りであるらしく相手の勝手を知った風なサラの言葉をクレアは涼しい顔で受け流しながら挨拶を返す。

そんな手応えの無さにサラは嘆息を交えながら何かを悟った風な反応を示す。

「なるほど、アンタの兄弟筋ね。随分抜かりなく立ち回ってらっしゃること」

珍しく剣呑な雰囲気を滲ませるサラに戸惑いながらもリイン達は内容が掴めない二人の会話に割って入れずにいた。

しかし不仲というわけではないのか、気分を害した様子も無くクレアはリイン達へ向き直った。

「それでは皆さん、私はこれで失礼します。特科クラスⅦ組、私も応援させて頂きますね」

折り目正しい敬礼を見せながらそんな言葉を残し、クレア大尉は颯爽と駅の方へ歩み去って行った。

軍人にしては優雅さすら感じられる女性のそんな後ろ姿を見送るとエリオットがふっと息を漏らし緊張を緩める。

「なんだか軍人には見えないような人だったね」

「しかし精鋭揃いの鉄道憲兵隊の中でもあの女性の身のこなしは際立っていた、おそろく只者ではないだろうな……サラ教官のお知り合いと見受けたが？」

管理人達を連行する最中にも全く隙を見せなかつた憲兵隊隊員達の練度を目の当たりにしたリイン達だったがその中において隊長という身分を差し引いてもクレアの存在は際立っていた。

そんな彼女と見知ったやりとりを見せた自身達の教官ヘラウラが問い掛けるとサラは隠す、というより説明を面倒がるように言葉をぼかす。

「ま、色々あってね、それよりそろそろお暇する時間——あら、ラウラはその腕、大丈夫なの？」

「痛みはもうほとんどありませんし、教会の教区長殿に湿布薬を処方してもらいましたので問題は有りません」

ラウラの左手首に巻かれた包帯に気づき尋ねたサラだったが、本当に支障なさそうな彼女の様子に安堵する様子を見せる。

「そう、ラウラがそんな怪我するなんて、どうやら結構なトラブルに出くわしたみたい

じゃない」

「教官はその可能性も見越していたように見えましたか……う？」

前日、サラがケルディックを去る間際に見せた意味深な言動を思い出しラウラはつい窺うような目で彼女を見てしまう。

「さっきの大尉さんじゃあるまいし、そこまで予想はしてないわよ。それより姿が見えないけどアリサとルドルフはどうしたの——？」

言及した瞬間に皆が気落ちするような素振りを見せたことで大した心配をしていないようだったサラも僅かに表情を曇らせる。

「まさか——」

「いえ、ルドルフも遭遇した魔獣との戦闘で怪我をしましてしまったんですが、大事には至っていないそうです。まだ教会で診てもらっていて、アリサに付き添ってもらっています」

ラウラの診療後、最も重傷だったルドルフだけはクレア大尉らに事情を説明し聴取から外れ治療を受けることになっていた。

ラインがこの場に二人が居ない理由を説明したことでサラも再び安堵の息を漏らす。

「まったく驚かせるわね、揃って変な顔するから何かあったかと思っただじゃない」

「すみません……そういえば、二人までどうしたの？」

ルドルフが負傷する遠因となつてしまつたのではないかと気にしていたエリオットはリインらまで気を落とすような姿を見せていたことに疑問を發する。

「うん……う？　ああ……ルドルフから私の身分を利用したことについて謝られてしまつたのを思い出してしまつてな」

教会での別れ際、領邦軍とのやり取りに貴族としての身分、光の劍匠の娘であることを無断で利用したことを気にかけていたらしいルドルフからラウラは謝罪されてしまつていたのだつた。

「氣にする必要はないと言つたが……むしろあの場では私の方から名乗つて出るべきだつたな」

胸に手を当て、氣を改めるようにラウラは言葉を重ねる。

「みだりに權利を振りかざすものではないと戒めてきたつもりだったが、それを振るう場所を見失つてしまうようでは本末転倒だな。」

劍もただ飾つておくだけでは錆びつくというもの、帝国貴族の末席に名を連ねる者としての自覚を改めねばなるまい」

リインとのやり取りだけでなく今回の實習で得た經驗はラウラに貴族としての自分の立場についても意識の変化をもたらしていた。

そんな彼女の姿にリインもまた思うところがあつたらしく、しばらく閉じた臉を開い

た彼の瞳には決意の色が浮かんでいた。

「俺も……いい加減はつきりさせておかなくちやならないことがあるな。皆揃ったら伝えたいことがある、聞いてもらってもいいか？」

真剣な面持ちでそう告げるラインに瞠目しながらも、すぐにラウラとエリオットはしつかりと頷いてその意思を受け取る。

そんな三人の様子を見守っていたサラの表情には柔らかな笑みが零れていた。

「ふふ、どうやら皆良い経験が出来たみたいじゃない、これはB班と違ってレポートにも期待できそうね」

「そういえばサラ教官はパルムに行ってきたんですね」

「ガイウス達の方は大丈夫だったんですか？」

ラインとエリオットが問い掛けるとサラは腕を組みながら苦い顔になり、その反応だけで生徒達はおおよその状況を理解してしまう。

「うーん……まあ予想通りというか、やらかしてくれちゃってるわねあの二人が。ま、その話はあとあと、そろそろトリスタに帰るわよ、準備しなさい」

あの二人、というのが誰と誰の事を指し示しているのかは聞くまでも無く、B班の面々を心配しながらも三人はアリサ達を迎えに行くべく七耀教会へ足を向ける。

「――」

その瞬間、リインとラウラが意味ありげな視線を交わしていたのをサラは見逃しておらず、二人が抱いていたもう一つの気がかりに勘付きながらも彼女はそれを口には出さずに後ろから見守るように教え子達の後へとついていった。

「それでは私は失礼するよ。……この部屋はしばらく使ってくれて構わないからゆっくりしていきなさい」

「ありがとうございます教区长様、お言葉に甘えさせて頂きます」

診療用の部屋を後にするケルディック七耀教会のジルベル教区长を頭を下げ見送ったアリサは扉が閉められると僅かな間立ちつくしていたが、やがて室内の寝台に腰掛けたルドルフへと振り向く。

「申し訳ありませんアリサ、お付き合い頂いてしまつて」
「……………」

返事を返すことなく黙つて隣へと座ったアリサの沈痛な面持ちに言葉を継げずルドルフもそれきり口を閉ざしてしまふ。

暫しの間沈黙が続き、それを破ったアリサの声音は微かに震えていた。

「……いつからなの、って聞くまでも無いわよね。うちに来たときから、なんでしょうれ」

「ええ、その通りです」

打ち身と裂傷の激しかった上半身を診てもらったルドルフからは消毒液と薬——そして鉄の匂いが漂っていた。

身に着けた黒い袖無しのインナーから覗く彼の肩から先は黒鋼の色に覆われ、それが手甲の類でないことは容易く見て取れる。

腕を模して造られた金属製の導力器、それが彼の本来あるべき人の生身を代替している存在だった。

服に隠れているが両の脚、大腿の半ばから先も同様、欠損した四肢を人工物によって補った、ルドルフがアリサにすら隠していた姿。

「導力義肢——実現していたのね」

「まだ課題も多いですが、セイランド社からの技術供与が受けられたことで、実用性は向上しています」

未だ試験段階にあるかと思っていたその機構が目の前で本物の四肢と変わらないまでの精度を発揮していることに、レミフェリア公国に拠点を持つ大陸でも随一の医療機器メーカーの名を出されたことでアリサも納得を示す。

かの企業とラインフォルトの技術を以てするならばこの発達ぶりも領けない話ではなかった。

それと今彼女の目の前にある問題はまた別の話ではあったが。

「ルデイ……その、どうしてあなたは……」

「アリサ……」

言いづらそうに苦悩しながら口元をまごつかせるアリサの姿を黙って見ていられるルドルフではなく、彼が全てを打ち明ける決心をするのにそう時間はかからなかった。

「どうしてこの両腕と両足を失ったのかについては覚えておりません、僕にはレミフェリアの病院でベッドの上にしたときからの記憶しかありませんでしたから」

ハッと目を睜り、聞き入るアリサにルドルフは淡々と自身が記憶する最も過去の出来事を語り始めていた。

六年前、ある事件に巻き込まれたというルドルフは四肢を失う重傷を負いながら奇跡的に命を取り留め、彼を保護した組織の計らいで医療大国であるレミフェリアに搬送されたという。

彼の容態において外傷だけにとどまらなかった深刻な問題が浮き彫りになったのはそれからのことだった。

「お医者様や看護師の方がとても熱心に励まして下さったことを覚えていますが、

当時の僕はそれに対して本当に何も、感じていませんでした」

医師達を困惑させたのはルドルフが自分の置かれた境遇を辛いとすら感じなくなつてしまつていたことが大きい。

悲嘆に暮れるわけでもなく、年端も行かない子供がただ現状を受け入れてしまつていく異常性。

感情というものは人が生きる上で重要なエネルギーでもある、手足と共にそれを失い日々を寝たきりで過ごすルドルフの衰弱ぶりは明らかで手の施しようがない日々が続いていた。

「そんな時でした、イリーナ会長、そしてシャロンさんに出会つたのは」

当時からラインフォルトとセイランド社の技術提携は構想されていたらしく、その一環として医療の先端技術臨床の場である大学病院へ会長らは視察に訪れていた。

感情を呼び起こす切っ掛けにでもなればと、外の景色を見せるため看護師によつて車椅子に乗せられていたルドルフは偶然にも廊下で二人と遭遇し、そこで目を合わせてしまったイリーナに付き従う女性の碧い瞳、それに初めてルドルフの胸の内は揺さぶられることになる。

その女性は手足の無いルドルフを目にしながら憐れむでもなく、ただ見返していた。まるで少年の姿が悲惨なものでもなんでもないかのように、メイドである筈の彼女が

どうしてそんな目をする事ができるのか、純粹に興味が湧きおこる。

無意識に手を伸ばそうとし——そこで初めてルドルフは呆然と、自分が必要なものを失っていることに気づくのだった。

その行動に戸惑う看護師の前でイリーナは動じることもなく、案内をしていた職員にルドルフの事を尋ねる。

彼がその病院に移された経歴を聞き終えるとそんな主人と視線を交わしたメイドの女性、シャロンは何も語らずただ招くように掌を見せた手を伸ばした。

目を疑うかのようにルドルフは瞬きし、変わらず手を差し伸べるシャロンの姿を凝視すると、再び無い腕を伸ばそうとしもがきはじめた。

車椅子から転げ落ち、痛みに震えながらも、今持てる唯一の衝動に突き動かされるように。

ほんの僅かな距離を死にももの狂いでようやく埋めた先に立っていたシャロンはいつの間にかスカートが床に触れるのも厭わず膝をつき、ルドルフの途切れた腕をその掌に迎えてくれていた。

不様にもがく様を称えるように見上げた先で彼女が浮かべていた淑やかな微笑みは今でもルドルフの記憶に鮮明に焼き付いている。

手を差し伸べる、結果としてたったそれだけの行為でルドルフは失った四肢への渴望

を甦えらせてしまい、初めて涙を流し嗚咽するのだった。

そんな少年の姿がイリーナとシャロンに何を思わせたのか、翌年試験段階に入った導力義肢のテスト要員としての誘いを持ち掛けられたルドルフは一も二も無くその提案を呑む。

「リハビリと日常生活が送れるまでの義肢の慣熟には適合手術から二年程かかったでしょうが、そこから先は以前にもお話した通りです」

ただ死に行こうとしていた自分に再び手足、そして生きる道標をもたらしにくれたイリーナ、シャロンに対する思いは未だ感情の全てを取り戻していないルドルフの中にあつてもはつきりと意思づけられている。

試験運用が進んだことで自由に動けるようになった余暇をラインフォルトに尽くすために費やそうと思ひ至らせるには十分すぎるほどに。

「そう、色々納得したわウチに来たばかりのあなたが妙に危なっかしかつたのもそのせいね」

「あの頃のこととは……申し訳ありません、まだ調整が不完全だった時期になりますね。実のところ導力義肢は実用化にはまだ程遠い段階です」

「……? あなたを見てるともう十分な仕上がりに見えるけど」

実家のペントハウスや寮での仕事ぶりから彼の動きが生身の人間と遜色ないもので

あることは一目瞭然だったが、アリサの疑問にルドルフは首を振ってみせる。

「体の反応だけを拾った動作では未だ精度が不十分のようです。僕が装着しているものは特別仕様——戦術オーブメントのように僕個人と同期し、細かな動作制御を行っています」

その説明にアリサが思い出すのはオリエンテーリングでルドルフが語った導力杖についての情報、そしてその夜に彼から明かされた体質のことだった。

「つまりその義肢は——あなたみたいな人にしか扱えないってことなのね」

「はい、流石お嬢様です——」

察しの良いアリサについて名前と呼ぶことを忘れてしまったルドルフは鋭い眼差しで見られている事に気づき息を詰める。

しかし彼女がそんな目を向けた理由は呼び方を戻してしまったことなどではなかった。

「戦術オーブメントはあくまで導力魔法の術式展開を代行しているだけ、魔法を行使しているのが使用者であることには変わりないわ」

「——」

アリサが告げた内容は導力魔法が扱う個人によって威力に差が出てしまう理由でもあり、一般的にも知られている事実である、

彼女が何を言わんとしているのか、すぐに察してしまったルドルフは表情を取り繕う余裕を失くしてしまふ。

「少なからず使用者には負担がかかる。そんなものをいつも使つておいて、あなたに負担は無いの?」

「……動作制御にかかる負担はごく僅かで下位のアーツほどありません。日常に支障が出る恐れはないでしょう」

「——つとぼけないで!」

抑えつけていたものが弾けてしまったように、アリサはルドルフへ迫りながら叫ぶ。「悔しいけど、私はラインフォルトの娘よ。導力器に関する知識はそれなりに学んできたわ。」

あなたの腕と脚に組み込まれるものはそんな容易いものじゃないでしょう!」

教区长からの治療後、ルドルフは四肢の機構にまで損傷が至っていないかを確かめるために外装を解除し内部を確認している。

そしてルドルフの傍から離れようとせずその場面に立ち会ったアリサは彼の手足に組み込まれているのが義肢としての機構のみではないことを見抜いていた。

感応式制御について伏せておくべきだったと考えるも既に遅く、語るに落ちたルドルフにもはや言い逃れは出来ない。

「どうして、そこまでするのよ……いくら恩があるっていつても、今のお母様がただの善意で人助けをするような人じゃないって、わかるでしょ……」

「はぐ」

それはアリスが嘆き、敬っているルドルフも事実として認識していることだった。

アリスの母イリーナは徹底的な現実主義者、損得勘定を抜きにして彼女が動くことは無いだろうとルドルフですら思う。

導力義肢の共同開発にしてもセイランド社からの供与される技術がラインフォルトに利する価値を見出したから着手したのだろうと予測するのに疑いは無い。

決してルドルフの境遇を憐れんで救いの手を差し伸べたわけではないだろう。

しかし一つだけ、ルドルフにはアリスに伝えておかなければならないことがあった。

「アリス、まず申し上げさせて頂きますが、僕の手脚にこの機構を組み込むことは会長から強要されたわけでも、依頼されたわけでもありません」

「……え？」

それは揺るぎない事実、イリーナ・ラインフォルトという女性はルドルフに導力義肢の試験運用を任せたものの、決して無理強いはしなかった。

むしろ一定の段階までテストを終えた段階で契約を続行するかは自由にされている、彼女は人の意思を捻じ曲げるような真似はしていない。

「何か少しでも自分が協力できることはないかと技術者の方々に相談して回った折に、シムミット博士が僕個人の試験協力を認めて下さったんです」

知る人ぞ知るその人物の名にアリサの瞳が見開かれる。

三高弟と呼ばれる導力器開発の祖、エプスタイン博士の三人の弟子の一人にしてエレボニア帝国における導力工学の第一人者。

その卓越した開発力は帝国の導力技術の発展に大きく寄与し、ルーレ工科大学の学長を務めるその人物はラインフォルト社にも多大な恩恵をもたらしている。

一方でその人格は何より己の知的好奇心を満たすことを是とし、技術開発の為ならば周囲を驚かせるような試みに出ることも珍しくは無く、そんな人物からするならルドルフは格好のテスト要員であつたらう。

再び食つて掛かろうとしたアリサだったが、かつてないほど真つ直ぐに、柔和な表情をつくることもせず見つめてくるルドルフ、以前にも目にした胸の内をさらけ出そうとする彼の表情に開きかけた口を閉ざしてしてしまう。

「アリサにご心配をかけてしまったことはお詫びします、ですが僕はどうしても——手を伸ばしたかったです」

「手を……つて、何を」

「ラインフォルトで学べば学ぶほど、会長やシャロンさんの底知れなさは深まっていく

ばかりでした。

ですが僕は——あの方々のことを知りたい、この手を、届かせたい」

果たして本当に届くかどうか、もしかするなら自分の器では一生をかけたとしても届かないのかもしれない。

それでもルドルフの胸にはあの日生まれ、生きる切っ掛けとなった衝動が深く根差し
ていた。

この人達の元へ、届きたいと。

「ですから、僕は手を伸ばすことを止めたくありません。たとえ歪な形であったとしても、それが僕の生きる理由ですから」

恩を返すというのが目的であるならそれはもつと深い、ルドルフ自身の存在理由。

憧憬ともまた異なる、一度は生きる気力を失った少年を突き動かした何よりも強い欲求だった。

理解に苦しむことであるが故に並大抵のことでは彼が気変わりを起こすことはないだろうと悟ったアリサは入学式の日の夜のように、何も言えなくなってしまうそうだった。

しかし——

「……あなたの気持ちは分かったわ」

アリサにもまた彼に対して言わなければならぬことがあった。

「確かにちよつとやそつと頑張つた程度であの人達に届かないのも分かる、でも——あなたは自分のことを見直すべきよ」

「……僕の、ことを？」

何を言っているのか分からないとばかりの反応を示すルドルフに、アリサは柳眉を吊り上げ手を振り上げた。

その動きにリインが頬をはたかれたときのことを思い出し、彼女に怒りを買つていてもおかしくはないと思ひ込んでいたルドルフは齒を食いしばりそれを受け止めようとする。

だがそんな予想に反して、振るわれたアリサの手はルドルフの顔を横切り首へとかかり、少年の体を抱き寄せていた。

顔が隣り合い表情を覗き見ることができなくなつたが、触れ合つた少女の体が微かに震えていることに気づきルドルフは身を固める。

「……怖かつたわ」

「——アリサ？」

「あなたが私を庇つて、死んじゃうんじゃないかってぐらい跳ね飛ばされて、怖かつたのよ」

アリサの口から零れ出る、逃すことができたことに安堵するばかりで思いもしなかった彼女の心情がルドルフを瞠目させる。

「あなたが無茶をして傷付けば、周りの皆がこんな思いをするのよ。そんな事を繰り返して得られた成果なんて、私は認めたくない。

今日私はあなたに助けられたわ、でも……そんな体だからって無茶ばかりしないで、お願いよ」

触れ合った少女の体から感じるぬくもりと、耳元で囁かれる胸の内へ溶け込んでいくような優しい声音。

否応なくルドルフは悟らされてしまう、自分の身ならどうなっても構わないという思い込みが自分さえ良ければいいと、彼女達の気持ちをないがしろにしまっていたこと。

母が子へ、姉が弟へ向けるようなその気持ち、自分は彼女に慈しまれていたのだということを。

——っ。

同時にルドルフは脳裏を何かの面影がよぎると同時、視界を揺らすほどの頭痛に見舞われる。

思わず苦悶の声を漏らしてしまいそうなのそれが何故生じたのか、理解すらもできな

い。

それよりもルドルフには今この場で口にしておきたい言葉があった。

「……申し訳ありませんでした、アリサ。……それと、ありがとうございます」

「……うん、私も、助けてくれてありがとう、ルデイ」

支えるべき存在と思っていた少女から思い知らされた自分の未熟さ。

この日ようやくルドルフはⅦ組という存在を仲間として意識することが出来たのか
もしれなかった。

第二章

Ⅶ組の朝【二】

第一回特別実習の終わりから一月近くが経ち、春の訪れを告げるライノの花も散り雨期の近づく新緑の季節。

トールズ士官学院では高等教育が本格化し軍事学など士官学院ならではの授業も始まり日々の密度が一層増していた。

そうした学院の過酷なスケジュールに追われながらもルドルフらⅦ組メンバーは五月の末、二度目の自由行動日を迎えることとなる。

とはいえ寮での日常にまで大きな変化は見られず、先月の自由行動日同様にルドルフは朝から寮生らに振る舞った朝食の後片付けに取り掛かっていた。

前回の自由行動日と比べ取り掛かりが少し遅くなってしまうだったが、時間に余裕のある日でもあるので特に支障があるわけではない。

しかしルドルフはその遅れた要因、まがりなりにもⅦ組の面々が食卓を共にした前回と違い一部の者達の間で朝食の時間がずれてしまったことが気がかりになっていた。

普段ならばその程度のこと、通常の登校日ならともかく半ば休日の生活スタイルにま

で口を出すようなお節介は控える彼だったが。

——やはり、上手く行っていないようですね。

時間のずれた——否、一部の者が特別実習後のある出来事により顔を合わせないようにずらしているのだろうことはルドルフにも察しがついている。

その出来事とは誠実な人柄でクラスメイト達と早期から親交を深めていたリインによる自身の身分についての告白だった。

実習からトリスタへと戻った翌日、彼は皆の前で彼の家、シユヴァルツァーがノルティア州北部、ユミルの地を治める男爵位の貴族身分であることを明かした。

つまり彼はVII組の存在が無ければ貴族クラスのI組かII組に属するべき貴族身分なのだった。

只一つ、リイン自身は現シユヴァルツァー家当主の実子というわけではなく、幼い頃かの家に養子として迎えられ貴族の血を引いてはいないとのことらしい。

——そんな複雑な事情もあり特別オリエンテーリングの際、行動を共にしたマキアスから身分を問われた彼は自分に“高貴な血は流れていない”とはぐらかす形で答えてしまったのだという。

そうしてその日までリインの事を同じ平民階級だと思い込んでいたマキアスはあからさまに彼の事を避けるようになり、VII組メンバーの間にまた新たな不和を起こしてし

まっている。

トールズへ入学してからこちら、始まりにトラブルを抱え込んでしまった故か、今ではアリサと気さくに触れ合うようになってくれている彼にはルドルフ自身も借りに思っている出来事があり、何か解決の手伝いが出来ないかと考えることが近頃は増えているのだった。

とはいえマキアスの貴族嫌いぶりはユーシスとの確執もあり誰もが知るところ、有効な手立てが思いつくわけでもなく——洗い物を終えたルドルフが前掛けを外しながらキッチンを出ると。

「ああ良かった、終ったところみたいだな」

当のマキアスが小箱を手にとってきたところだったらしく、作業の合間だったルドルフを見て安心する姿を見せていた。

そうした様は気の良いクラスメイトそのものであるだけに、リインやユーシスに対する態度との落差がルドルフの頭を悩ませる。

一体彼の何が貴族に対してこうも嫌悪感を掻き立てているのか——ひとまずその気がかりを置いてルドルフは用のあるらしい彼へと歩み寄る。

「どうされましたかマキアス？」

「なに、部活動に行くところだったんだが宅配業者と出くわしてね、君宛ての荷物らし

い

そう言つてマキアスが差し出した小箱を受け取り、添付された伝票に記載されていた送り先にルドルフが微妙に目を瞞る。

もとより彼に対して荷物を送つてくる人物の心当たりなどわずかしかないものだが、それでも彼にとつてその名前は特別なものであつた。

「シャロンさんからですか、この重さですと中身は……ふふ」

先達の使用人である女性からの送り物であるらしい小箱の封を開いてみると、中には緩衝材と共に手作りである瓶詰ジャムが詰められている。

これもまたルドルフが未だ届かない領域の一つ、店売りの商品と比べても遜色ない、どころか高級ホテルのレストランで出されてもおかしくない出来栄えの逸品だ。

月の節目に近況報告にと送つた手紙への返信らしき封筒が共に添えられ、つい口端を緩めたルドルフだったが、横でその様を見ていたマキアスが珍しいものでも見たかのようによくに目を丸くしたのに気付き気を取り直す。

「確かに僕宛ての品のようです。受け取つて下さつてありがとうございます」

「あ、ああ……別にこの程度なら気にせずとも構わない、君には日頃から世話にもなつて
いることだしな」

凝視してしまつていたのを誤魔化すように軽く首を振りそんなことを言うマキアス。

何故彼が今のような反応を見せたのか理解できなかつたルドルフだが問い掛けるほどのことでもないかと判断し、今受け取つた小箱の中身からふと思いついたことを優先する。

「部活動に行かれるとのことでしたね、マキアスは確かチェス部だつたでしょうか」
「ん？ そうだ、正確には僕が入つたのは平民生徒用の第二チェス部、ということになるけれどね」

マキアスの言う通りチェス部は他と異なり貴族生徒のものと平民生徒のものど部自体が貴族生徒の第一、平民生徒の第二、と区別されているらしかつた。

その区別理由は平民階級とは部活動を共にしたくないという貴族生徒の身分意識によるものらしく、彼がその事実を苦々しく思っていることは眼鏡の奥で険しくなつた目つきから容易く見て取れる。

この場ではその嫌悪感情にまで踏み込むつもりは無かつたルドルフは早々に話題を切り替えるために届けられた小箱から橙色のジャムが詰まつた小瓶を一つ取り出して見せるとマキアスへその提案を持ち掛けた。

「ルーレの——知人からジャムを頂いたんです。折角ですからジャムサンドでも作ろうかと思ひますので、部活動の方へお持ちになりませんか？」

その提案にマキアスは意表を突かれたようだったが、腕を組み少しの間考え込み。

「……部活中の糖分補給としては魅力的な提案だが部室のある生徒会館一階には食堂もあるし、そこまでしてもらうのは流石に気が引けるよ。

すまないが厚意だけ受け取らせてくれ」

「そうですか、残念ですが致し方ありませんね。それではお気を付けて——」

ルドルフも無理強いはずまいとあつきり引き下がろうとしたのだったがその時、リビングの扉が開かれ一人の少女がその場へ足を踏み入れてくるのだった。

「ルデイ、居る？ 今日リイン達と行く旧校舎の探索についてだけど——あら、マキアス……ごめんなさい、話し中だったみたいね」

やってきたのはラクロス部の用具が入った手提げを片手にしたアリサだったが、二人の姿に気づくと気まずそうに言葉を切る。

その様子からすると言葉を言いきらなかったのは会話を遮るのを悪く思ったというより、マキアスの前でリインの關係する話題を持ち出すのを躊躇ったのかもしれない。

そんな氣遣いはマキアスにも伝わってしまったようで、彼もまた氣まずさを誤魔化すように眼鏡を掛け直していた。

「いや、こちらの話は丁度終わったところだから氣にしないでくれ。それではルドルフ、僕はこれで——？」

二人の話題に邪魔になると判断したのか早々に立ち去ろうとしたらしいマキアス

だったが、踵を返したところでリビングの扉前で立ち止まったままのアリサが固まり、ある一点を凝視しているおかしな様子に気づいてしまう。

「アリサ君、どうしたんだ？」

「……ルディ、それって、まさか」

そこでアリサが凝視しているものがルドルフの手に握られた小瓶であることに二人の男子が気づき、ルドルフの方は同時に手にしたそれ、シャロン手作りのアプリコットジャムが彼女の大好物であることを思い出すのだった。

やがてハツと我に返ったように瓶から目を反らし、咳払いしてみせるアリサだったがその視線はチラチラとルドルフの手元へ向けられている。

「ル、ルディ。今日の探索だけど、私とラウラが参加するって話は聞いてるわよね？」

「はい、一緒できないのはとても残念なのですが……アリサ達の仰られたことはもつともでしたので、今回は自重致します」

それは事前に取り決めた、学院から今回の自由行動日でも旧校舎の探索を依頼されたラインに協力するメンバーの人選についてのことだった。

今後の特別実習でルドルフとアリサが別の班分けになることも予測され、その時になつてアリサを氣遣つてばかりいる彼が平静でいられるよう、いわば慣らしておく目的も兼ねて今回ルドルフは彼女達が加わった探索メンバーから外されることとなつてい

る。

いざという時のことを考えてしまうとルドルフにとって辛い采配だったが、実習の班編成について我儘など言えないことは彼にも理解できているので渋々とその案を受け入れたのだった。

「ならいいわ、オリエンテーリングの時みたいにくっそりついてきたりしないようにね。

……それで、話は変わるんだけど」

口元をまごつかせ、脇に居るマキアスのことが目に入っていないかのように彼のことを気にかけてアリスは探索の話題を済ませてしまう。

その脇でアリスが扉前に立ったままなこともあり退散する機会を逸してしまったマキアスは無言になってしまっていた。

「私、午前はラクロス部の活動に出るわけだけど、たまには部の友達と休憩時間にお茶でもしようかと思うのよ。それで……何か甘いものでも持ち込めれば都合が良いんだけど……」

珍しく歯切れ悪いアリスの物言いにマキアスは閃くものがあったらしくルドルフへ視線を移していたが、彼の方はきよとんとした様子で意図を理解できずにいる。

「持ち込み、ですか。しかしアンゼリカ先輩とも話したのですが、僕の方で何か用意してしまうと他の部の方からアリスに不自然な印象を持たせてしまうのではないでしょう

か」

「う……それは、そうかもしれないけど……」

顔を赤らめながら唸り始めてしまったアリサに戸惑うルドルフ。

そんなすれ違いを起こしてしまっている二人の姿に横でマキアスは一つため息を漏らすと、一度は背を向けたルドルフへと向き直る。

「ルドルフ、さっきのジャムサンドの話だが」

「マキアス？」

ジャムサンドと口にした辺りでアリサの顔が勢いよく自分へ向いたのを横目に確認したマキアスは確信を深め言葉が続ける。

「気が変わってね、やっぱりお願いしても構わないだろうか」

「それはもちろん、すぐにご用意させて頂きます」

「それとだが」

横からのアリサの羨んでいるようなその視線、好物を用意して欲しいと頼むことが子供のようで気恥ずかしさのあまり頼みづらかったのだろう彼女に代わりマキアスはそれを口にする。

「ついでにアリサ君の分も用意してはどうだ？ 個人なら不自然かもしれないが、寮生

の間で手料理を振る舞うというならおかしいところは無いだろう」

「！」

目を輝かせるアリサの珍しい姿にマキアスはつい頬が浮いてしまいそうになるのを堪えなければならなかった。

そんな真似をしてしまえば意地っ張りな面を持つこの少女は別に必要無いなどと強がりお膳立てが台無しになってしまいそうであったので。

「確かにそれなら……用意するのはジャムサンドなのですが、アリサはそれでも構いませんか？」

「——っ、ええ、十分よ。お願いできるかしら」

「承知しました、ではアリサの分もすぐにご用意致します」

ルドルフ自身もアリサの為に腕を振るえることは喜ばしいことであつたので、話が決まればすぐに軽やかな足取りで彼はキツチンへと舞い戻る。

そんな背を見送り途端に上機嫌となつたアリサの姿にマキアスは内心で胸を撫で下ろしていた。

「あ……その、ありがとうマキアス、便乗させてもらっちゃつて」

「いや気にしないでくれ、彼に世話になるのは僕も同じなんだからね。それに——いや、今日はチェス部の先輩と戦術研究会をすることになつてから僕にとつても都合が良
いんだ」

「そう？　でも、一応お礼だけは言わせて」

「ああ……君もよくよく義理堅いんだな」

苦笑いしジャムサンドが出来るのを待つ為にテーブルの椅子へ腰を落とすと、つい漏らしてしまいそうになった言葉が胸の内だけで呟くのだった。

——せめてもの罪滅ぼしにでもなればいい。

そんな周囲の貴族生徒と衝突ばかりを起こしている自分が他のクラスメイト達に迷惑をかけ、氣遣わせてしまっていることを自覚するが故に出てしまいそうになった言葉を。

罪悪感に胸を苛まれ、それでも尚捨てることができないほど、貴族に対する先入観は深く彼の奥底に根付いてしまっているのだった。

サンドイッチ用の食パン一斤を取り出しながらルドルフはポケットへしまいこんだ、キツチンに持ち込んだジャム入りの小箱からこっそりと剥ぎ取った伝票に記載されている送り主について思いを馳せていた。

アリサは一目でジャムがシャロンからの送り物であることを看破したようだったが、

そちらにまで注意が向かなかつたのは彼女にとつても幸いだったのかもしれない。

伝票に記載された送り主の情報、名前こそ隠されていなかったが、その住所はルーレ市であつても本来記載されているべきラインフォルト本社最上階のペントハウスと関わりがないものに偽装されていた。

ラインフォルトの間人であることを隠しているアリサに対する気遣いであるならば勿論それは必要なことなのだったが、これはあくまでルドルフに対する送り物。

そもそもアリサは家出同然にラインフォルトを抜け出した身であるので、本来シャロンにもアリサがツールズへ入学していることは知れていないはずなのだ。

そしてルドルフ自身はシャロンへの手紙においても自分がラインフォルト関係者であると隠しているなどと教えてもいなければ、アリサの出奔についても報告などしてない。

であれば、まるでこの第三学生寮にルドルフとアリサが居ることを把握しているようなこの偽装は偶然の気遣いにしては都合が良過ぎる。

「もしかするなら……あの方々にはもう全て筒抜けなのかもしれませんね」

アリサの動向について、彼女の母イリーナとシャロンが把握しているというならすべて説明がついてしまう。

その確信に近い予感をせめて彼女には気づかせないでおこうと、ルドルフは胸の内に

しまいこむのだった。

実技テスト【二】

月に一度の自由行動日が明けまだ二度目ではあるがもう一つのⅦ組にとって恒例となった専用カリキュラム、実技テストが行われる水曜日がやってきた。

何をやらされるか分からない状況では無いためグラウンドに並んだクラスのパーカーは先月と違いいくらかその面持ちに余裕が見られる。

「やっぱり今回もあのおかしな人形と戦わされるのかな？」

「さてどうでしょうね、気兼ねなく戦えるので実戦訓練の相手としてはとてもありがたい存在のようですが」

既にⅦ組の生徒は全員集まっていたが授業の開始の間にはまだ少し早い。

サラがやってくるのをルドルフは魔導杖を手にしたエリオットと言葉を交わしながら待っていた。

「戦術殻って呼ばれてたわよね、あんな高性能な自動人形初めて見たわ。」

サラ教官はあるツテから押し付けられたなんて言ってたけど、一体出処はどこなのかしら」

兵器メーカーでもあるラインフォルトの人間としてアリサもその出自については気

になっているようだった。

前回の実技テストで戦わされたあの傀儡、戦術殻は生徒達に致命的な傷を負わせないよう調整が施されていたような節があったものの、少し仕様を変えるだけで十二分に兵器として運用できそうな代物であった。

サラに対する追及もはぐらかされるばかりで結局その製造元は明らかになっ
ていない。

「気にはなるけどいずれにしても実戦の、それもARCCUSの連携を試されるような内容になるのは間違いないだろうな」

そのリインの言葉には会話に参加していた面々が頷いて同意を示す。

内容はともかくARCCUSによる戦術リンクの練度を確かめようとしているらしい実技テストの狙いについては皆おおよその見当がついていた。

「それならば旧校舎を探索した経験が活きそうだな」

「ああ、特にエリオットのアーツは前回より随分と冴えていたようだしな」

ガイウスが漏らした評価に思わずルドルフが目を向けてしまったエリオットは慌ててそんなことは無いとばかりに手を振る。

「か、買い被り過ぎだよ。今回はアリサもラウラも居てアーツを使う余裕が大分あったからそう見えただけじゃないかな」

「謙遜するでない、私もそなたのアーツ捌きは格段に上達していたと思うぞ。」

中位のアーツも使いこなせているようだったし、苦手な私からすれば驚くほどだったぞ」

裏表の無いラウラからまで誉められてしまうとエリオットは照れくさそうに顔を伏せてしまう。

特別実習で戦った大狒々、グルノージャと呼ばれているらしいあの自然公園のヌシから回収された七耀石が届けられそれを元にクオーツを増やせたことで戦術オーブメントの機能が充実したとはいえ、アーツ行使の技量を向上させるのは本人の努力によるしかない言えない。

密かに鍛錬を重ねていたのだからエリオットにルドルフが感嘆していると、その視線に気づいたエリオットは照れくさそうに頬をかいてみせる。

「……ひよつとしたらアーツに対する意識が少し変わったせいかもしれないね」

「アーツに、対する?」

「うん、特別実習で——ルドルフが教えてくれたじゃない」

エリオットがそう返すとルドルフもあの自然公園での戦いで彼にクオーツを託したときの事を思い出す。

ルドルフからするならば苦し紛れの励ましがそれだけの変化をもたらすとは考えられ

ず、屈託のない笑みを浮かべるエリオットをつい不思議そうに見返してしまふ。

「はい、皆集まつてるみたいね。それじゃ第二回実技テスト、始めましょうか」

そこでチャイムの音と共にグラウンドへサラが姿を見せたことで会話は打ち切られることになり、ルドルフがそのやりとりを柔らかな目で見守っていたアリサに気づくことは無かった。

皆の予想通り、今回の実技テストにおいてもⅦ組の面々は一部機能が強化されているらしい戦術殻と戦闘を交えることとなった。

ただグループ分けは前回と異なり、実習の成果を測る意味合いが込められているのかまず前回の実習でA班だったルドルフら五人。

こちらは実習の成果も十分でそれぞれの戦い方も十分に把握できていただけあつて戦術リンクも噛み合い、一体の戦術殻相手に五人という構成でありながら見事な連携で相手を戦闘不能に追い込んでいた。

特に戦術リンクの活用度合いの広がりが目覚ましく、二人のリンクを随時繋ぎ変えるのがやっとなつた前回と比べ彼らがときに三人以上でのリンクを繋いだ連携を見せた

ことでサラからも高い評価を受け問題となったのはその後、前回B班となったメンバーによるテスト。

「これは……なんて言ったらいいか……」

エリオットが言葉を濁したように、その結果は散々と言って差し支えないものだった。

戦闘自体は長時間に及ぶものではなかったが油断すれば大怪我也有り得る戦いの緊張と疲労に肩で息をする元B班メンバー。

一人ファイーのみは平然と佇み余裕のある様子を見せていたが、瞳に漂う気怠げな気配が普段より数割増しになっていることに気づく者は気づいている。

なんとか戦闘不能状態にまで戦術殻へダメージを与えることは出来た彼らだったが要した時間も手間も、その内容はA班と比べお粗末な有り様だった。

原因となったのは言うまでも無く口惜しそうに歯噛みしている男子二名、ユースとマキアスの存在。

戦術リンクどころかまるで連携をとるつもりが無い二人の行動はガイウス、エマ、ファイーらの連携まで乱してしまい、怪我人が出ることの無かったことだけが不幸中の幸いといえた。

「……分かってたけどちよつと酷過ぎるわね、そつちの男子二名はせいぜい反省しなさい」

い。

「この体たらくは君達の責任よ」

普段になく厳しい言葉でユーシスとマキアスを責めるサラだったがそれが事実であることを誰もが、当の二人でさえ理解できてしまっているせいか誰の口からも反論は上がらなかった。

こうして明暗がはつきり分かれる形となつてしまつた実技テストが終わり、前回同様サラから週末に待ち受ける特別実習の班分けが記載された用紙が配布されるのだったが、生徒達の誰もが懸念を抱かざるを得ない内容がそこには記されていた。

「バリアハートとセントアーク、帝国ではよく聞く地名だな」

ガイウスが呟いたように次の実習地となるのはA班が東部クロイツエン州の州都であるバリアハート、そしてB班が南部サザラント州の州都である旧都セントアーク。

互いの班でつり合いが取れているとは言える実習地についてはさておき、皆が気にしたのは班の構成。

誰かがそれを指摘するまでもなく、その懸念の元となつている少年二人が怒りを露わにした。

「——冗談じゃない！」

いつぞやの再現のように、むしろそれよりも激しい感情が込められたマキアスの叫

び。

「いい加減にしてくださいサラ教官！ 何か僕達に恨みでもあるんですか!？」

憤るマキアスの隣では奇しくもユーシスが冷ややかな目をしながら同じ意見を発していた。

「茶番だな。こんな班分けは認めない、再検討をしてもらおうか」

予想通りに普段からいがみ合っている二人がサラへ不満を爆発させる。

セントアークへ赴くB班に選考されたリイン、ガイウス、エリオット、アリサ、ラウラの五名にはこれといった不安要素も無い一方。

バリアハートへ向かうこととなるA班のメンバーはルドルフ、ユーシス、マキアス、エマ、フィー。

先のテスト結果を振り返るまでも無く、ユーシスとマキアスの二人が組み込まれた班構成はこの上ない不安材料となる。

実際に先月の特別実習で二人は殴り合い寸前となる喧嘩まで巻き起こしてしまったらしくレポートもE評価、Ⅶ組独自の特別カリキュラムという枠組みでなければ落第レベルの低評価だ。

このままではその二の舞を演じることとなってしまうことも予想に固く、同じ班となった人の良いエマですらも困惑するばかりで二人を止めることが出来ない。

無論それはあくまで彼ら個人の感情の問題、士官学院生としてARCSの試験評価という役割を任されたⅦ組に参加した以上それが命令を全うする軍人としての責務に背いた我が儘に近いものであることは彼らにも理解できる筈だったが、二人の間の軋轢はそれを度外視させるほど深刻なものとなっていた。

「うーん、アタシは軍人じゃないし、命令が絶対だなんて言わないけどね。」

——Ⅶ組の担任として君達を適切に導く使命がある」

士官学院の教官という立場にありながらそんな態度自体を強く責める素振りを見せないサラだったが二人に向かい合うその表情はいつの間にか真剣味を帯びている。

その言い分によればこの班分けは嫌がらせというわけでもなく、あくまで二人の抱える問題を放置するのでなく解決しようとする、なんらかの意図が込められているらしい。

ただ、その後に彼女がつけ加えた言葉だけは明らかにそんな教官としての立ち居振る舞いから逸脱したものだつた。

「それに意義があるなら、いいわ。」

——二人がかりでもいいから、力づくで言うことを聞かせてみる？」

にこりと笑みを浮かべサラの口から言い放たれたのはとんでもない暴論。

そして男子二人に侮られているという印象をこの上ないほど植え付けるような挑発

そのものだった。

乗ってしまい、失敗すればもう拒むことは出来なくなる上に、戦術教官として雇用されている彼女の實力は刃を交えずとも並のものではないだろうと窺い知れる。

それでも出来るわけが無いとばかりのことを言われてしまい、あつさりと引き下がれるほど達観している二人ではなかった。

ユーシスとマキアスの二人は無言で静かな怒りを湛えた視線を交わすと、戦術殻との戦いの後収めた武装を再び手にしてサラの前へと歩み出ていく。

「お、おい二人とも……」

「止めようよ……」

流石にリインやエリオットが諫めようとするも二人は聞く耳を持たない様子で言葉を返すことすらしない。

「フフ、流石に男の子がこうまで言われたら引き下がれないかしら？」

そういうのは嫌いじゃないわ！」

言うやサラはコートの内から取り出した得物を両手に構える。

右手には導力器仕込みの強化長剣、左手にはブレードと揃いの赤紫色で構成された拳銃ハンドガンタイプの導力銃。マゼンタカラー

その武装の凶暴な外観に対峙した二人ですらも一瞬息を詰めたじろいでしまう。

「……………くっ！」

だが今更怖気づくわけにもいかずユーシスは剣を、マキアスは散弾銃をそれぞれ構え戦闘体勢に移行していく。

「乗って来たわね。リイン——いや、そうね……………ルドルフ、加勢してあげなさい。それで少しは勝負になるでしょ」

一瞬リインへ視線を向けながらもサラは思い直したようにルドルフへ呼び掛けていた。

二対一どころか三体一でも構わないとするその姿勢にユーシスとマキアスが表情をより険しくし、教官への反抗に加わるような行為に躊躇するルドルフだったが。

「……………承知しました」

「ちよつと……………サラ教官！」

「申し訳ありませんアリサ。——放っておくのもいささか気に病みます」

アリサが心配の声を上げるが、実習で同じ班となった二人に何かあつてはまずいと判断したルドルフは言葉の後半を二人に聞こえないように言い残してサラの前へと歩み出る。

左手のシールドに仕込まれたARCSに戦術リンクの反応が全くないことから連携を取る気がないだろうことが予想できてしまっていたが。

「三対一か、舐められたものだな。下らないミスをして折角の機会をふいにしてくれないよ」

「そちらこそ慢心もほどほどにしておくんだな、君ごと足元を掬われるのはごめんだ」
こんな時にまで悪態を交えている二人をどうサポートすれば良いか考えきれずにいたルドルフへ、ふいに視線を向けてきたマキアスは申し訳なさそうな面持ちを見せる。「付き合わせてすまない。だがもし教官に勝てたなら……埋め合わせには何でもさせてもらおうよ」

「マキアス……」

それほどまでに彼は何故ユーシスを、貴族の事を頑なに拒むのか気になると同時に余裕が無くしてしまっているせいで漏らしてしまったのだろうマキアスの言葉にルドルフは気を引かれてしまう。

「もう準備はいいかしら？ それじゃあ——実技テストの補習と行きましようか！」
戦闘開始の口火を切ったのはサラが手にした導力銃の銃声だった。

真正面からの銃撃にユーシスとマキアスが左右に飛び退いて射線から逃れ、いち早く斬り込もうとしたユーシスだが。

「っ!？」

いつの間に踏み込んだというのか、次の瞬間には目前まで迫っていたサラが振るって

いたブレードを咄嗟に騎士剣で受け止める。

「この——っ」

銃のセレクトターを切り替えマキアスが一粒式の銃撃を見舞おうとするも、サラは手元でブレードを閃かせ柄本から枝分かれた弧状の刀身で騎士剣を絡め取り引き寄せることで自身とマキアスとの間にユーシスを割り込ませてしまう。

ユーシスが盾代わりとされてしまいマキアスの引き金にかけようとしていた指が止まる、その瞬間にサラはすかさずアーツの駆動体勢に入っていたルドルフへ導力銃を撃ち放った。

「くっ!?!」

咄嗟に盾を構えるのが間に合ったものの、拳銃のものにしては重い——消費する導力を高め威力を強化された銃撃にアーツの展開が解けルドルフは防戦を余儀なくされる。

そうしてアーツの発動を防ぎながらサラは体勢を立て直しユーシスが繰り出した刺突の連撃を苦も無く打ち払っていく。

自身の剣技がまるで脅威とされていまいかのようなサラの余裕の表情に焦れたユーシスが踏み込みを強く、全力を込めた突きを放つが——

「ちよつと剣筋が正直過ぎるわね」

「なっ!」

それまでより力の乗った一撃を見誤らずサラはブレードで受けた刺突を滑らせ、懐にまで距離を詰めるとユーシスの鳩尾へと膝蹴りを叩き込んだ。

咳き込みながらユーシスがよろけ膝を地につけてしまう中、ようやく回り込みサラの後方に位置取ったマキアスが銃口をサラへと向けるのだったが。

「捉え——」

銃弾が放たれるタイミングが分かっていたようにサラが身を低くしたことで他愛も無くその射撃は躲されてしまう。

そのまま地を蹴り向かってくるサラの速さに先台をスライドさせ次弾を装填していたマキアスの背筋を冷や汗が伝う。

対応が間に合わないだろうそこへ駆けつけたルドルフが割り込むとマキアスをかばい防壁を出力しながら盾を構えるのだったが、次の瞬間サラのとった行動に目を剥かされる。

顔面へ向けられた銃口、致命傷になりかねない部位へ狙いを向けられたことにまさかそこまでするだろうかという念がルドルフの頭には浮かぶが、それでも反射的に盾の本体で顔をかばってしまった。

そうして自ら視界を覆わせることが真の狙いだったことに気づいたときには遅く、見失ってしまったサラはルドルフの脇を一瞬で駆け抜けカバーされたことで僅かに気を

弛めてしまっていたマキアスを強襲した。

得物が銃器ということもありユーシスよりも近接戦闘を不得手とするマキアスが抗しきれぬわけもなく、あつさりとブレードの一閃に銃を弾き飛ばされてしまう。

「——っ」

三対一でありながらユーシス達の攻めの一切が通用せず、逆に振り回されてしまっている一方的な展開には見守っていたリイン達も舌を巻いてしまう。

彼女が底知れない実力の持ち主であることは薄々誰もが感じていた、しかしここまで差があるものなのかと。

スルーされたルドルフが後ろから攻めかかるも後ろに目がついているかのような察知能力で振り向いたサラは向こう見ずにも両刃のブレードを掴み取ろうとするように伸ばされた手に一瞬眉根を顰め。

「か——はっ！」

穿つような鋭い蹴りで迎え撃った。

痛みに呻きながらもなんとか動きを止めようと掴みかかるルドルフだったが十分な手応えに反し、動きに怯みが見られないのを警戒したサラはその場から飛び退くと立ち直ったユーシス、弾かれた銃を拾い上げたマキアス、それをかばうように位置取ったルドルフを視界に収めた。

その息一つ乱していない立ち姿と対照的に大なり小なりのダメエージを負わされてしまった三人は挑みかかったときは異なる感情からくる険しさに表情を歪めてしまう。

どんな手段を尽くしても容易く凌駕されてしまう、そんなイメージが僅かな攻防だけで彼らに刻み込まれてしまっていた。

「もう終わりかしら？ 威勢の良かったわりに案外不甲斐ないのね」

分かりやすい挑発にも歯噛みすることではか応じることが出来ない。

まともに戦っても自分達では一矢報いることもできないのだとユースもマキアスも——そしてルドルフも理解してしまった。

「……マキアス」

「ルドルフ……どうしたんだこんな時に、何か手があるのか？」

「はい、ですがこれを使うには少々僕にも覚悟が必要となりますのでどうか一つだけ確認させて下さい。

先程埋め合わせに何でもして頂けると仰られたこと、信じて構いませんか？」

礼を約束させるような、それまでのルドルフの人物像にそぐわない質問に一瞬ポカんと目を丸くしてしまうマキアスだったが、冗談を言っているわけでもなさそうな気配にやがて首を縦に振って示す。

「ああ、何でも、というのは言い過ぎだが……貴族と仲良くしろなんていうものじゃなけ

れば、約束しよう。」

「——ありがとうございます」

ルドルフ自身の考えで言うならばマキアスとユースの不仲を無理に仲裁しようとは思わなかった。

誰にでも苦手とするものはあり、出来ないと言っていることを無理強いても仕方がないではないかと。

ただ一つ、先月の特別実習後からマキアスに避けられるようになったリイン、密かに恩義を感じている彼の気落ちした表情を見てしまうとルドルフは胸の内に言葉に表すことのできない感情が湧いてくるのを自覚してしまったのだ。

リインとの関係をこじらせてしまったアリサを見守っていたときと同じ、手助けしたくとも出来ないもどかしさ。

この感情がなんであるか理解も出来ない自分には彼らの仲裁など出来はしないだろうという諦めでもあった。

けれど彼なら、アリサだけでなくルドルフには何に對して葛藤していたのか気づくこともできなかったラウラとも和解することが出来た彼にならそれが出来るのではないかと思ひ至る。

切っ掛けだけでも、作りたい。

その動機の発露が何からくるものか、自覚すらせずにルドルフは導力器仕掛けの脚に組み込まれた機能の封を開く。

「!?」

ルドルフが踵を踏みつけたブーツの脛部が音を立てて吹き飛び、導力義肢の鋼色が晒される。

流線形の滑らかなシルエツトの後部にはスリットが並び、傍目には金属製の脚甲のようでもあるそれが彼にとっては脚そのものであることに間近で見ってしまったマキアスだけでなくその場の全員が気付いていく。

「……っ、ルデイー！」

ルドルフが導力義肢に組み込まれた機能の本領を發揮しようとしていることに気づいたアリサが叫ぶ。

自分の事を気遣ってくれている彼女に心配をかけてしまうことを申し訳なく思いながらもルドルフは身を低く屈め姿勢を整えた。

驚く様子を見せながらもその程度がマキアスらほどでなかったサラは薄々その体の事情に勘付いていたのだろう。

ブレードと導力銃を構えなおしたその姿に、この切り札まで通用しなかったらどうすればいいだろうかという懸念がルドルフの脳裏をよぎる。

考えても仕方のないことではあるが時として精神状態のぶれが技の精度に支障をきたす時もある。

余計な不安を振り払うにはどうすれば良いか、その解決策として浮かんだのは太刀を振るう際に時折彼が口にする八葉という流派の技の名。

技の名を口にすることに意味など無いとも思えるが、型の鍛錬をする彼の姿を思い起こすとそうではないのかもしれないとルドルフは思う。

適した形、精神状態の自分をつくりだす為の儀礼動作、^{ルーティン}その考えは不思議としつくり胸に落ちた。

だからそれに倣い、どこかむずがゆさを感じてしまいながらもルドルフは技の名の代わりに、自分の名がつけられた鋼の脚の正式名称を囁く。

「――噴式飛翔機関、^{シュ}Schwalbe^{ヴァ}。駆動、開始！」

その瞬間ルドルフの足元で、大気が爆ぜた。

風のブーツが炸裂したような爆音を残して掻き消えたルドルフの姿を目で追えた者はその場に居なかった。

次いで響いた金属同士の衝突音、その発生源へ目を移したときようやく皆が文字通りの瞬間にサラへと突貫したルドルフの姿を目視する。

「ハ、のー」

見舞われようとしていた超加速の勢いが乗った膝蹴りを咄嗟に腕を添えたブレードの腹で受けとめていたサラの表情からは先程までの余裕が消えていた。

しかしルドルフの方も防御を間に合わせたサラの反応速度——というより予測精度に舌を巻かされている。

通常の動作からでは有り得ない加速による強襲は人の反応速度で対応できる限界を超えている、それを可能としたのはサラが積み重ねた戦闘経験による危機察知、恐るべき精度の先読みによるものだった。

膝蹴りの威力のほとんどを流し切った体捌きも相まって改めてこの教官の底知れなさをルドルフは思い知る。

そのまま彼女が黙っている筈もなく、反撃に振るわれたブレードの刃を後ろへ高く跳び上がることで回避したルドルフを、反射的にサラは追い打ってしまったていた。

「しまった——」

不意打ちで追い込まれてしまった故に加減抜きで射撃してしまいサラが焦り見る前で、ルドルフは予想を裏切りまるで宙に浮いた不可視の氷盤を滑るかのよう滑らかな

動きで横滑りに射線から逃れる。

「——っ、そういうこと！」

何かに得心がいったような言葉を漏らしたサラを再び轟音と共に導力義足のスリットから噴射炎を迸らせてルドルフが猛襲する。

回避も間に合わない接近速度にブレードを構えるサラだったが、それを見越していたルドルフは地を窪ませるほどの勢いで目の前に着地し——

「っ！」

今度こそ構えられていたブレードと導力銃を両手で掴み押さえた。

押そうとも引こうともびくともしない拘束の力強さはついにサラの額に汗を滲ませる。

「ユーシス！ マキアス！」

「——っ、ああ！」

そして三対一という状況は変わっていない、呼び掛けられることでルドルフの常識外れした機動に自失から返った二人が詰めにかかる。

一転して有利の側が移り変わった状況にⅦ組の面々が息を呑む中、押さえ込まれたサラは悔やむように小さく息を漏らす。

その口から漏れる呼吸の響きが変じたことに、ある既視感を感じたルドルフはハッと

気付くも——一手遅かった。

「悪いわね」

目を見開いたサラの体から練り上げられた氣と共に迸る紫電。

彼女特有の戦技クラフトの予兆が見えた時には既に遅くブレードが纏った雷に灼かれたルドルフが一瞬怯む、その一瞬だけで彼女には十分だった。

拘束を抜けたサラは全身に氣と紫電を纏ったまま、追い打ちにかかっていたユーシスを捉える。

「遅いー!」

「ぐっ……」

振るわれたブレードに込められた重みはそれまでの比ではなく、辛うじて受け太刀が間に合いなながらもユーシスは大きく後ろへ跳ね飛ばされ、立ち上がることもすらできなくなる。

「アルバレア! この……っ!」

ユーシスもルドルフも傍から離れたことで思い切ったマキアスが散弾式に切り替えた銃撃を放つが、放射状に広がる銃弾の雨をサラは振り下ろしたブレードが巻き起こす風圧だけで撃ち飛ばす。

銃撃すらも正面から打ち破る圧倒的な力に言葉を失くすマキアスへ、ブレードと同じ

ように紫電を纏う銃口が向けられた。

咄嗟にマキアスはARCSに指を走らせ防御壁を展開するも、放たれた氣を込められた銃弾は防御壁を突破し炸裂する。

非殺傷性の弾が込められていたのか銃弾は貫通に至らなかったものの、全身を打つ衝撃と痺れにマキアスは力なく倒れ伏してしまふ。

アンゼリカと同じ、氣を用いた身体強化技法。

介入する暇も与えず二人を無力化してしまったサラの本氣に一旦退き再度仕掛けようと構えていたルドルフだったが。

サラのブレードが纏う雷光が勢いを増し、刀身を越えて伸びていくのを目の当たりにし背筋に悪寒が走るのを感じてしまふ。

その予感はずしく、地へ叩き付けんばかりの勢いで大上段から振り下ろされたサラのブレードから放たれた目を眩ませるほどの紫電がルドルフへと襲いかかった。

「ま、だ——っ」

常識離れた高速機動が出来てもルドルフの思考速度までもがそれに追従してくるわけではない。

反射的に盾の防御壁でそれを受け止めるが——雷閃はそれすら突破し、全身を打つ痺れを感じた瞬間、ルドルフの意識を刈り取ってしまった。

夜の第三学生寮、一階エントランスのソファアに身を沈めていたサラは口を開けたビールにもあまり手をつけず物憂げな表情を浮かべていた。

酒の肴も無く、というのも生徒達は実技テストに疲れや諸々の軽傷を癒すために休ませてしまい、その気になればサラも自分で軽く一品程度つくることはできるのだった。

「はあ……やっちゃったわねえ」

そんな気にすらかなれないほどの自己嫌悪に陥ってしまったているのだった。

当然その原因は実技テストでそのうち来るだろうと思っていた二人が不満を爆発させた結果のあの戦い。

教官として、大人として軽く窘めるつもりだった筈が予想外に追い込まれてしまったせいで本気を出してしまった。

その未熟さを恥じるあまり生き甲斐の一つとも言えるアルコールにも興が乗らない始末となっている。

「へい、いんてー？」

「へこみもするわよそりやあね。……また起きてたのアンタ」

後ろから掛けられた声、階段を降りてきたファイの言葉に返しながらサラは先月のテスト後にも同じようなことがあったことを思い出していた。

「またホットミルク？ 今日ルドルフも部屋に戻ってるわよ」

「知ってる」

「……まさか慰めにでも来てくれたのかしら？」

「別に」

対面へと腰を落としたファイに問い掛けるサラだったが返事通り向けられた眠たげな瞳にそんな気配が無さそうなことを感じ取りため息を一つ吐いて見せる。

「そこは嘘でもうんって言っておきなさいよ、傷心中の相手の前なんだから」

「ユーシス達もそうだけど、サラだって自業自得だし」

遠慮なしに痛いところを突かれてしまいサラも口をつぐんでしまう。

あの二人を窘めるにしてもそれが強引な手法だったことや、煽るような真似をしてしまったことは確かに軽率と言われても仕方のないことだった。

それこそ軍から出向している同僚の実直ではあるがお堅いナイトハルト教官辺りに知れば何と言われるか分かったものではないぐらいに。

「——流石に紫電の本気がこんなところで見えるなんて思ってたけど」

「まあ、ね……あの子があそこまでのものを隠してたとは思わなかったわ」

前職での二つ名で呼ばれ、そんな自分が失態を演じてしまったことがサラにとっては何だか歯がゆかった。

そこまで口にしなかったファイも気づいているだろう、あの戦いでサラが彼らに膝を屈してしまう可能性があったことに。

もしユースとマキアスがあの一瞬だけでもわだかまりを捨て、ルドルフが切り札を切るのに合わせ戦術リンクで連携していたならば。

もしサラが本気を出すことを躊躇い、氣功を用いるのが僅かにでも遅れていたならば。

勿論サラが初めから本気で彼らと戦えば十戦中十戦勝つことが出来る。

ルドルフの隠し玉についても大よそは理解できた、重力という物理法則を無視した動きと超加速に驚かされこそしたが次があっても遅れをとることはないだろう。

だが相手に本気を出させないことも戦い方の一つなのだ。

余裕を見せて、地力を隠しているもそれを出す暇も無く倒されてしまえば負けは負け。

後から本気を出していませんでしたなどと言ってもそれは負け惜しみにしかならない。

たらればを言い出せばきりが無いとはいえ、そうなってしまふ可能性があるまま負けるわけにはいかない戦いに臨んだ時点でサラは詰めが甘かったのだ。

何よりもそれがサラを自己嫌悪に陥らせている今回の手落ちだった。

「それにしてもルドルフ、随分早く晒しちやったわね。もうしばらくかかるかと思つてたけど……アンタは気づいてたの？」

「手足が生身じゃなさそうなのは。多分リインとラウラもね」

アリサを除いたⅦ組のメンバーの中にも彼の体について勘付いている者は居たが、今回の件で皆がそれを知ることとなった。

それが彼らの関係性にどのような影響を及ぼすか、そればかりはサラにも予想しきることとはできない。

「荒療治のつもりなの？」

「ん、何の話？」

「……班分け」

じつと責めるような目で見てくるフィーから目を反らすサラだったが、彼女自身その振り分けについてはぎりぎりまで決めあぐねていた。

ユースとマキアスの関係性についてはこのまま放置しておけばⅦ組全体に悪影響を及ぼしかねない。

頭ごなしに説教したところで反発されかねない彼らに互いで歩み寄る可能性を見出させることが出来そうなのはサラの見たところⅦ組の中心——というより重心ともいうべき影響力をもたらし持っているリインも有力だった。

しかし教官としてユーススらだけでなく、ルドルフの歪な面もまた放つてはおけないところ。

今回の実習でルドルフをA班に組み込んだのはアリサを通じてリインと関わることで着実に何かが変わってきている彼がユーススとマキアスの関係に新たな変化の切っ掛けをもたらすのではないかという願望もあり——あながちフィーの言う荒療治というの間違つてはいない。

下手をすればまたあの二人に振り回されることになるフィーからすれば面白くは無いだらう目論見をサラは口に出さなかった。

「若者の可能性に期待つてところかしら。それよりも来月には座学の間テストだってあるの忘れてない？ 勉強もちゃんとしておきなさいよ」

「……誤魔化した」

そうしてフィーの追及から逃れようとするサラの姿は軽薄にも見えたが——生徒達を適切に導きたい、彼らの前で口にしたその言葉だけは偽りの無い、真摯なものだった。